# 六供東京安寺遺跡

前橋都市計画事業六供土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1999

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

# 六供東京安寺遺跡

前橋都市計画事業六供土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1999

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

1．六供東京安寺遺跡Ｆ区全景

2．六供東京安寺遺跡出土遺物

# 序

北に赤城山、西に榛名山、南西に妙義山の上毛三山がそびえ、その赤城山と榛名山の裾野の間を南北に利根川が流れる、水と緑にあふれた地に前橋市はあります。

前橋市は古代よりの文化に富んだ地で、東国の奈良と称されています。今から二万八千年前の旧石器から９基を数える国指定の古墳、関東の華とうたわれた前橋城、明治からの発展を物語る群馬県庁などの近代化遺産を始めとして多くの文化財があります。

自然環境に恵まれたこの地では、人々が古代から生活を営んできた跡が市内いたるところに見られます。古代東国の中心地としての生産力のある土地とも言え、埋蔵文化財の宝庫ともいえます。古代の遺跡の発掘調査による歴史を変える発見が毎年のようにあり、本年の発掘調査でも貴重な資料を得ることができました。

前橋市六供地区は市内でも最も早く町として発達した地区といわれ、中世の史跡が残っています。また、この地区は古代の条里水田のあったところで、近くにそれを示す「市之坪」の地名が残されています。六供の地名も中世の伝承によるものとも、条里制によるものともいわれています。

この六供地区の区画整理実施にともなう発掘調査が行われ、平成10年度は六供東京安寺遺跡で縄文時代の土器・石器と古墳時代の住居跡、溝、奈良・平安時代の住居跡、掘立柱建物、水田跡の調査と六供下堂木Ⅳ遺跡で「小幡氏の墓」と呼ばれている墓地の調査を行いました。

六供地区にとっての始めての発見も多く、前橋市の歴史を解明する貴重な資料を得ることができました。発掘調査は今後も続きますが、また新たな発見が期待されます。

発掘調査にあたりまして、ご協力いただきました区画整理第一課、地元関係者、酷暑のなか調査に従事されました皆様方に感謝とお礼を申し上げます。

平成11年３月

前橋市埋蔵文化財発掘調査団
団　長　　渡　辺　勝　利

# 例　　言

1．本書は、前橋都市計画事業六供土地区画整理事業に伴う六供東京安寺（ろっくひがしきょうあんじ）遺跡発掘調査報告書である。

2．遺跡は、群馬県前橋市六供町６７３－１番地ほかに所在する。

3．調査は、前橋市埋蔵文化財発掘調査団 団長 渡辺勝利が、前橋市長 萩原弥惣治と委託契約を締結し実施した。

調査担当および調査期間は以下の通りである。

| | |
|---|---|
| 発掘・整理担当者 | 吉田聖二（前橋市埋蔵文化財発掘調査団　発掘調査係） |
| | 高山　剛（　　同　　上　　） |
| 発掘調査期間 | 平成10年４月27日～平成10年10月９日 |
| 整理・報告書作成期間 | 平成10年10月12日～平成11年３月23日 |

4．本書の原稿執筆・編集は吉田・高山が行った。発掘調査、整理作業にかかわった方々は次のとおりである。
石山日出男・大島きく江・北爪雄作・品川成夫・鈴木民江・須田隆治・高橋公代・多田啓子・中林美智子・長井武之・堀込とよ江・松本美咲子・森田純子・山口淳子

5．発掘調査で出土した遺物は、当調査団より前橋市教育委員会に保管責任を依頼し、前橋市教育委員会文化財保護課で保管されている。

# 凡　　例

1．挿図中に使用した北は座標北である。

2．挿図に建設省国土地理院発行の1/2.5万地形図（前橋）を使用した。

3．本遺跡の略称は10Ｈ28並びに10Ｈ29（付編　六供下堂木Ⅳ遺跡）である。

4．各遺構及び遺構施設の略称は次のとおりである。

Ｈ…竪穴住居址　　Ｋ…掘立柱建物　　Ｄ…土坑　　Ｗ…溝址　　Ｉ…井戸址

Ｐ…柱穴（ピット）　Ｆ…墓坑

5．遺構・遺物の実測図の縮尺は次のとおりである。

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 遺構 | 住居址・土坑…1/60 | 竈断面図…1/30 | 溝址…1/100・1/120他 | 全体図…1/200，1/300他 |
| 遺物 | 土器…1/3・1/4・1/6 | 鉄器…1/3 | 石器…1/3・2/3 | |

6．スクリーントーンの使用は次のとおりである。

遺構平面図　焼土……

遺構断面図　構築面……

遺物実測図　施釉範囲……　　炭化物（スス付着など）……

須恵器断面……　　灰釉陶器断面……

# 目　　次

序 …… i

Ⅰ 調査に至る経緯 …… 1

Ⅱ 遺跡の位置と環境

1 遺跡の立地 …… 1

2 歴史的環境 …… 1

Ⅲ 調査の経過

1 調査方針 …… 4

2 調査経過 …… 6

Ⅳ 層序 …… 7

Ⅴ 遺構と遺物

1 竪穴住居址 …… 13

2 掘立柱建物址 …… 15

3 土坑 …… 15

4 井戸址 …… 15

5 溝址 …… 15

6 水田址 …… 17

7 グリッド等出土遺物 …… 17

Ⅵ 考察

1 縄文時代～近世の遺構・遺物について …… 18

2 平安時代後期水田址について …… 22

付編

1 六供東京安寺遺跡の自然科学分析（株式会社 古環境研究所） …… 52

2 小幡家墓地（六供下堂木Ⅳ遺跡）の緊急発掘調査報告 …… 63

# 図　　版

口絵　1　六供東京安寺遺跡Ｆ区全景
　　2　六供東京安寺遺跡出土遺物

PL.　1　Ａ区畦畔、Ｂ区道路状遺構、Ｄ区全景
　　2　Ｈ－１号住居址、Ｗ－２・３号溝址
　　3　Ｅ区全景、Ｈ－２・３号住居址
　　4　Ｈ－４、Ｗ－５～９、Ｉ－１
　　5　Ｆ区全景、Ｋ－１・２、Ｗ－５・10～12、Ｈ－５
　　6　Ｈ－６・８号住居址
　　7　Ｈ－７・11・12号住居址
　　8　Ｇ１区全景・近景
　　9　Ｇ１区畦畔
　　10　Ｇ２区全景・畦畔／Ｆ－２・３（六供下堂木Ⅳ遺跡）
　　11　Ｈ－１～４・６～８出土の土器
　　12　Ｈ－８、Ｉ－１、Ｗ－１～５・９出土の土器
　　13　Ｗ－14、グリッド等出土の土器、鉄器、石器
　　14　縄文土器、石器／六供下堂木Ⅳ遺跡出土遺物

# 挿　　図

頁

Fig.　1　位置図と周辺遺跡図 …… 2
　　2　調査区設定図 …… 5
　　3　標準土層図 …… 7
　　4　六供東京安寺遺跡Ａ・Ｂ区全体図 …… 8
　　5　六供東京安寺遺跡Ｄ・Ｅ区全体図 …… 9
　　6　六供東京安寺遺跡Ｆ区全体図 …… 10
　　7　六供東京安寺遺跡Ｇ１～３区全体図 …… 11
　　8　六供東京安寺遺跡、六供中京安寺遺跡、
　　六供下堂木Ⅱ・Ⅲ遺跡全体図 …… 25
　　9　Ｈ－１・３号住居址 …… 32
　　10　Ｈ－２・４号住居址 …… 33
　　11　Ｈ－５・６号住居址 …… 34
　　12　Ｈ－７～９号住居址 …… 35
　　13　Ｈ－10～12号住居址 …… 36
　　14　Ｋ－１・２、Ｄ－１～３、Ｉ－１ …… 37
　　15　Ｗ－１～４号溝址 …… 38
　　16　Ｗ－５～９号溝址 …… 39
　　17　Ｗ－５・10～12号溝址 …… 40
　　18　Ｗ－13～15号溝址 …… 41
　　19　Ａ区水田址 …… 42
　　20　Ｂ区道路状遺構 …… 43
　　21　Ｇ１区水田址（１）…… 44
　　22　Ｇ１区水田址（２）…… 45
　　23　Ｇ２区水田址 …… 46
　　24　Ｈ－１～４・６～８出土の土器 …… 47
　　25　Ｈ－８・11、Ｉ－１、Ｗ－１～３出土の土器 …… 48
　　26　Ｗ－４・５・９・11・14、グリッド出土の土器 …… 49
　　27　グリッド出土の土器、鉄器、縄文土器 …… 50
　　28　六供東京安寺遺跡出土の石器 …… 51
　　29　六供下堂木Ⅳ遺跡（小幡家墓地）位置図 …… 65
　　30　Ｆ－１～３号土抗墓平面図 …… 66
　　31　Ｆ－１～３出土の土器、銅銭 …… 67

# 表

頁

Tab.　1　六供東京安寺遺跡土器観察表 …… 28
　　2　縄文土器観察表 …… 29
　　3　鉄器観察表 …… 29
　　4　石器観察表 …… 29
　　5　水田址計測表 …… 30
　　6　畦畔計測表 …… 31
　　7　小幡家墓地の墓籍台帳、過去帳の写し及び墓石対応表 …… 66
　　8　六供下堂木Ⅳ遺跡土器観察表 …… 67
　　9　銅銭観察表 …… 67

調 査 協 力　　前橋市都市整備部区画整理第一課

# Ⅰ　調査に至る経緯

平成８年３月１日、前橋市都市整備部区画整理第一課より、前橋都市計画事業六供土地区画整理事業に伴う計画道路部分の埋蔵文化財試掘調査依頼が前橋市教育委員会に提出された。これを受け、同年３月５・６日、同市教委文化財保護課で試掘調査を実施したところ、良好な状態で遺構が検出されたため本調査が必要であることが確定した。この試掘範囲の一部について平成８年５月１日より六供下堂木Ⅱ遺跡発掘調査が実施された。その後、残りの部分が平成10年度の六供土地区画整理事業に伴う計画道路、本町六供線（16ｍ道路）・江田天川大島線（30ｍ道路）の開発範囲（2,700㎡）に該当したため、区画整理第一課と発掘調査について協議を進めることとなった。平成10年２月23日、前橋市長から前橋市教育長へ発掘調査の依頼が提出された。前橋市教育委員会が組織する前橋市埋蔵文化財発掘調査団はこれを受諾し、平成10年４月16日、両者間で発掘調査委託契約が締結され、４月27日に現地での発掘調査を開始するに至った。また、７月27日付で区画整理第一課より計画範囲拡大に伴う調査対象面積増加（2,700㎡→7,800㎡）による契約変更について協議があり、８月11日に本町六供線を挟む東西両調査区分（江田天川大島線）5,100㎡を加えた変更契約を締結したが、最終的な実調査面積は7,400㎡となった。調査区については、南北に走る本町六供線計画部分の北側からＡ・Ｂ・Ｃ・Ｄ区とし、東西に走る江田天川大島線を東からＥ・Ｆ・Ｇ区と呼称することとした。

なお、遺跡名称「六供東京安寺遺跡」（遺跡略称10Ｈ28）の「東京安寺」は旧地籍の小字名を採用した。

# Ⅱ　遺跡の位置と環境

## １　遺跡の立地

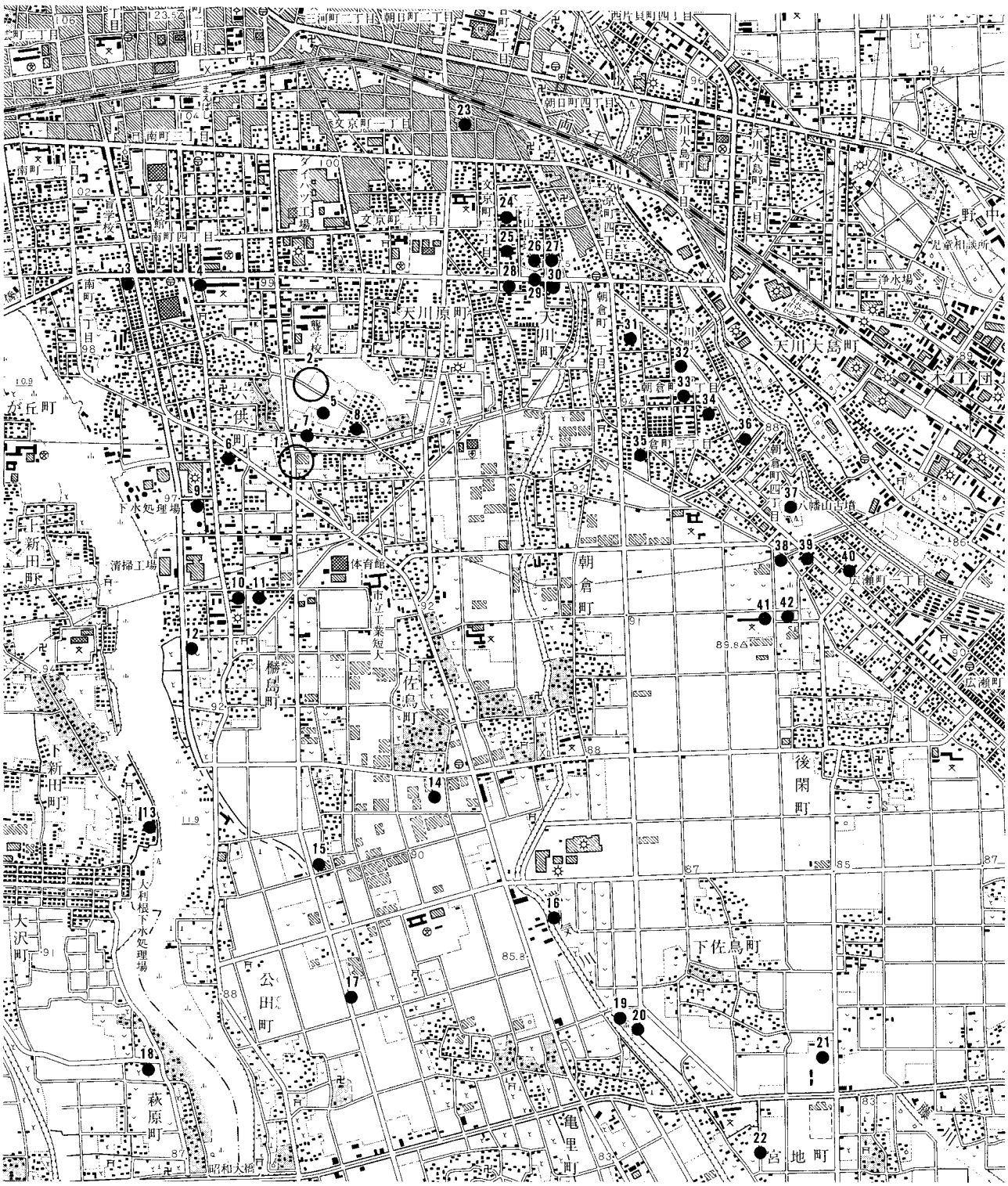
六供東京安寺遺跡は前橋市街地の南方にあり、ＪＲ前橋駅の南約1.5～２㎞に位置する。遺跡地の地番は前橋市六供町673－１番地ほかである。本遺跡の所在する六供町周辺には、利根川左岸に棚島町、上佐鳥町、公田町、朝倉町、後閑町、南町などの町々が点在している。また遺跡地の周囲には、前橋・玉村線をはじめ主要な幹線道が縦横に走っている。これらの幹線に沿って市街化・開発が進み、前橋市工科大学、六供清掃工場、下水処理場などの施設や住宅街が遺跡地を取り巻くように立ち並んでいる。ところどころに水田・畑作地も点在しているが、近年の区画整理等によりこのような田園風景も減りつつある。

遺跡の立地は、前橋市の南部及び西部を北東から南東に広がる前橋台地の東方、利根川左岸に位置する標高約96～97ｍの平坦な土地である。前橋台地は、火山泥流堆積物とそれを被覆する水性ローム層から成り立つ洪積台地で、東は広瀬川低地帯と直線的な崖で画され、西は榛名山東南麓に広がる相馬ケ原扇状地へと続いている。なお、遺跡地のすぐ西側を流れる利根川は広瀬川低地帯を流れていたと考えられており、現在の位置に変流したのは中世末期とされる。

## ２　歴史的環境

今回の調査によって、検出された主な遺構は古墳時代前期から奈良・平安時代にかけてのものが多いが、出土遺物には縄文時代のものもわずかではあるが検出されているので、ここでは本遺跡地周辺の歴史的環境を縄文時代から順に概観していくこととする。

棚島川端遺跡では上部ローム層に被覆された泥流丘上（赤城山起源の流れ山の一つが前橋泥流によって運ばれたものとみられる。）で縄文時代草創期後半の「撚糸文式土器」が２点発見され、本地域の歴史を一挙に数千年




1．六供東京安寺遺跡　2．六供下堂木Ⅳ遺跡　3．生川遺跡　4．西天神遺跡　5．六供下堂木Ⅱ遺跡　6．六供中京安寺遺跡　7．六供下堂木Ⅲ遺跡　8．六供下堂木遺跡　9．中大門遺跡　10．南京安寺遺跡　11．東京安寺遺跡　12．櫛島川端遺跡　13．下新田遺跡　14．上佐鳥中原前遺跡　15．公田東遺跡　16．下佐鳥遺跡　17．公田池尻遺跡　18．萩原団地遺跡　19．宿阿内城内遺跡　20．川曲遺跡　21．東田遺跡　22．宮地中田遺跡　23．不二山古墳Ⅰ・Ⅱ　24．寄居遺跡　25．県立文書館遺跡　26．天川二子山古墳　27．二子山前Ⅳ遺跡　28．二子山前遺跡　29．二子山前Ⅱ遺跡　30．二子山前Ⅲ遺跡　31．小旦那遺跡　32．朝倉２号墳　33．長山遺跡　34．朝倉１号墳　35．鎮守廻り遺跡　36．朝倉３号墳　37．八幡山古墳　38．後閑団地遺跡　39．坊山遺跡　40．天神山古墳　41．後閑遺跡　42．後閑Ⅱ遺跡

Fig. 1　位置図と周辺遺跡図

さかのぼらせた。このことは早い時期から本地域が生活の舞台となっていたことを示している。また、同遺跡で弥生時代後期前半の集落と中期後半の再葬墓も確認されている。住居は炉址や柱穴などが明確に残っているものは２軒のみであり、再葬墓はほぼ完形の甕に胴下半の一部をかぶせた状態で出土した。また、後閑町の広瀬団地付近では宅地造成中に「樽式土器」の甕棺が出土している。さらに、隣接する高崎市においては、日高遺跡、新保遺跡、大八木水田遺跡、中尾村前遺跡、新保田中遺跡、西島遺跡群、西横手遺跡等からAs－C軽石（浅間山起源：４世紀前半）下の弥生時代水田址が検出されている。

古墳時代に入ると、市内でも有数の古墳地帯が形成される。広瀬川右岸の低い崖上には、旧市域から旧上陽村の東善にかけて、約5.5kmにわたり、幅約70ｍの帯状に連なる古墳群が存在した。昭和10年の県下一斉調査では、前橋市15基、旧上川淵村113基、隣接する旧上陽村41基を数えた。しかし、戦前、戦中、戦後の開墾や昭和30年以降顕著になった宅地造成事業等により、大半は未調査のまま削平されてしまった。現在、八幡山古墳（国指定史跡、４世紀後半、前方後方墳、全長約130ｍ）、天神山古墳（県指定史跡、４世紀後半、前方後円墳、全長約129ｍ）、亀塚山古墳（市指定史跡、６世紀前半、帆立貝式古墳、推定全長約60ｍ）、金冠塚古墳（市指定史跡、７世紀前半、前方後円墳、全長52.5ｍ、立花型の金銅製の冠が出土）、経塚古墳（市指定史跡、７世紀、円墳、現状径約25ｍ）等に当時の古墳群の片鱗を窺うことができる。これらの古墳群が形成された背景には、有力な豪族とそれを支えた人々の存在が想起され、当地域が古墳時代の初期から継続的な発展をしていたことは明らかである。

また、住居址関連遺跡では古墳時代前期（石田川期）の後閑団地遺跡、六供下堂木Ⅱ遺跡、六供中京安寺遺跡、古墳時代後期（鬼高期）の後閑Ⅱ遺跡、坊山遺跡、川曲遺跡、下新田遺跡などが挙げられる。さらに、水田址関連のものとしてはHr－FA（榛名二ツ岳火山灰：６世紀初頭）下の水田が、栅島川端遺跡、公田池尻遺跡、公田東遺跡、六供下堂木Ⅱ遺跡などで確認されている。これらの水田はいずれも地形の傾斜に沿った小区画のものである。

奈良・平安時代の遺跡については、後閑団地遺跡、後閑Ⅱ遺跡で奈良・平安期の住居址や掘立柱建物遺構が検出されているほか、最近の調査成果としては、本遺跡に近い六供下堂木Ⅱ・Ⅲ遺跡、六供中京安寺遺跡においても奈良～平安時代の住居址の検出が報告されている。水田址については、まず利根川西岸に目を向けると、五反田Ⅱ遺跡（箱田町）や柳橋・川曲毘沙門前遺跡（川曲町）でAs－Bテフラ（浅間山起源：1108年）直下から条里制に起因する一定の規則性を持つとみられる平安時代後期水田址が検出されている。一方、利根川東岸においても、中大門遺跡（六供町）や後閑Ⅱ遺跡（後閑町）を先駆けとして、条里制の面影を残す水田址を検出する遺跡が相次いでいる。宮地中田遺跡（宮地町）、六供下堂木Ⅱ・Ⅲ遺跡（六供町）、上佐鳥中原前遺跡（上佐鳥町）などの周辺遺跡調査もその一部である。中でも宮地中田遺跡では、As－B下より平安時代後期の水田址92枚が検出された。ここで特筆すべきは、東西に３本、南北に１本検出された坪境畦畔によって、方格に区画（８の坪）された条里制水田址であることが確認されたという点である。このことは、今まで条里制水田址が確認された高崎東部・北部から利根川を挟み前橋南部にまで律令制（条里制）による土地制度がより広範囲に及んでいたことを示すものにほかならない。

本遺跡の所在する前橋台地周辺は、1970年代から1980年代にかけて上越新幹線や関越自動車道の建設に伴い、高崎市域を中心に大規模な古代水田の発掘が盛んに行われてきた地域である。特に利根川以西の前橋台地上においては、元総社を中心とした上野国府域に接していることもあり、条里水田の復元を目標にした平安時代水田址の調査が活発に行われてきた。本遺跡も隣接する南町に市之坪、一町田という地名が残り、南の公田町には三公田という地名が残っており、周辺には律令制（条里制）にかかわる水田址の存在が確実視されるようになった。最寄りの六供下堂木Ⅱ・Ⅲ遺跡では、畦畔の走行性等に条理的地割の可能性をもつ平安期の水田址が確認されている。今後も調査例の増加が予想される前橋台地上のAs－B下水田址の分析や検討を通して、本地区の条里制が

より明らかになるような調査成果が期待される。

最後に、本遺跡地の所在する六供町における寺院に係る遺跡存在の可能性についてふれておきたい。同町には、その小字名に中京安寺、南京安寺、東京安寺、北大門、中大門、南大門、上堂木、中堂木、下堂木、南堂木など、寺院を想定させる名称が残り、かつて「京安寺」と呼ばれる寺院が存在していたことを窺わせる。しかし、現在のところ京安寺に関連するような遺跡は残念ながらまだ発見されていない。今後の発掘調査の進展による究明が待たれるところである。

# Ⅲ　調査の経過

## 1　調査方針

委託された調査箇所は、東西に走る江田天川大島線（道路幅30ｍ）及び南北に走る本町六供線（道路幅16ｍ）が計画される部分の7,800㎡である。本遺跡は調査地が散在しているため、調査範囲北側からＡ・Ｂ・Ｃ・Ｄ区、東側からＥ・Ｆ・Ｇ区の７調査区に区分し、さらに、Ｇ区については１～３に小区分することとした。

グリッドについては、４ｍピッチで西から東へＸ１、Ｘ２、Ｘ３･･･と、北から南へＹ１、Ｙ２、Ｙ３･･･と付番し、グリッドの呼称は北西杭の名称を使用した。

六供東京安寺遺跡のＸ60・Ｙ70の公共座標は次のとおりである。

| | | | |
|---|---|---|---|
| 第Ⅸ系 | ＋40920.000ｍ（Ｘ） | －67560.000（Ｙ） | |
| 緯度 | 36°21′59″.3168 | 経度 | 139°04′49″.3401 |
| 子午線収差角 | 26′47″.3 | 増大率 | 0.999956 |

調査方法については、各遺跡ともＡ区から表土掘削・遺構確認・杭打設・遺構掘下・遺構精査・測量・全景写真撮影の手順で行うこととした。

図面作成は、平板・簡易遣り方測量を用い、水田址は1/40、住居址は１/20、住居址竈は１/10の縮尺で作成した。遺物については平面分布図を作成し、台帳に各種記録を記載しながら収納した。包含層の遺物はグリッド単位で収納したが、重要遺物については分布図・遺物台帳の記載を行い収納した。また、プラン確認の段階で１/100の現況図を作成し、その後の調査に活用した。

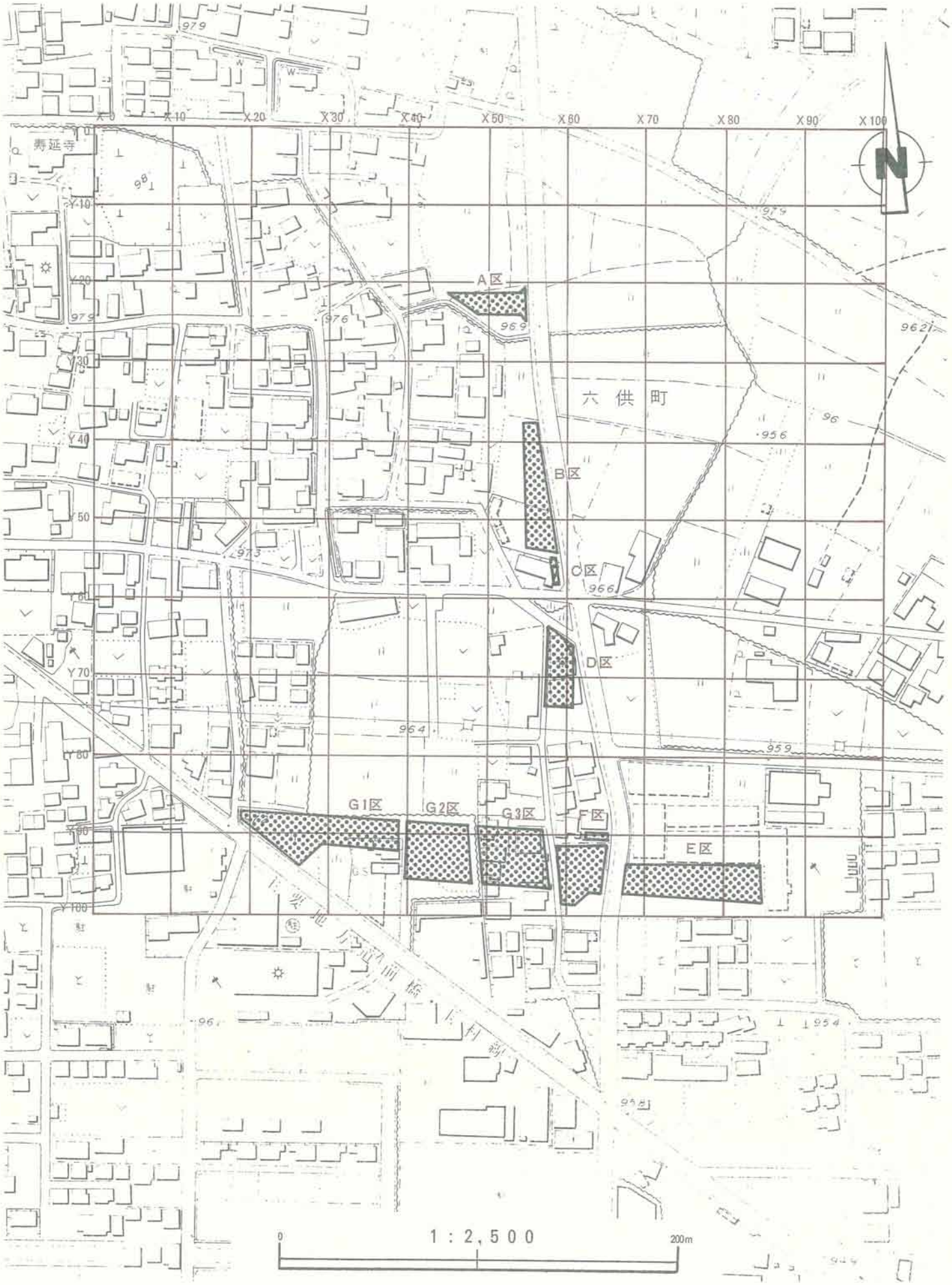

X0
X10
X20
X30
X40
X50
X60
X70
X80
X90
X100
Y10
Y20
Y30
Y40
Y50
Y60
Y70
Y80
Y90
Y100
寿延寺
A区
B区
C区
D区
E区
F区
G1区
G2区
G3区
六供町
N
1：2,500
0
200m

Fig. 2　調査区設定図

## 2　調査経過

4月27日、六供東京安寺遺跡A区の重機（バックフォー0.4㎥）による表土掘削を実施。翌28日にはB区の掘削に入る。掘削の結果、A区は後世の攪乱がひどく、辛うじて浅間Bテフラ（As－B，1108年：平安時代後期）直下の水田址4枚、畦畔2本を検出した。続くB区ではAs－B降下以降のものと考えられる道路状遺構を2カ所で検出。5月15日までにA・B区の調査は終了した。

5月19・20日両日に区画整理第一課の要請で墓地移転に伴う小幡家墓地の緊急発掘調査（六供下堂木Ⅳ遺跡）を実施し、近世土坑墓3基を検出した。

同20日、C区でトレンチ調査を実施したが、遺構は検出されなかった。5月11日、D区の表土掘削を開始。5月22日、F・G区の試掘調査を実施したところ水田、住居等の遺構が検出されたため、本調査をすることが決定した。5月27日、E区の表土掘削を開始すると同時にD区の調査に入る。D区からは奈良・平安時代の竪穴住居址・溝址・柱穴等を検出。遺物は刻書や墨書を施した特色ある土器が発見された。作業は順調に消化して行く様に思われたが、今年は梅雨が長引き7月下旬になっても梅雨明けせず、毎日の降雨により作業も停滞しがちであった。遺跡周辺部に水田も多く田植えの時期とも重なり、湧き水にも悩まされた。また、例年になく台風の上陸が多く、現場が水没してしまうことも多々あり作業の中断を余儀なくされた。その合間を縫うように6月から7月にかけてE区・F区の調査を行い、E区からは住居址、溝址、井戸址を検出。溝からは平安時代の長頸瓶や須恵器類等が出土した。F区は、竪穴住居址7軒、掘立柱建物址2棟、土坑3基、溝址4条等の遺構が密集する。お盆休み前の8月11日に調査面積の増加に伴う変更契約を締結し、休み明けの8月26日からG区の表土掘削を開始。G区はG1・2・3区の3カ所に細分した。G1・2区からはAs－B直下の水田址が検出された。G3区ではAs－Bの堆積は微量であり、水田等の遺構は確認できなかったが、As－C混土層まで掘削したところ溝址が確認された。9月に入り天候不順が続いたが、10月6日に委託業者による地質調査を、同月9日にG区全景写真撮影を行い現地での発掘調査を終了させた。

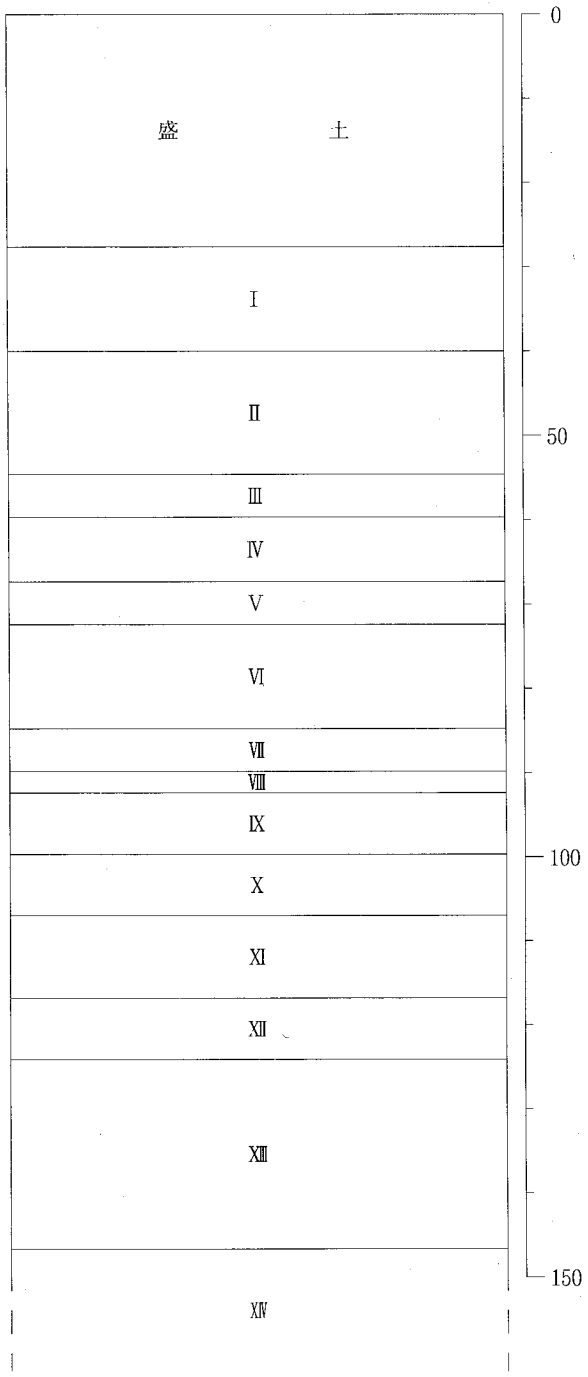
その後、翌週の10月12日より遺物・図面・写真等の整理作業に入り、翌年3月23日全ての作業を完了する運びとなった。

なお、E区に隣接している北側部分（約400㎡）に設置される農業用のビニールハウスは移転が遅れ本年度の調査が不可能となったため、調査面積は7,800㎡から7,400㎡に減少した。

# Ⅳ　層　　序

六供東京安寺遺跡は、前橋台地のほぼ中央部に位置している。前橋台地は洪積台地で、約２万４千年前に形成された厚さ10ｍ程の前橋泥流層と１万３千年前の泥炭層を挟んだ水性上部ローム層により形成されている。その後、榛名山二ッ岳や浅間山等の火山活動によるテフラや、それに伴う泥流堆積物の堆積を経て現在に至っている。

本遺跡の土層は、地形差によりテフラ等の堆積状況に若干の違いがあるが、代表的な層序として六供東京安寺遺跡Ｇ２区北壁西地点を標準土層とした。




Ⅰ層　暗灰色粗砂層　現在の耕作土。
Ⅱ層　黄灰色粗砂層
Ⅲ層　暗褐色粗砂層　As－B（浅間Ｂテフラ，1108年：天仁元年）を若干含む。
Ⅳ層　As－B純層
Ⅴ層　暗灰色細砂層　平安時代の水田畦畔確認層。
Ⅵ層　灰色微砂層　白色軽石を若干含む。
Ⅶ層　Hr－FA（榛名二ツ岳渋川テフラ，６世紀初頭）純層
Ⅷ層　黒灰色微砂層
Ⅸ層　黒灰色細砂層　As－C（浅間Ｃ軽石，４世紀前半）を若干含む。
Ⅹ層　灰色粗砂層　As－Cを多く含む。
Ⅺ層　黒色細砂層
Ⅻ層　灰色微砂層
XIII層　黄褐色微砂層
XIV層　青灰色微砂層

Fig.　3　標準土層図

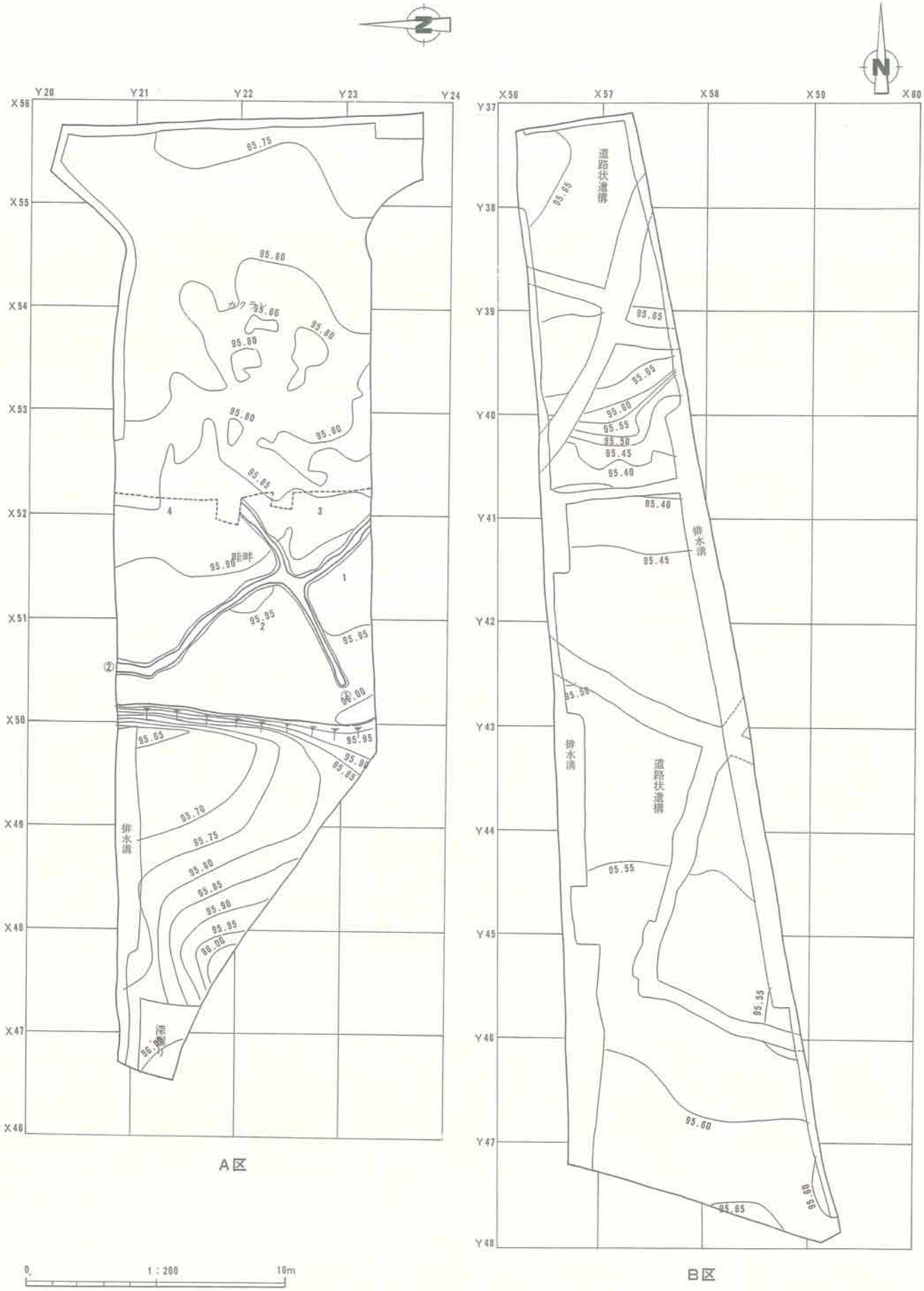



Fig. 4　六供東京安寺遺跡A・B区全体図

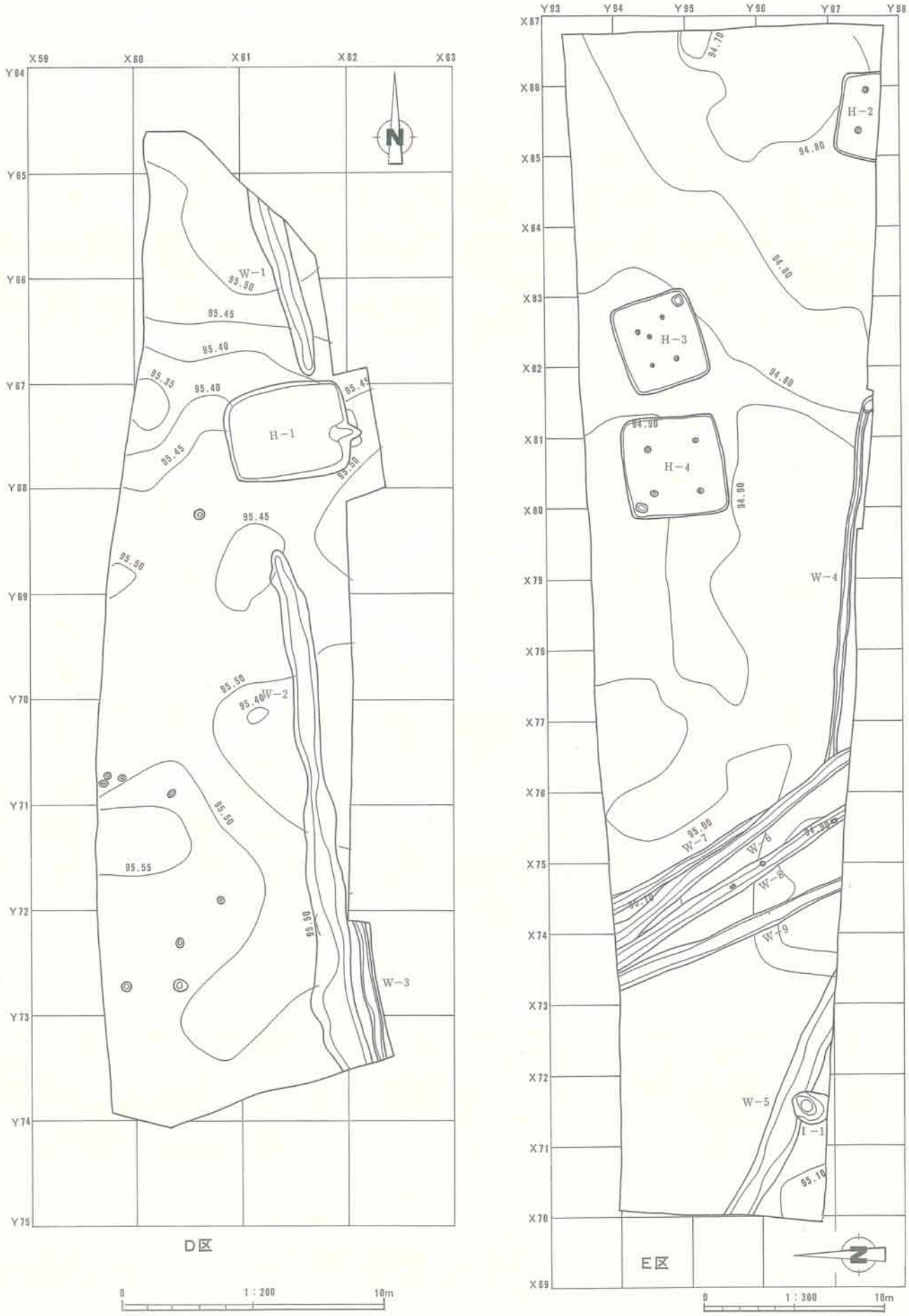



Fig. 5　六供東京安寺遺跡D・E区全体図

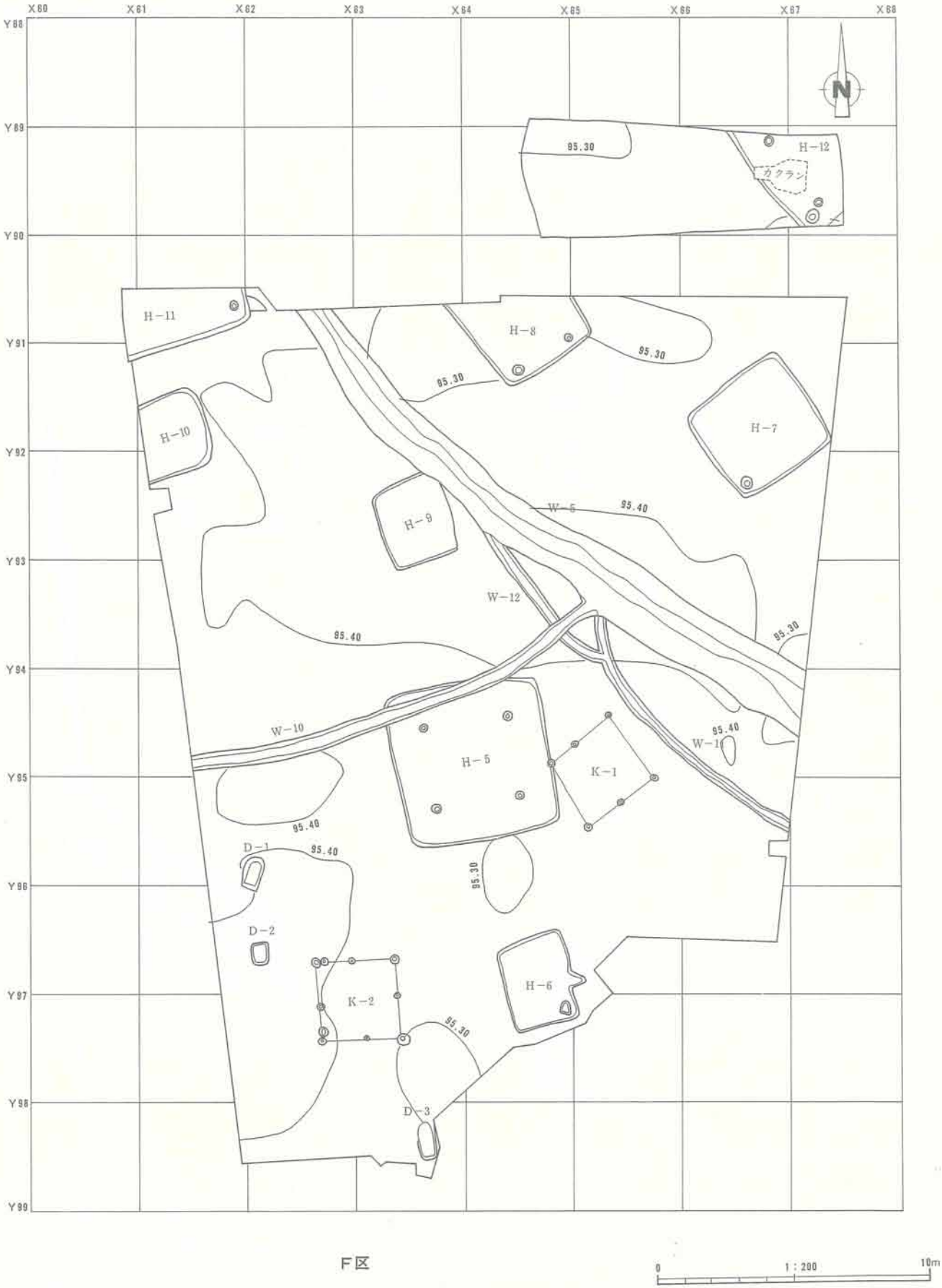



Fig. 6　六供東京安寺遺跡Ｆ区全体図

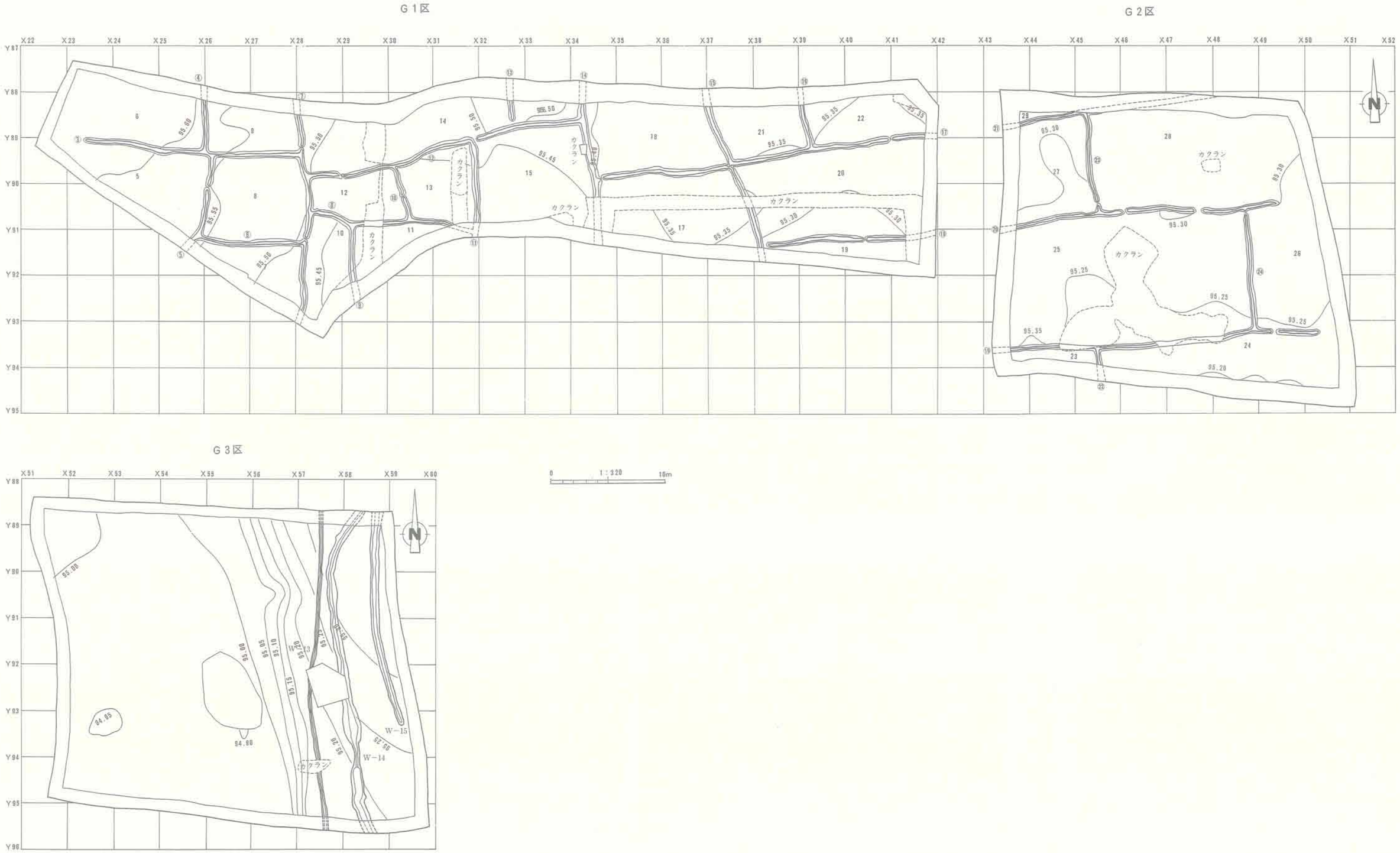



Fig. 7　六供東京安寺遺跡Ｇ１～３区全体図

# V　遺構と遺物

本遺跡で検出された遺構は、竪穴住居址11軒（古墳時代前期９軒、平安時代２軒）、溝址15条、土坑３基、掘立柱建物址２棟、井戸址１基、水田址29枚等である。

出土遺物は石田川式土器や奈良・平安時代の土器が中心で、遺構内2,741点、遺構外2,332点、総数5,073点が出土した。

縄文土器片や石器も数点出土したが、住居址等の遺構は検出されなかった。

調査地は住宅地にあり、後世の開発による攪乱を受けている部分も少なからずあった。特にＡ区は攪乱がひどく、最終的に確認できたのは水田畦畔２本のみであった。他調査区も開発による攪乱を受けてはいたが、畑作地や空き地であった部分も多く、少なからぬ遺構を検出できたことは幸いであった。当初、Ｂ区とＤ区に挟まれた地点にＣ区を設定したが、トレンチ調査の結果、遺構は確認されなかった。以下は、各遺構の概要である。

## 1　竪穴住居址

**Ｈ－１号住居址**（Ｄ区、Fig. ９・24、ＰＬ．２・11）

**位置**　X60～62・Y66･67グリッド　**面積**　15.92㎡　**方位**　Ｎ－80°－Ｅ　**形状等**　長方形。東西4.57ｍ、南北3.67ｍ、壁現高25㎝。　**床面**　ほぼ平坦な床面。竈周辺に堅緻な床面。　**竈**　東壁やや南寄りに設置。全長84㎝、焚口部幅36㎝、方位Ｎ－90°－Ｅ。燃焼部付近の側壁は河原石で補強される。竈の両脇には棚状の施設が付く。　**遺物**　総数172点。うち土器９点を図示した。　**備考**　覆土や出土遺物等から本住居址は８世紀末と考えられる。

**Ｈ－２号住居址**（Ｅ区、Fig. 10・24・28、ＰＬ．３・11・13）

**位置**　X84～86、Y97グリッド　**面積**　(10.84)㎡　**方位**　Ｎ－４°－Ｅ　**形状等**　南側が調査区外のため不明。東西5.00ｍ、南北（4.35）ｍ、壁現高14㎝。　**床面**　ほぼ平坦な床面。　**炉址**　検出されず。　**柱穴**　２基検出。$P_1$（36㎝×32㎝×30㎝）、$P_2$（34㎝×32㎝×30㎝）。　**遺物**　総数199点。うち２点を図示した。　**備考**　覆土や出土遺物等から本住居址は４世紀中葉と考えられる。

**Ｈ－３号住居址**（Ｅ区、Fig. ９・24、ＰＬ．３・11）

**位置**　X81～83、Y93～95グリッド　**面積**　23.50㎡　**方位**　Ｎ－18°－Ｗ　**形状等**　方形。東西5.18ｍ、南北4.62ｍ、壁現高16㎝。　**床面**　ほぼ平坦な床面。住居南東隅に貯蔵穴を検出。　**炉址**　地床炉を１基検出。住居中央のやや北東寄りに位置する。長径30㎝、短径29㎝を測る。炉を囲ったものか２個の石が列状に検出された。　**柱穴**　主柱穴４基、貯蔵穴１基を検出。$P_1$（29㎝×26㎝×29㎝）、$P_2$（22㎝×18㎝×28㎝）、$P_3$（26㎝×22㎝×28㎝）、$P_4$（23㎝×18㎝×38㎝）、$P_5$（66㎝×66㎝×26㎝）。　**遺物**　総数195点。うち土器１点を図示した。　**備考**　西側を除く三方の壁際に夥しい量の焼土が確認されたため焼失住居である可能性が高い。覆土や出土遺物等から本住居址は４世紀中葉と考えられる。

**Ｈ－４号住居址**（Ｅ区、Fig. 10・24、ＰＬ．４・11）

**位置**　X79～81、Y94･95グリッド　**面積**　31.52㎡　**方位**　Ｎ－83°－Ｅ　**形状等**　方形。東西5.82ｍ、南北5.72ｍ、壁現高13㎝。　**床面**　ほぼ平坦な床面。住居北西隅に貯蔵穴を検出。　**炉址**　検出されず。　**柱穴**　主柱穴４基、貯蔵穴１基を検出。$P_1$（33㎝×32㎝×38㎝）、$P_2$（34㎝×28㎝×42㎝）、$P_3$（26㎝×25㎝×55㎝）、$P_4$（30㎝×27㎝×53㎝）、$P_5$（78㎝×66㎝×28㎝）。　**遺物**　総数103点。うち土器２点を図示した。　**備考**　東壁付近から焼失した住居の部材と考えられる炭化した木片が焼土と共に多量に検出された。覆土や出土遺物等から本住居址は４世紀後半と考えられる。

**H－5号住居址**（F区、Fig. 11、PL. 5）

**位置**　X63･64、Y94･95グリッド　**面積**　33.32㎡　**方位**　N－81°－E　**形状等**　方形。東西5.93m、南北5.84m、壁現高23cm。　**床面**　ほぼ平坦な床面。　**炉址**　検出されず。　**柱穴**　4基検出。$P_1$（29cm×27cm×25cm）、$P_2$（34cm×32cm×35cm）、$P_3$（29cm×28cm×35cm）、$P_4$（32cm×32cm×46cm）。　**重複**　W－10と重複しており本遺構が古い。　**遺物**　総数105点。　**備考**　覆土や出土遺物等から本住居址は4世紀末と考えられる。

**H－6号住居址**（F区、Fig. 11・24、PL. 6・11）

**位置**　X64･65、Y96･97グリッド　**面積**　8.45㎡　**方位**　N－76°－E　**形状等**　長方形。東西2.65m、南北3.50m、壁現高15cm。　**床面**　ほぼ平坦な床面。住居南東隅に楕円形の貯蔵穴。主柱穴は検出されず。　**竈**　東壁やや南寄りに設置。全長72cm、焚口部幅45cm、方位N－82°－E。　**柱穴**　貯蔵穴1基を検出。$P_1$（53cm×48cm×14cm）。　**遺物**　総数56点。うち土器1点を図示した。　**備考**　覆土や出土遺物等から本住居址は10世紀前半と考えられる。

**H－7号住居址**（F区、Fig. 12・24・27・28、PL. 7・11・13）

**位置**　X66･67、Y91･92グリッド　**面積**　[17.75]㎡　**方位**　N－55°－E　**形状等**　方形。東西4.54m、南北4.32m、壁現高32cmを測る。　**床面**　平坦で堅緻な床面。住居南西隅に円形の貯蔵穴。主柱穴は検出されず。　**炉址**　検出されず。　**柱穴**　貯蔵穴1基検出。$P_1$（54cm×46cm×33cm）。　**遺物**　総数278点。うち6点を図示した。　**備考**　覆土や出土遺物等から本住居址は4世紀後半と考えられる。

**H－8号住居址**（F区、Fig. 12・24・25・28、PL. 6・11・12・13）

**位置**　X63～65、Y90･91グリッド　**面積**　(11.37)㎡　**方位**　N－32°－W　**形状等**　住居の東側が調査区外のため不明。東西4.28m、南北(3.65)m、壁現高17cmを測る。　**床面**　平坦で堅緻な床面。　**炉址**　検出されず。　**柱穴**　2基検出。$P_1$（41cm×40cm×23cm）、$P_2$（39cm×38cm×16cm）。　**遺物**　総数98点。うち8点を図示した。　**備考**　覆土や出土遺物等から本住居址は4世紀後半と考えられる。

**H－9号住居址**（F区、Fig. 12）

**位置**　X63、Y92･93グリッド　**面積**　(8.09)㎡　**方位**　N－22°－W　**形状等**　方形。東西(2.86)m、南北3.20m、壁現高13cmを測る。　**床面**　ほぼ平坦な床面。　**炉址**　検出されず。　**重複**　W－5と重複しており本遺構が古い。　**遺物**　総数75点。　**備考**　覆土や出土遺物等から本住居址は4世紀末と考えられる。

**H－10号住居址**（F区、Fig. 13）

**位置**　X61、Y91･92グリッド　**面積**　(7.24)㎡　**方位**　N－74°－E　**形状等**　住居の西側が調査区外のため不明。東西(2.73)m、南北3.00m、壁現高8cmを測る。　**床面**　ほぼ平坦な床面。柱穴は検出されず。　**炉址**　検出されず。　**遺物**　総数66点。　**備考**　覆土や出土遺物等から本住居址は4世紀後半と考えられる。

**H－11号住居址**（F区、Fig. 13・25、PL. 7）

**位置**　X60～62、Y90･91グリッド　**面積**　(8.73)㎡　**方位**　N－15°－W　**形状等**　住居の北側と西側が調査区外のため不明。東西(4.77)m、南北(2.20)m、壁現高20cmを測る。　**床面**　平坦で堅緻な床面。　**炉址**　検出されず。　**柱穴**　検出されず。　**遺物**　総数56点。うち土器2点を図示した。　**備考**　覆土や出土遺物等から本住居址は4世紀後半と考えられる。

**H－12号住居址**（F区、Fig. 13、PL. 7）

**位置**　X66･67、Y89グリッド　**面積**　(9.75)㎡　**方位**　N－53°－E　**形状等**　住居の西側以外が調査区外のため不明。東西(3.23)m、南北(5.20)m、壁現高25cmを測る。　**床面**　ほぼ平坦な床面。住居南西隅に円形の貯蔵穴。　**炉址**　検出されず。　**柱穴**　主柱穴2基、貯蔵穴1基を検出。$P_1$（37cm×36cm×66cm）、$P_2$（35cm×33cm×60cm）、$P_3$（54cm×48cm×45cm）。　**遺物**　総数28点。　**備考**　覆土や出土遺物等から4世紀後半と考えられる。

## 2　掘立柱建物址

**K－1号掘立柱建物址**（F区、Fig. 14、PL. 5）

**位置**　X64･65、Y94･95グリッド　**面積**　8.70㎡　**方位**　N－55°－E　**形状等**　東西2.80m、南北2.90mの方形を呈する。柱間寸法は南北が西辺2.7m、東辺が2.9mである。東西は北辺が西より1.2＋1.6mで、南辺が1.5＋1.5mである。　**柱穴**　6基の柱穴を検出。ほぼ円形の平面を呈するものが多い。掘り方の断面は円筒形に近いものが多い。長径24～28cm×短径20～25cm、深さ24～39cm、底面標高は95.01～95.12mである。　**重複**　H－5と重複しており本遺構が新しい。　**遺物**　なし。　**備考**　覆土等から奈良・平安時代の雑舎と考えられる。

**K－2号掘立柱建物址**（F区、Fig. 14、PL. 5）

**位置**　X62･63、Y96･97グリッド　**面積**　8.56㎡　**方位**　N－3°－W　**形状等**　東西2.95m、南北2.90mの方形を呈する。柱間寸法は南北が西辺北より1.6＋1.35m（$P_2$－$P_4$）で、東辺が1.35＋1.55mである。東西は北辺が西より1.4（$P_1$－$P_9$）＋1.5mで、南辺が1.6＋1.3mである。　**柱穴**　10基の柱穴を検出。ほぼ円形の平面を呈するものが多い。掘り方の断面は円筒形に近いものが多い。長径17～47cm×短径16～40cm、深さ13～36cm、底面標高は94.49～95.18mである。　**遺物**　総数6点。　**備考**　覆土や出土遺物等から奈良・平安時代の雑舎と考えられる。

## 3　土　　坑

**D－1号土坑**（F区、Fig. 14）

**位置**　X61･62、Y95･96グリッド　**形状等**　楕円形。長径122cm、短径74cm、深さ18cmを測る。　**遺物**　総数2点。　**備考**　覆土や出土遺物等から平安時代と考えられる。

**D－2号土坑**（F区、Fig. 14）

**位置**　X62、Y96グリッド　**形状等**　楕円形。長径93cm、短径73cm、深さ21cmを測る。　**遺物**　なし。　**備考**　覆土等から平安時代と考えられる。

**D－3号土坑**（F区、Fig. 14）

**位置**　X63、Y98グリッド　**形状等**　楕円形。長径（136）cm、短径67cm、深さ21cmを測る。　**遺物**　総数4点。　**備考**　覆土や出土遺物等から平安時代と考えられる。

## 4　井　戸　址

**I－1号井戸址**（E区、Fig. 14・25、PL. 4・12）

**位置**　X71、Y96グリッド　**形状等**　ほぼ円形。長径220cm、短径200cm。深さは154cmを測る。　**重複**　W－5と重複しており本遺構が古い。　**遺物**　総数108点。うち土器3点を図示した。　**備考**　覆土や出土遺物等から4世紀後半と考えられる。

## 5　溝　　址

**W－1号溝址**（D区、Fig. 15・25、PL. 12）

**位置**　X61、Y65･66グリッド　**方位**　N－17°－W　**形状等**　断面はU字形を呈し、上幅0.61～1.04m、下幅0.19～0.38m、深さ17～44cm、長さ（6.50）mを測る。　**遺物**　総数7点。うち土器2点を図示した。　**備考**　覆土や出土遺物等から9世紀前半と考えられる。

**W－2号溝址**（D区、Fig. 15・25、PL. 2・12）

**位置**　X61･62、Y68～73グリッド　**方位**　N－5°－W　**形状等**　面はU字形を呈し、上幅0.52～1.76m、下幅0.25～0.87m、深さ12～23cm、長さ（19.78）mを測る。　**遺物**　総数185点。うち土器2点を図示した。　**備考**　覆土や出土遺物等から9世紀後半と考えられる。

**W－3号溝址**（D区、Fig. 15・25、PL. 2・12）

**位置**　X62、Y72･73グリッド　**方位**　N－9°－W　**形状等**　断面はU字形を呈し、上幅0.40～0.88m、下幅0.10～0.25m、深さ5～14cm、長さ（5.27）mを測る。　**遺物**　総数12点。うち土器1点を図示した。　**備考**　覆土や出土遺物等から9世紀後半と考えられる。

**W－4号溝址**（E区、Fig. 15・26、PL. 12）

**位置**　X76～81、Y96･97グリッド　**方位**　N－82°－W　**重複**　W－6と重複しており、ほぼ同時期と考えられる。　**形状等**　断面は逆台形を呈し、上幅0.37～0.54m、下幅0.37～0.09m、深さ5～21cm、長さ（20.7）mを測る。　**遺物**　総数40点。うち土器2点を図示した。　**備考**　覆土や出土遺物等から4世紀中葉と考えられる。

**W－5号溝址**（E・F区、Fig. 16・17・26、PL. 4・5・12）

**位置**　X62～73、Y90～97グリッド　**方位**　N－60°－W　**重複**　W－10･11･12、H－9、I－1と重複。本遺構はW－10･11･12とほぼ同時期でI－1より新しい。　**形状等**　断面は逆台形を呈し、上幅1.15～2.40m、下幅0.20～0.86m、深さ21～48cm、長さ（48.86）mを測る。　**遺物**　総数594点。うち土器3点を図示した。　**備考**　覆土や出土遺物等から9世紀前半～10世紀前半に埋没したものと考えられる。

**W－6号溝址**（E区、Fig. 16、PL. 4）

**位置**　X73～76、Y93～97グリッド　**方位**　N－38°－W　**重複**　W－4・7と重複。本遺構はW－4とほぼ同時期でW－7より古い。　**形状等**　断面はU字形を呈し、上幅0.63～1.05m、下幅0.22～0.41m、深さ20～38cm、長さ（16.62）mを測る。　**遺物**　総数3点。　**備考**　覆土や出土遺物等から4世紀中～後半と考えられる。

**W－7号溝址**（E区、Fig. 16、PL. 4）

**位置**　X74～76、Y93～97グリッド　**方位**　N－34°－W　**重複**　W－6と重複しており本遺構が新しい。　**形状等**　断面はU字形を呈し、上幅0.20～0.82m、下幅0.06～0.30m、深さ12～37cm、長さ（15.58）mを測る。　**遺物**　なし。　**備考**　W－8と対になる近世の道路側溝と考えられる。

**W－8号溝址**（E区、Fig. 16、PL. 4）

**位置**　X73～75、Y93～97グリッド　**方位**　N－31°－W　**形状等**　断面はU字形を呈し、上幅0.66～1.12m、下幅0.05～0.52m、深さ6～46cm、長さ（15.26）mを測る。　**遺物**　総数29点。　**備考**　W－7と対になることや、覆土や出土遺物等から近世の道路側溝と考えられる。

**W－9号溝址**（E区、Fig. 16・26、PL. 4・12）

**位置**　X73･74、Y93～97グリッド　**方位**　N－24°－W　**形状等**　断面はU字形を呈し、上幅0.81～1.05m、下幅0.47～0.65m、深さ12～34cm、長さ（13.44）mを測る。　**遺物**　総数114点。うち土器2点を図示した。　**備考**　覆土や出土遺物等から4世紀末と考えられる。

**W－10号溝址**（F区、Fig. 17、PL. 5）

**位置**　X61～65、Y93･94グリッド　**方位**　N－74°－E　**重複**　H－5、W－5･12と重複。本遺構はH－5、W－12より新しくW－5とほぼ同時期と考えられる。　**形状等**　断面はU字形を呈し、上幅0.45～0.75m、下幅0.20～0.52m、深さ10～20cm、長さ（16.00）mを測る。　**遺物**　総数1点。　**備考**　覆土や出土遺物、重複関係等から平安時代と考えられる。

**W－11号溝址**（F区、Fig. 17・26、PL. 5）

**位置**　X65・66、Y93～95グリッド　**方位**　N－53°－W　**重複**　W－5・12と重複しており、ほぼ同時期と考えられる。　**形状等**　断面は逆台形を呈し、上幅0.37～0.50m、下幅0.15～0.36m、深さ19～25cm、長さ（10.75）mを測る。　**遺物**　総数132点。うち流れ込みの土器2点を図示した。　**備考**　覆土や出土遺物、重複関係等から平安時代と考えられる。

**W－12号溝址**（F区、Fig. 17、PL. 5）

**位置**　X64・65、Y92・93グリッド　**方位**　N－40°－W　**重複**　W－5・10・11と重複する。本遺構はW－5とほぼ同時期でW－10に切られる。　**形状等**　断面はU字形を呈し、上幅0.38～0.45m、下幅0.14～0.22m、深さ20～27cm、長さ（5.50）mを測る。　**遺物**　なし。　**備考**　覆土や重複関係等から平安時代と考えられる。

**W－13号溝址**（G区、Fig. 18）

**位置**　X57、Y88～95グリッド　**方位**　N－1°－W　**形状等**　断面は逆台形を呈し、上幅0.20～0.28m、下幅0.06～0.15m、深さ6～17cm、長さ（27.75）mを測る。　**遺物**　総数1点。　**備考**　覆土や出土遺物等から4世紀後半と考えられる。

**W－14号溝址**（G区、Fig. 18・26、PL. 13）

**位置**　X57・58、Y88～95グリッド　**方位**　N－5°－W　**形状等**　断面は逆台形を呈し、上幅0.40～1.45m、下幅0.22～0.66m、深さ3～30cm、長さ（28.80）mを測る。　**遺物**　総数51点。うち流れ込みの土器1点を図示した。　**備考**　覆土や出土遺物等から平安時代と考えられる。

**W－15号溝址**（G区、Fig. 18）

**位置**　X58・59、Y88～93グリッド　**方位**　N－5°－W　**形状等**　断面はU字形を呈し、上幅0.36～0.70m、下幅0.20～0.32m、深さ1～20cm、長さ（18.75）mを測る。　**遺物**　総数6点。　**備考**　覆土や出土遺物等から平安時代と考えられる。

## 6　水　田　址

A、G1・2の3調査区において、浅間Bテフラ層（As－B：浅間山起源 1108年）直下の平安時代後期水田址29枚が検出された。A区は後世の攪乱により遺構の確認は困難をきわめたが、辛うじて2本の畦畔を確認するにとどまった。G1・2区はテフラ層が厚く堆積しており、畦畔の残存状態は比較的良好であった。水田番号No. 1～4はA区、No. 5～22はG1区、No. 23～29はG2区に存在する（Tab. 5、6参照）。

## 7　グリッド等出土遺物

主に古墳時代～平安時代遺構面から小破片を含め総数2248点の遺物が出土した。うち、図示したものは17点である。

# Ⅵ　考　　察

## 1　縄文時代～近世の遺構・遺物について

今回の発掘調査の結果、A、G１・２の３調査区で浅間Bテフラ（As－B，1108年）直下の平安時代水田址が、B区で道路状遺構（As－B降下以降）が、D・E・F区で古墳時代前期～平安時代の集落址が検出された。なおC区はトレンチ調査の結果、遺構は検出されなかった。

古墳時代前期、奈良・平安時代の集落址は最寄りの六供下堂木Ⅱ・Ⅲ遺跡、六供中京安寺遺跡で確認されているのを始め、周辺遺跡の検出事例は少なくない。

水田址についても、本遺跡に隣接する六供下堂木Ⅱ・Ⅲ遺跡で検出されている他、利根川西岸の高崎市日高遺跡群、西島遺跡、前橋市前箱田遺跡、柳橋遺跡、五反田遺跡、東岸の中大門遺跡、栅島川端遺跡、公田池尻遺跡、公田東遺跡と枚挙に暇がない。

本遺跡は計画道路部分のごく限られた範囲の調査であったが、検出遺構は住居址を始め、土坑、井戸址、溝址、水田址等に及び、集落遺跡と農耕遺跡の両面から地域の歴史をかいま見ることができた。今後、今回の調査結果を周辺遺跡の調査事例とあわせ、より詳細な地域の歴史解明に寄与したい。

今回の調査によって明らかになった遺構・遺物について、時代別にまとめてみたい。

### (1)　縄 文 時 代

縄文土器片４点、石鏃３点が出土。遺構は検出されなかった。土器はF区で中期加曾利E式深鉢片２点、後期加曾利B式深鉢片１点が、D区は後期堀之内Ⅱ式深鉢片１点が出土している。石器はD・E・F区で凹基無茎式の石鏃がそれぞれ１点検出されている。縄文時代遺物の出土範囲は古墳時代前期～奈良・平安時代の遺構検出範囲とほぼ重なり、早い時期から生活の場として活用されていたことが想定される。遺跡地周辺の遺物検出例としては、六供中京安寺遺跡で縄文早期～後期の土器片や石器が、栅島川端遺跡で縄文時代草創期後半の撚糸文土器や打製石鏃・石斧が、公田東遺跡で縄文時代後期の土器片が、公田池尻遺跡で有舌尖頭器が出土したと言う報告がなされている。本遺跡でも遺構は確認されず断言することはできないが、出土遺物などから当地が縄文時代中期から後期の範囲で生活の場として活用されていた可能性が指摘できる。

### (2)　古 墳 時 代

E・F竪穴住居址９軒、溝址４条、井戸址１基が検出され、遺構内から1463点の遺物が検出された。

古墳前期の遺構はE・F区に集中しており、これらは集落を形成する一部と考えられる。遺構はいずれも褐灰色土を掘り込んで構築され、覆土はAs－C（浅間C軽石，４世紀前半）を含む黒色土で、出土遺物の形態から４世紀中葉～末であると考えられる。

出土土器は石田川式土器で、S字口縁を持つ甕形土器や壺形土器、小型丸底土器等バラエティーに富んでいる。

４世紀は本遺跡地に隣接する広瀬、朝倉地域に前橋天神山古墳、八幡山古墳、朝倉Ⅱ号墳などの初期古墳が、石田川式土器文化とともに突如として出現する時期である。これら古墳文化の担い手として想定されるのが本地域周辺の石田川式土器文化を持つ集団と言える。六供中京安寺遺跡をはじめ、周辺遺跡では石田川期の住居址とともに周溝墓が確認される例があるが、本遺跡は墓域からは外れているのか、周溝墓は検出されなかった。

E区では竪穴住居址３軒、溝址３条（W－４・６・９）、井戸１基が検出され、各遺構はF区ほど密集せず、同時期の遺構は重複しないで配置される。

F区は住居数が最も多く、H－５・７～11号住居址の６軒が検出された。遺物はS字状口縁を持つ台付甕形

土器や坩等が主体となる。石器ではH－７・８号住居址から砥石や敲石が出土した。H－７号住居址は粘土で貼り床をした堅緻な床面を持つ。また、住居南西隅の貯蔵穴の周囲は長方形に黄色の粘土が貼られていた。住居南壁と東壁付近はL字形に貼り床がされていない部分が認められた。柱穴は検出されなかった。H－５・10などでも堅緻な床面が確認されている。

住居址の形状は正方形に近いものが多く、規模や柱穴等の有無による差異が認められた。H－２・３・４・５は一辺が５m以上で、うちH－４・５は６mに近い規模である。H－７・８は４～５m台、H－９・10は３m程度と考えられる。柱穴のあるものはH－２・３・４・５など５m以上の規模をもつ住居に多く見られる。

該期には、比較的規模の大きな住居を核として周辺に小規模な住居を構築し集落を形づくる事例があり、特にH－３・４・５などはその核となる住居と考えられる。

遺物による住居の時期分類をするとⅠ期（４世紀中葉）、Ⅱ期（４世紀後半）に大別できる。これによりH－２・３はⅠ期に、H－４・５・７・８・９・10・11・12はⅡ期に該当する。以上のことから、本遺跡内の集落は４世紀中頃に微高地のE区東側に発生し、西のF区に移動した様子が伺える。F区の東側のG３区は微高地から低地へと移行する地点で溝址のみが検出されるに止まった。

広瀬・朝倉の古墳群を擁する本地域は、古墳時代前期における上毛野の要地であったと想定される。４世紀代には石田川式土器を使用する人々が本地域を始め、主に利根川左岸の前橋南部・東部地域に古墳文化と共に大きな勢力を広げていたことは、多くの発掘調査により明らかである。本遺跡では該期水田遺構は確認されなかったが、その古墳文化の根底には水田開発による稲作農耕の発達があったであろうことは想像に難くない。G区で実施した地質分析及びプラント・オパール分析により、水田遺構が検出された浅間Bテフラ直下層のほか、榛名二ツ岳渋川テフラ直下層や榛名二ツ岳伊香保テフラ直下層、浅間C軽石混土層でもイネのプラント・オパールが多量に検出された。昨年度の六供下堂木Ⅲ遺跡でも同様の結果が報告されている。このことは、古墳時代にも稲作がおこなわれていた可能性が高いことを検証したと言える。

これまで古墳時代前期の遺構を見てきたが、それ以降の５世紀～７世紀代（古墳時代中期～後期）は遺構はもとより遺物も皆無であった。その空白期について、周辺遺跡の事例をあげながら少し考えてみたい。

古墳時代中期の５世紀を境として石田川式土器文化が終焉を迎えると同時に大規模な古墳が前橋市域から消えてしまう。古墳分布から見た上野の要地は５世紀になり、分散していく傾向にあるといえる。本遺跡から約２km東に位置する広瀬古墳群でも５世紀代に大規模な古墳は造営されていない。群馬町の保渡田３古墳、藤岡白石稲荷山古墳、倉賀野の浅間山古墳、そして東日本最大の太田天神山古墳など、県内各地に主要な古墳が築かれてくる反面、前橋市域では荒砥地区の今井神社古墳が目立つ程度で突出した墳墓はみられなくなる。六供町周辺では和泉期の遺跡が確認された例は少ないが、本遺跡の北西方向、約500mのところに位置する生川遺跡で該期の遺構・遺物の検出が報告されており、空白期を埋める資料として貴重なものと言える。

古墳時代後期の前橋市域には遠見山古墳（５世紀末頃）に端を発し、６世紀に王山古墳、総社二子山古墳が築造される前橋西方の総社古墳群や大室３二子古墳を持つ大室古墳群などが出現する。先にあげた広瀬古墳群でも６世紀後半に天川二子山古墳が築造され、再び古墳造営が活発化する。しかし、本遺跡の所在する六供町周辺には、それに対応する時期の集落址はほとんど見られないが、前述の生川遺跡では鬼高期の住居が確認されている。６世紀代の集落分布状況については、５世紀と同様に明らかにされておらず、南町、天川原町、天川町、文京町近辺の今後の発掘調査に期待するところが大きい。６世紀代は前橋市域以外でも県内各地に大規模古墳、或いは古墳群が造営される時期であり、４世紀代の如き前橋市域の圧倒的優位性を見いだせるのは、７世紀初頭の築造とされる総社愛宕山古墳の出現を待たねばならない。

古墳時代終末期の７世紀代には再び前橋市域が上毛野の要地として脚光を浴びることになる。その中心となったのが三基の大型方墳を含む総社古墳群を擁する総社地区である。総社地区周辺には上野国府跡、上野国分僧寺・尼寺跡、東日本屈指の古代寺院である山王廃寺跡などの遺跡が集中する。本遺跡の周辺では総社古墳群のごとき顕著な墳墓はみあたらないが、六供中京安寺遺跡発掘調査では７世紀代の遺物を伴う古墳の周堀の一部が検出されており、当地にも古墳が存在したことを立証することができた。しかし、それに付随する集落等はまだ確認されていない。

以上のように例外はあるが、古墳の造営と集落の出現は密接な関係にあると言える。

つぎに遺物について見ていきたい。本遺跡の古墳時代出土遺物は、石田川式土器の範疇に包含されるものがほとんどで、台付の甕形土器、壺、坩、器台、高坏などで、時期的には４世紀中葉から４世紀末葉にかけてのものである。特筆すべき遺物には、Ｈ－８号住居址から出土した手焙形土器の一部（ＰＬ．12、Fig．25、Tab．１参照）と考えられる破片があげられる。手焙形土器は、小林行雄「弥生式土器聚成図録解説」によると弥生時代後期の土器で、鉢形土器の上部に半球形の覆いが付き、手焙用火鉢によく似た形態をとると言う。径は15～20cm程度で器面下部が煤けた状態で出土するものがあるが用途は不明。一般に瀬戸内、近畿、東海地方に多く分布し、群馬県内はもとより東日本での出土例は少なく、貴重な検出例と言える。今回出土したのは鉢の上に乗る覆いの開口部前面の破片と考えられ、刻みや刷毛目で簡素な装飾が施される。Ｈ－８号住居址は４世紀後半と考えられ、石田川式土器を伴う。周知の如く石田川式土器は東海地方に分布する元屋敷式土器に形態が酷似しており、そのルーツを見ることができる。この石田川式土器が東海系であることを念頭に置けば手焙形土器が群馬の地に存在することも不思議ではない。弥生時代後期からの系譜を引く手焙形土器が、石田川式土器と同時に出土している事は、この土器が東海系の弥生土器の流れを汲むものであり、古墳時代前期まで残ったものと考えられる。また、住居址から出土したことから、群馬においても生活に密接な道具であったであろうことが想像される。

Ｈ－11号住居址出土の小型の甕形土器（Fig．25、Tab．１参照）も特異なものといえる。県内出土の該期甕形土器はＳ字状の口縁を持つのが普通であり、本例の場合はやや外傾ぎみに直立した段付きの口縁を持ち、口縁先端部が剣先形であることも特徴と言える。以上の特徴からこの土器は北陸系のものと考えることができる。北陸系土器は周辺遺跡の六供中京安寺遺跡や六供下堂木Ⅱ遺跡などでも確認されており、この地域が北陸地方とも交流があったことを物語るものである。

ほかに特筆すべき遺物としては、Ｈ－７号住居址のミニチュア土器やＩ－１出土の赤色塗彩が施された壺の一部などがあげられ、集落内で祭祀行為が行われていた可能性がある。

## (3)　奈良・平安時代

該期遺構は竪穴住居址２軒、掘立柱建物址２棟、土坑２基、溝址３条で、遺構内から1185点の遺物が検出された。Ｄ区で検出されたＨ－１号住居址は本遺跡内の奈良～平安期遺構では最も早い時期のもので、遺物などから８世紀末葉の所産と考えられる。形状は長方形で東壁に竈が設置され、その両脇に粘土が貼られた小ぶりな棚が付く。遺物は竈付近から刻書土器をはじめ、完形品を含む豊富な土器が出土した。

Ｗ－２号溝址の底部からは墨書土器が出土し、遺物の年代から９世紀後半頃に埋没した遺構と考えられる。

Ｗ－２と平行して走るＷ－３号溝址は刻書土器などの出土遺物からＷ－２とほぼ同時期のものと言える。

Ｅ・Ｆ区で検出されたＷ－５は遺跡内で最も大規模な溝址で、灰釉長頸瓶や須恵器類などが出土した。これらの遺物から10世紀前半に埋没したものと考えられる。底部には礫や砂が堆積している箇所もあり、通水していた可能性がある。

Ｆ区の平安時代遺構は、竪穴住居址１軒、掘立柱建物址２軒、土坑２基、溝址１条とバラエティーに豊むも

のである。

Ｈ－６号住居址は東壁に竈を持ち、南東隅に貯蔵穴が設置される。

溝址群は全て覆土に二次堆積のHr－FP（榛名二ツ岳軽石；６世紀中葉）を含み、Ｗ－５を核としてほぼ同時期に使用されていたものと考えられる。Ｗ－５はＥ区から連続するものと考えられ、本調査区を南東から北西に貫き、溝の南側に住居址等の平安時代遺構群が集中する。

ほかにはＧ３区東側で溝址３条が確認された。Ｗ－14・15号溝址の年代は遺物が少ないのと流れ込みのものも多いため、正確には判定出来ないがＷ－13は二次堆積のAs－CやHr－FAが覆土に含まれ、Ｗ－14・15は二次堆積のHr－FPを含むため、各テフラ降下以前あるいは以降であることは言える。本調査区には石田川式土器片の散布が見られたが遺構の検出には至らなかった。集落址が検出されたＦ区に近いＧ３区はＧ区では最も標高が高く微高地となり、生産域から居住域へと移行する地点と考えられる。

以上のことから主にＤ・Ｅ・Ｆ区は奈良～平安時代にかけての集落の一部であると言える。周辺遺跡では六供中京安寺遺跡、六供下堂木Ⅱ・Ⅲ遺跡などで奈良・平安時代の集落が確認されている。

特筆すべき遺物としては２点の刻書土器と１点の墨書土器があげられる。Ｈ－１号住居址出土のものに、クギ状の道具で「大」と線刻された須恵器坏がある。大きさを表す文字のうち、「大」、「中」は多いとされるが、何のために書かれたものかは不明である。時期は８世紀末葉と考えられる。

Ｗ－２号溝址の底部から出土した須恵高台椀には「太」という墨書が認められた。やはり意味は不明で９世紀後半と考えられる。

Ｗ－３号溝からは「安根」と篦で刻書された高台椀の底部が出土した。一般に二字が連続する場合、人名や地名を意味する場合があり、本例は人名である可能性が強いと考えられる。時期は９世紀後半と考えられる。本遺跡地から利根川を挟み北西約４kmには推定上野国府が、そのさらに北西には上野国分僧寺・尼寺が位置し、これら上野の中枢地域から文化的影響を受けていたであろうことが想像できる。これらの出土例から、本地域でも８世紀末葉には文字が一般の集落内まで浸透していたことが推察される。

## (4)　近　　世

Ｗ－７・８号溝址は江戸時代の陶磁器片が出土しており、２条一組の道路側溝と考えられる。

## (5)　そ　の　他

Ｂ区で検出された道路状遺構については指標となるテフラ層、遺物も無く時代判定はできなかったが、層位から少なくともAs－B降下以降であると考えられる。

## 2　平安時代後期水田址について

### (1)　水田の形態等

今回検出されたのは、天仁元年（1108年）浅間山の噴火によって降下したテフラ（As－B）により埋没した平安時代後期の水田址である。水田址はA・G1・G2の3調査区で合計29枚が検出された。

A区は後世の攪乱がひどく、辛うじてAs－B直下水田址4枚、畦畔2本を検出するに止まった。以下は主な水田検出地点であるG区を中心に考察してみたい。

G区は現在使用されている水路や水道管が調査区を南北に横切るため3箇所に分けて調査することになり、西側からG1・G2・G3区とした。G1区（西側）、G2区（中央）では、浅間Bテフラ直下の水田址が25枚検出された。うちG1区18枚、G2区7枚である。G1区はテフラの堆積は厚く、比較的良好な状態で畦畔が検出できたが、調査区の西側、G1区の前橋－玉村線に隣接している部分ではテフラの堆積が薄くなり畦畔が検出できなかった。G2区では逆に東側になるほどテフラの堆積は薄くなった。よって、G1区西端部が水田域の西限で、G2区東端が東限と考えられる。南北方向に走る畦畔も残存状態は良好であったが、道路幅以上の調査ができず水田域の南限、北限は把握できなかった。G区は道路計画部分であるため、東西方向では約110mと広範囲での調査が可能であったが、南北方向では道路幅である30m以内の調査となり全体的な把握が困難であった。畦畔はG区全体で東西方向7本、南北13本で幅約30～40cm、高さ約3～5cmを測る。いずれの畦畔も小規模なもので、条里制に基づく坪境畦畔と考えられるものは確認出来なかった。

G区全体の水田検出面は西端部標高最高点95.63m、東端部最低点94.95m、東西比高差は0.68mである。北端部では標高95.51mを最高点とし、南端部最低点は95.29mで南北比高差0.22mとなる。このことから水田面は北西から南東にかけてごく緩やかに傾斜すると言える。この比高差を利用して水田に引かれた水を北西から南東へ流したものと考えられる。

検出畦畔は東西方向に走行するものが7本、南北方向に走行するものが13本であった。畦畔は後世の圧縮により扁平化しており、断面形は台形状・もしくはカマボコ状を呈する。畦畔の幅は、上幅18～42cm、下幅40～76cm、水田面からの高さは3～9cmである。畦畔の交点は、G1区東側で十字状に交差しているのが1ヶ所で、その他はT字状である。またG1・2区のプラントオパール分析結果からAs－B直下層からイネのプラントオパールが検出されており、稲作が行われていたことが実証された。

G3区ではAs－Bの堆積は微量であり、水田址は検出できなかった。さらにHr－FA下のAs－C混土層まで掘り進めたところ、溝址が3条検出された。それ以外では石田川式土器片が出土しているが遺構検出には至らなかった。住居址が点在するF区と隣接しているG3区は微高地で、生産域から居住域に移行する地点と考えられる。

調査区域の関係で四方を畦畔に囲まれた水田単位を確認できたのは3面であった。No. 8の水田址は周囲の畦畔の走行方向から判断し区画の形がほぼ方形で、No. 12は長方形、No. 13は台形を呈する。調査区全体をみると一区画の面積も形状もまちまちで統一性があると言えない。地形的な制約があって作られている水田や水量調節用、保水用等の補助的な役割で使用されていたような水田もあったと考えられる。

A区は本町－六供線に隣接しており、道に接する調査区東側は後世の攪乱がひどく、辛うじて2本の畦畔を確認するにとどまった。上幅は22cm～38cm、下幅は38cm～65cm、高さは4～5cmである。それぞれほぼ東西または南北に走行し、ほぼ直交する。A区の東側に六供下堂木Ⅱ遺跡が、D区の東側に六供下堂木Ⅲ遺跡があり、ともに同時期の水田址が検出されている。

## (2) 配水について

水田址は北西から南東にかけてごく緩やかに傾斜しているため、各水田区画の南側もしくは東側に接する水田は1㎝～6㎝程度低くなっている。この自然の地形を利用し各水田へ水の供給を行っていたようである。また畦畔には取水と配水のための16箇所の水口がありこの部分から給排水を行っていたことが分かる。水口は水田内に一定量の水を貯めるための設備で、イネの育成を助けるための流路である。水田の開口部分は東西もしくは南北いずれかの水田面にあり、その東側、南側では水田面が1～3㎝程度低くなっている。このことからも勾配を意識しての水田づくりが行われていたといえる。また、各水田の深さもイネの生育に関係する。水田の水深にばらつきがあるとイネが育ちにくくなるため、水を湛えたときの深さが均一になるような工夫がされる。

以上のことから本遺跡水田の給水方法は標高の高い水田が満水になった後、畦畔をオーバーフローして順次標高の低い水田へ流し込むという『かけ流し』と呼ばれる方法と、水口を利用し効率的に水の運用を図る方法を併用し、地形を活かした方法を採っていたと考えられる。G区の中には水田の給水源となるような水路などは検出されなかったが、傾斜や水の流れを考えると、調査区の北西方向に給水源があったと想定される。

## (3) 条里制との関係

本遺跡の水田址には、条里制に基づく坪境畦畔、いわゆる大畦畔は確認されなかった。条里制は奈良・平安時代以降推進された律令制度に基づく土地区割り制度である。区割り方法は1町（約109m）方格の面積（1坪）を基準にして南北方向の列6町を1里と呼ぶ。1坪の境として大畦畔が使用され、使用目的から坪境畦畔とも呼ばれている。水田址発掘に際しては特にこの大畦畔（坪境畦畔）とその交点（坪交点・条里交点）の検出が条里水田の指標とされている。現在までみることのできる条里地割は一気に出現して広まっていったものではなく、まずはじめに7世紀後半に1町方格地割が出現し、続いて8世紀末の現存条里地割（坪境）、10世紀前半から中頃にかけて普及していった長地型、半折型地割の3つの変遷をたどるという説がある。G1・2区は南北方向の範囲は狭かったが東西方向の範囲が広く、畦畔の残りも比較的良好であっただけに大畦畔（坪境畦畔）を検出できなかったのは残念であった。検出された畦畔のうち、最大のものはNo．14で上幅42㎝、下幅76㎝、高さ9㎝を測る。しかし、隣接する六供下堂木Ⅱ遺跡で検出された坪境畦畔と仮定されたものと比較しても小規模なもので、むしろ大畦畔をさらに区画する中規模の畦畔に近いものと考えられる。検出畦畔は所々で規則性が崩れており、作り直された可能性が高い。接する畦畔の間隔は東西走向で6～23m、南北走向で9.5m～15mという範囲である。ほぼ直走はしているがそれらの畦畔で構成する水田面の大きさ・形状には、かなりばらつきがあるといえる。

本遺跡周辺にはいくつかの条里制に関係があると思われる地名がある。本遺跡地の北1㎞地点には『市之坪』という条里の区割りを示す地名が残っている。この『市之坪』の他にも太田市沖之郷に『二ノ坪』という地名もあり、前者は市場の『市』ではなく、順序を表す『一の坪』とも言い換えることができ、条里制の最初の一区画という意味であることが分かる。また南には公田町に三公田という地名も残っている。こちらも条里制と関係があると思われる地名である。公田は田令公田条によれば、口分田等給与された土地の残りの田で、乗田とも呼ばれ口分田班給田操作の予備田であるとともに、その経営は国司が管理し、賃租田とされている。また迅速図からも『市之坪』の南境を走る道が東西方向に、小字中大門と小字中京安寺の境の道が南北方向に走行しており、条里的地割の名残とも考えられる。しかし地形的な要因や河川の屈曲等に呼応し地割もすべて規則的とはいえない。宮地中田遺跡では坪境畦畔が検出されており、条里的地割を持つ水田遺跡は近くに存在する。本遺跡地の南西に位置する中大門遺跡では坪境畦畔は検出されなかったが、同様に浅間Bテフラに埋没した水田址が発見されており、立地的にも類似している。六供下堂木Ⅱ・Ⅲ遺跡にも同様な水田址が検出されている。

六供下堂木Ⅱ遺跡では坪境と仮定される畦畔が検出されているほか、畦畔のほとんどが正方位に近く直線的であることから、条里制に基づき、計画的に区画されたものと考えられている。下堂木Ⅲ遺跡では部分的ではあるが長地型の規格にほぼ適う数値が得られた箇所もあり、条里制に基づく長地型坪割の一部である可能性があるとされている。

以上のように、周辺遺跡の事例からも本遺跡の水田址が条里制に関わるものである可能性は高いと言える。

《主要参考文献及び引用文献》


| | | |
|---|---|---|
| 前橋市 | 『前橋市史　第１巻』　前橋市史編さん委員会 | 1971 |
| 群馬県 | 『群馬県史　通史編１　原始古代１』　群馬県史編さん室 | 1988 |
| 前橋市教育委員会 | 『中大門遺跡』 | 1983 |
| 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 | 『生川遺跡』 | 1988 |
| 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 | 『中原遺跡群Ⅰ』 | 1993 |
| 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 | 『中原遺跡群Ⅱ』 | 1994 |
| 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 | 『中原遺跡群Ⅳ』 | 1995 |
| 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 | 『中原遺跡群Ⅲ・Ⅴ・Ⅶ』 | 1996 |
| 県立文書館遺跡調査会 | 『県立文書館遺跡』 | 1996 |
| 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 | 『六供下堂木Ⅱ遺跡』 | 1997 |
| 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 | 『宮地中田遺跡』 | 1997 |
| 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 | 『山王若宮遺跡』 | 1998 |
| 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 | 『六供中京安寺遺跡・六供下堂木Ⅲ遺跡』 | 1998 |
| (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 | 『年報』 | 1996～1998 |
| 都丸十九一 | 『地名のはなし』 | 1987 |
| 広瀬和雄 | 『条里制』 | |

X 41,120
Y −68,000

X 41,000
Y −68,000

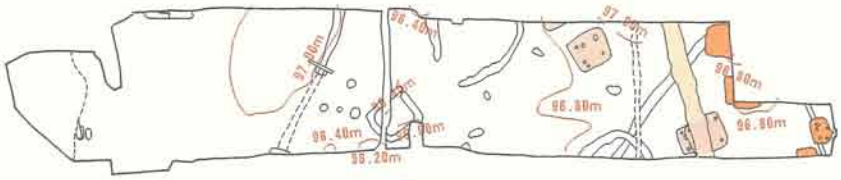
X 41,100
Y −67,900

X 41,000
Y −67,800

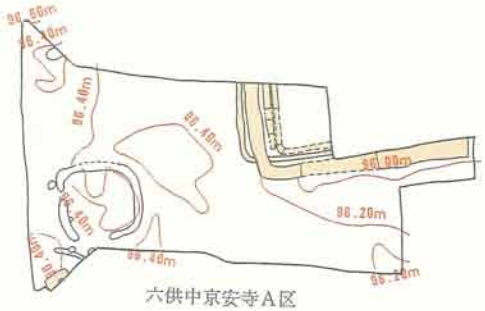
X 40,900
Y −68,000

X 40,900
Y −67,900

X 40,900
Y −67,800




六供中京安寺B区




六供中京安寺A区

X 40,800
Y −68,010

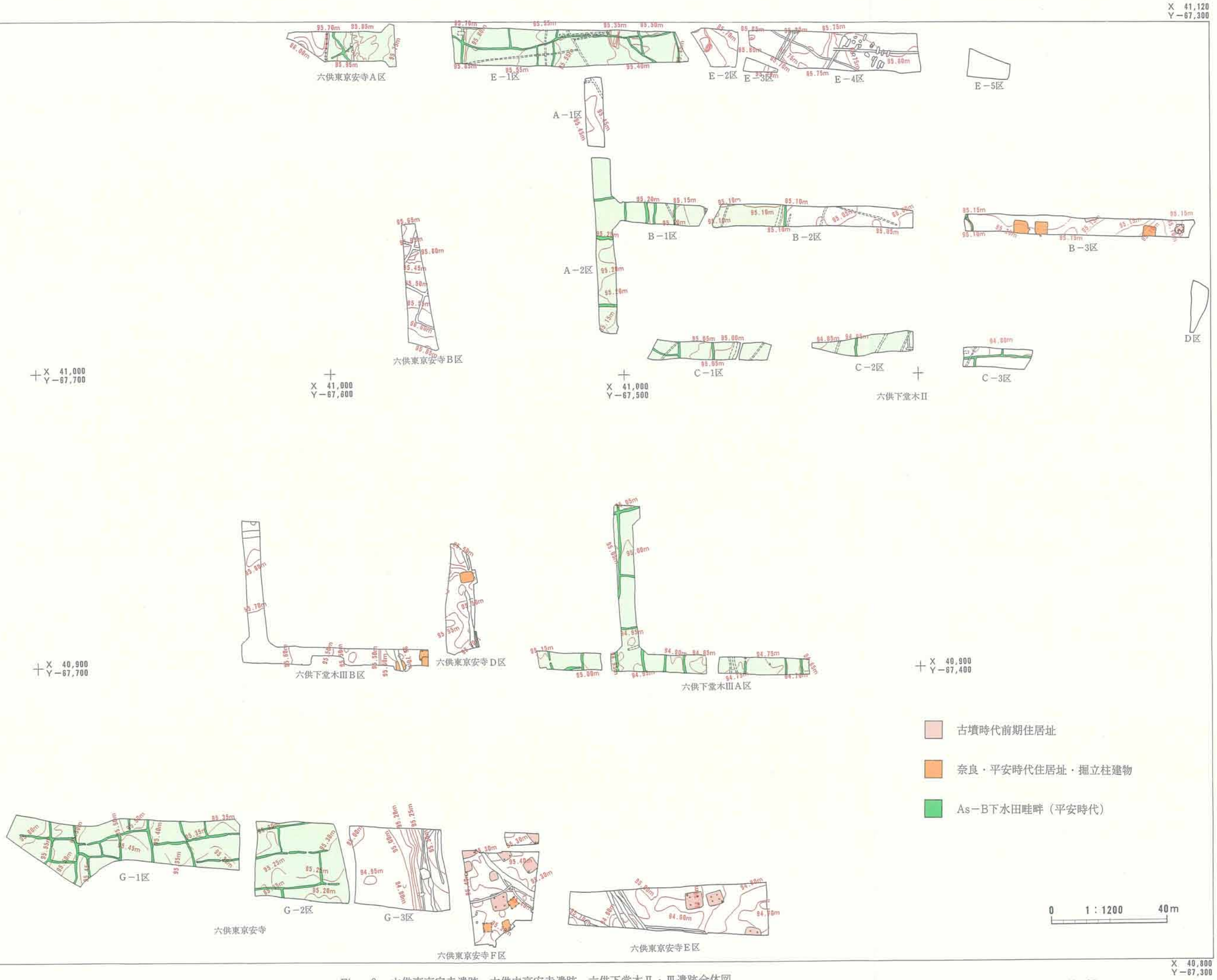



Fig. 8　六供東京安寺遺跡、六供中京安寺遺跡、六供下堂木II・III遺跡全体図

## Tab. 1　六供東京安寺遺跡土器観察表

| 番号 | 出土位置 | 器形 | 大きさ 口径 | 大きさ 器高 | ①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存 | 成・整形方法の特徴 | 備考 | | Fig. |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | H－1 | 坏 | 13.2 | 3.0 | ①中粒②良好③橙④ほぼ完形 | 外面横ナデ、篦削り。内面ナデ。 | 内面にスス付着。 | 8世紀末 | 24 |
| 2 | H－1 | 坏 | 12.8 | 3.4 | ①中粒②良好③にぶい橙④ほぼ完形 | 外面横ナデ、篦削り、指オサエ。内面ナデ。 | | 8世紀末 | 24 |
| 3 | H－1 | 坏 | 12.6 | 3.2 | ①中粒②良好③明黄褐④ほぼ完形 | 外面横ナデ、篦削り、指オサエ。内面ナデ。 | | 8世紀末 | 24 |
| 4 | H－1 | 坏 | 13.2 | 3.0 | ①中粒②良好③にぶい橙④4/5 | 外面横ナデ、篦削り、指オサエ。内面ナデ。 | | 8世紀末 | 24 |
| 5 | H－1 | 坏 | 14.1 | 2.3 | ①中粒②良好③橙④2/3 | 外面横ナデ、篦削り、指オサエ。内面ナデ。 | | 8世紀末 | 24 |
| 6 | H－1 | 須恵坏 | 13.2 | 3.2 | ①中粒②良好③褐灰④完形 | 内外面とも轆轤ナデ。底部回転糸切り後ナデ調整。 | 体部内面に「大」の刻書。 | 8世紀末 | 24 |
| 7 | H－1 | 須恵蓋 | [14.9] | 3.7 | ①中粒②良好③灰④2/3 | 天井部回転篦削り。リング状の摘まみ。 | | 8世紀末 | 24 |
| 8 | H－1 | 台付甕 | 11.8 | (5.5) | ①中粒②良好③褐④口縁のみ | 外面横ナデ、篦削り、指オサエ。内面ナデ。 | No.9と同一個体。 | 8世紀末 | 24 |
| 9 | H－1 | 台付甕 | － | (14.4) | ①中粒②良好③褐④3/5 | 外面横ナデ、篦削り、指オサエ。内面ナデ。 | No.8と同一個体。 | 8世紀末 | 24 |
| 10 | H－2 | 坩 | 9.7 | 5.4 | ①細粒②良好③にぶい橙④1/2 | 内外面ともナデ、篦磨き。 | | 4世紀中 | 24 |
| 11 | H－3 | 坩 | [14.7] | 4.5 | ①中粒②不良③明赤褐④2/5 | 外面ナデ、篦削り。内面ナデ。 | | 4世紀中 | 24 |
| 12 | H－4 | 坩 | [12.8] | 5.9 | ①中粒②良好③灰褐④1/2 | 外面ナデ、磨き、篦削り。内面ナデ、篦磨き。 | | 4世紀後 | 24 |
| 13 | H－4 | 高坏 | 15.0 | (5.0) | ①中粒②良好③黒褐④坏部3/4 | 外面横ナデ、ナデ、磨き、篦削り。内面ナデ、篦磨き。 | | 4世紀後 | 24 |
| 14 | H－6 | 須恵坏 | 12.8 | 4.0 | ①中粒②良好③灰白④1/2 | 内外面とも轆轤ナデ。底部回転糸切り未調整。 | 外面にスス付着 | 10世紀前 | 24 |
| 15 | H－7 | ミニチュア土器 | － | (2.7) | ①中粒②良好③黄褐④脚部4/5 | 内外面ともナデ。 | | 4世紀後 | 24 |
| 16 | H－7 | 台付甕 | － | (6.7) | ①中粒②良好③にぶい橙④脚部4/5 | 外面刷毛目、ナデ、指抑え。内面ナデ、指オサエ。 | | 4世紀後 | 24 |
| 17 | H－7 | 高坏 | － | (9.7) | ①中粒②良好③にぶい赤褐④脚部3/4 | 外面ナデ、磨き。内面ナデ。 | | 4世紀後 | 24 |
| 18 | H－7 | 高坏 | － | (5.5) | ①中粒②良好③にぶい赤褐④脚部3/4 | 外面ナデ、磨き。内面ナデ。 | | 4世紀後 | 24 |
| 19 | H－8 | 坩 | 10.8 | 5.9 | ①中粒②良好③にぶい黄褐④ほぼ完形 | 外面ナデ、磨き、篦削り。内面ナデ、磨き。 | | 4世紀後 | 24 |
| 20 | H－8 | 高坏 | 14.4 | (5.0) | ①中粒②良好③にぶい褐④坏部4/5 | 内外面とも磨き。 | | 4世紀後 | 24 |
| 21 | H－8 | 坩 | 10.0 | 12.8 | ①中粒②良好③にぶい橙④4/5 | 外面篦削り、磨き、指オサエ。内面ナデ。 | | 4世紀後 | 24 |
| 22 | H－8 | 台付甕 | － | (7.2) | ①中粒②良好③にぶい褐④脚のみ | 外面篦削り。内面ナデ。 | | 4世紀後 | 25 |
| 23 | H－8 | 器台 | － | (8.5) | ①中粒②良好③にぶい赤褐④脚部2/3 | 外面ナデ、篦磨き。内面ナデ。透孔2単位。 | | 4世紀後 | 25 |
| 24 | H－8 | 手焙り形土器 | － | － | ①中粒②良好③にぶい橙④覆い前面部 | 外面刷毛目、ナデ。内面ナデ。 | 口縁部に刻み。 | 4世紀後 | 25 |
| 25 | H－11 | 坩 | － | 5.5 | ①中粒②良好③にぶい橙④1/4 | 外面篦磨き。内面ナデ、磨き。 | | 4世紀後 | 25 |
| 26 | H－11 | 小甕 | [8.2] | (8.3) | ①中粒②良好③にぶい黄褐④口胴1/3 | 外面ナデ、刷毛目。内面ナデ。折り返し口縁。 | 北陸系 | 4世紀後 | 25 |
| 27 | I－1 | 壺 | － | 10.3 | ①中粒②良好③にぶい橙④口縁部欠損 | 外面篦磨き。内面ナデ。 | | 4世紀後 | 25 |
| 28 | I－1 | 壺 | － | (17.8) | ①中粒②良好③橙④頸胴1/3 | 外面篦削り、刷毛目。内面ナデ。 | | 4世紀後 | 25 |
| 29 | I－1 | 壺 | － | (14.2) | ①中粒②良好③赤褐④底部胴部 | 内外面とも轆轤ナデ。 | 外面に赤色塗彩。 | 4世紀後 | 25 |
| 30 | W－1 | 須恵高台椀 | [16.4] | 5.4 | ①中粒②良好③黄灰④1/5 | 内外面とも轆轤ナデ。底部回転糸切り未調整。高台後付け。 | | 9世紀前 | 25 |
| 31 | W－1 | 須恵高坏 | － | (8.0) | ①中粒②良好③灰白④脚部2/3 | 内外面とも轆轤ナデ。 | | 9世紀前 | 25 |
| 32 | W－2 | 須恵高台椀 | 14.4 | 5.2 | ①中粒②良好③灰④4/5 | 内外面とも轆轤ナデ。底部回転糸切り未調整。高台後付け。 | 体部内面に「太」の墨書。 | 9世紀後 | 25 |
| 33 | W－2 | 須恵高台椀 | － | (3.2) | ①中粒②良好③灰④底部のみ | 内外面とも轆轤ナデ。底部回転糸切り未調整。高台後付け。 | | 9世紀後 | 25 |
| 34 | W－3 | 須恵高台椀 | － | (2.4) | ①中粒②良好③灰白④底部のみ | 内外面とも轆轤ナデ。底部回転糸切り未調整。高台後付け。 | 底部下面に「安根」の刻書。 | 9世紀後 | 25 |
| 35 | W－4 | 甕 | [13.8] | (12.3) | ①中粒②良好③黒褐④口胴1/5 | 外面刷毛目。内面ナデ。 | 肩部に横方向の刷毛目。 | 4世紀中 | 26 |
| 36 | W－4 | 壺 | － | (11.0) | ①中粒②良好③浅黄橙④底部胴部 | 外面篦磨き。内面ナデ。 | | 4世紀中 | 26 |
| 37 | W－5 | 須恵高台椀 | [14.5] | 4.4 | ①中粒②良好③褐灰④1/3 | 内外面とも轆轤ナデ。底部回転糸切り未調整。高台後付け。 | | 10世紀前 | 26 |
| 38 | W－5 | 須恵椀 | [14.0] | (3.8) | ①中粒②良好③灰黄④1/3 | 内外面とも轆轤ナデ。 | | 10世紀前 | 26 |
| 39 | W－5 | 灰釉長頸瓶 | 12.2 | (7.7) | ①中粒②良好③灰白④口縁部2/3 | 内外面とも轆轤ナデ。釉薬刷毛塗り。 | | 9世紀前 | 26 |
| 40 | W－9 | 坩 | 11.5 | 11.8 | ①中粒②良好③にぶい褐④4/5 | 外面ナデ、磨き、篦削り。内面篦磨き。 | | 4世紀末 | 26 |
| 41 | W－9 | 台付甕 | － | (6.1) | ①中粒②良好③橙④脚部のみ | 外面刷毛目、ナデ。内面ナデ。 | | 4世紀末 | 26 |
| 42 | W－11 | 台付甕 | － | (8.1) | ①中粒②良好③褐灰④胴部1/7 | 外面刷毛目、ナデ。内面ナデ。 | | 4世紀後 | 26 |
| 43 | W－11 | 台付甕 | － | (7.2) | ①中粒②良好③明黄褐④脚部1/2 | 外面刷毛目。内面ナデ。 | | 4世紀後 | 26 |
| 44 | W－14 | 甕 | [13.6] | (8.8) | ①中粒②良好③にぶい褐④口胴1/3 | 外面ナデ、磨き、篦削り、指押さえ。内面ナデ。 | | 4世紀末 | 26 |
| 45 | X47, Y21 | 壺 | － | (23.5) | ①粗粒②良好③にぶい褐④底胴1/3 | 外面篦削り。内面ナデ。 | | 4世紀後 | 26 |
| 46 | X61, Y72 | 台付甕 | 13.3 | (14.0) | ①中粒②良好③にぶい橙④脚部欠損 | 外面刷毛目、篦削り。内面ナデ、篦磨き。 | | 4世紀末 | 26 |
| 47 | X61, Y72 | 台付甕 | 15.0 | (8.8) | ①中粒②良好③橙④口縁胴部 | 外面刷毛目、横ナデ。内面横ナデ、ナデ。 | 肩部に横方向の刷毛目。 | 4世紀中 | 27 |
| 48 | X61, Y72 | 器台 | 8.7 | (4.7) | ①細粒②良好③にぶい褐④1/3 | 外面篦磨き。内面ナデ、磨き。透孔3単位。 | | 4世紀後 | 27 |
| 49 | X66, Y92 | 坩 | 15.8 | 5.7 | ①中粒②良好③にぶい橙④ほぼ完形 | 内外面ともナデ、篦磨き。 | | 4世紀中 | 27 |
| 50 | X66, Y92 | 台付甕 | 16.5 | (25.3) | ①中粒②良好③橙④3/4 | 外面刷毛目、横ナデ。内面横ナデ、ナデ。 | | 4世紀後 | 27 |
| 51 | X66, Y93 | 台付甕 | [11.4] | 24.8 | ①中粒②良好③橙④1/2 | 外面刷毛目、篦削り。内面ナデ。 | | 4世紀末 | 27 |
| 52 | X66, Y93 | 台付甕 | － | (11.6) | ①中粒②良好③にぶい橙④1/3 | 外面刷毛目、篦削り。内面ナデ。 | | 4世紀後 | 27 |
| 53 | X80, Y96 | 高坏 | [16.0] | (6.1) | ①中粒②良好③赤灰④坏部1/2 | 内外面ともナデ、篦磨き。 | | 4世紀中 | 27 |
| 54 | F区覆土 | 小甕 | 9.2 | 7.0 | ①中粒②良好③灰黄④2/3 | 外面ナデ、篦削り。内面ナデ。 | | 4世紀末 | 27 |

注）表の記載は、以下の基準で行った。

①胎土は、細粒（0.9mm以下）、中粒（1.0mm～1.9mm以下）、粗粒（2.0mm以上）とし、特徴的な鉱物が入る場合に鉱物名を記載した。

②焼成は、極良、良好、不良の三段階。

③色調は、土器外面で観察し、色名は新版標準土色帳（小山・竹原1976）に拠った。

④大きさの単位はcmであり、現存値を（　）、復元値を［　］で示した。

## Tab. 2 縄文土器観察表

| 番号 | 出土位置 | ①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存 | 文様要素・文様構成・器形の特徴 | 備考 | Fig. |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | X64Y91 | ①粗粒②良好③橙④胴部 | 磨消縄文。横位の紐線文。 | 加曾利B式 | 27 |
| 2 | X64Y91 | ①中粒②良好③にぶい褐④胴部 | 縄文RL。 | 加曾利E3、もしくは4式 | 27 |
| 3 | X67Y91 | ①中粒②良好③にぶい褐④胴部 | 沈線。0段多条の縄文RL。土製円盤。 | 加曾利E3、もしくは4式 | 27 |
| 4 | D区覆土 | ①中粒②良好③灰褐④口縁部 | 表面に磨消縄文。刻み隆帯。内面に鋸歯条の僅かな隆帯による区画と磨消縄文。 | 堀之内2式 | 27 |

注）表の記載は、以下の基準で行った。
①胎土は、細粒（0.9mm以下）、中粒（1.0mm～1.9mm以下）、粗粒（2.0mm以上）とし、特徴的な鉱物が入る場合に鉱物名を記載した。
②焼成は、極良、良好、不良の三段階。
③色調は、土器外面で観察し、色名は新版標準土色帳（小山・竹原1976）に拠った。

## Tab. 3 鉄器観察表

| No. | 出土位置 | 器形 | 長さ | 幅 | 厚さ | 残存 | 備考 | Fig. |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | H－7 | 刀子 | [8.4] | 1.1 | 0.3 | 4／5 | 茎部一部欠損。断面逆三角形。柄と考えられる木質部付着。 | 27 |

注）表の記載で、大きさについての単位はcmであり、現存値は［　］で示した。

## Tab. 4 石器観察表

| 番号 | 出土位置 | 器種 | 長さ | 幅 | 厚さ | 重さ | 石材 | 備考 | Fig |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | X61・Y67 | 石鏃 | [2.45] | [1.8] | 0.4 | 1.1 | チャート | 凹基無茎式。縄文時代。 | 28 |
| 2 | X67・Y91 | 石鏃 | 1.95 | 1.5 | 0.4 | 1.0 | 黒曜石 | 凹基無茎式。縄文時代。 | 28 |
| 3 | X85・Y97 | 石鏃 | 1.5 | 1.4 | 0.2 | 0.4 | 黒曜石 | 凹基無茎式。縄文時代。 | 28 |
| 4 | H－2 | 石錘 | 14.7 | 9.4 | 3.2 | 705.0 | 安山岩 | 両側面に窪み有り。 | 28 |
| 5 | H－7 | 敲石 | 19.5 | 7.4 | 5.7 | 1300.0 | 安山岩 | 上部、右側面に使用痕有り。 | 28 |
| 6 | H－8 | 敲石 | 13.1 | 12.0 | 3.8 | 900.0 | 安山岩 | 全側面に使用痕有り。 | 28 |
| 7 | H－8 | 砥石・敲石 | 14.6 | 7.7 | 4.6 | 730.0 | 頁岩 | 両面、両端に使用痕有り。 | 28 |

注）表の記載で、大きさについての単位はcm、重さについてはgであり、現存値は［　］で示した。

## Tab. 5 水田址計測表

| 番号 | 面積 (m²) | 長辺 (m) | 短辺 (m) | 標高差 (m) NW | NE | SW | SE | 形状 | 水口 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | (9.68) | (5.60) | (3.20) | 96.02 | 95.92 | — | 95.90 | — | — |
| 2 | (25.94) | (7.85) | (6.00) | 95.95 | 95.95 | 96.00 | 95.96 | — | — |
| 3 | (8.22) | (3.85) | (3.65) | 95.92 | 95.86 | 95.85 | — | — | — |
| 4 | (27.08) | (7.25) | (5.85) | 95.95 | 95.86 | 95.91 | 95.88 | — | — |
| 5 | (73.98) | (15.00) | (7.85) | 95.65 | 95.58 | — | 95.57 | — | E＝1 |
| 6 | (78.93) | (14.00) | (6.00) | 95.66 | 95.59 | 95.66 | 95.59 | — | — |
| 7 | (39.20) | 9.85 | (6.60) | 95.57 | 95.50 | 95.54 | 95.47 | — | — |
| 8 | 58.90 | 8.30 | 7.28 | 95.56 | 95.53 | 95.55 | 95.50 | 方形 | W＝1，E＝1 |
| 9 | (38.84) | 7.72 | (5.65) | 95.58 | 95.55 | 95.56 | 95.52 | — | E＝1 |
| 10 | (34.93) | (10.58) | 3.50 | 95.48 | 95.45 | 95.47 | 95.44 | — | W＝1 |
| 11 | (32.83) | 10.15 | (6.40) | 95.46 | 95.42 | 95.43 | — | — | — |
| 12 | 28.40 | 7.55 | 4.30 | 95.48 | 95.47 | 95.50 | 95.46 | 長方形 | N＝1，E＝1 |
| 13 | 36.14 | 7.50 | 6.40 | 95.46 | 95.47 | 95.44 | 95.42 | 不整形 | W＝1 |
| 14 | (95.39) | 18.10 | (6.50) | 95.52 | 95.51 | 95.51 | 95.50 | — | W=1,S=2,E=1 |
| 15 | (90.75) | 9.75 | (9.50) | 95.45 | 95.49 | 95.41 | 95.43 | — | N＝1 |
| 16 | (19.77) | 5.70 | (3.43) | 95.50 | 95.51 | 95.51 | 95.50 | — | W＝1 |
| 17 | (87.84) | 11.65 | (8.00) | 95.37 | 95.37 | 95.32 | 95.34 | — | N＝1 |
| 18 | (79.41) | 11.20 | (7.65) | 95.45 | 95.37 | 95.40 | 95.37 | — | S＝1 |
| 19 | (36.60) | (15.00) | (3.05) | 95.30 | 95.29 | — | 95.29 | — | N＝2 |
| 20 | (124.05) | (17.45) | 8.10 | 95.35 | 95.37 | 95.30 | 95.30 | — | N＝1，S＝2 |
| 21 | (43.28) | 7.10 | (6.15) | 95.38 | 95.37 | 95.36 | 95.36 | — | — |
| 22 | (53.34) | (10.80) | (5.10) | 95.38 | 95.34 | 95.35 | 95.33 | — | S＝1 |
| 23 | (19.89) | (8.92) | (2.60) | 95.23 | 95.22 | 95.23 | 95.21 | — | — |
| 24 | (105.31) | (22.10) | (4.47) | 95.21 | 95.20 | 95.21 | 95.20 | — | N＝1 |
| 25 | (237.78) | (22.50) | 11.33 | 95.27 | 95.28 | 95.26 | 95.22 | — | N＝2，E＝1 |
| 26 | (82.90) | 10.62 | (8.10) | 95.30 | 95.27 | 95.25 | 95.22 | — | W＝1，S＝1 |
| 27 | (63.51) | (8.43) | 8.20 | 95.33 | 95.34 | 95.29 | 95.28 | — | E＝1 |
| 28 | (172.15) | (19.70) | (9.75) | 95.36 | 95.30 | 95.30 | 95.31 | — | W＝1，S＝2 |
| 29 | (21.81) | (16.40) | (3.00) | 95.34 | 95.36 | 95.34 | — | — | — |

註）表の記載は以下の基準で行った。
①水田面積の算出については1/40の縮尺でプラニメーター（ローラー極式・レンズ式）による3回計測平均値を使用した。なお、小数点以下3桁は四捨五入した。
②確認値は（　）で示した。

Tab. 6 畦畔計測表

| 番号 | グリッド | 方位 | 上幅 | 下幅 | 高さ | 方向 | 調査区 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | X50～52, Y22・23 | N－63°－E | 22 | 40 | 4 | 東西 | A 区 |
| 2 | X50～52, Y20～23 | N－44°－W | 38 | 65 | 5 | 南北 | A 区 |
| 3 | X23～28, Y88～89 | N－87°－E | 34 | 62 | 6 | 東西 | G 1 区 |
| 4 | X25・26, Y87～89 | N－ 0°－E | 22 | 52 | 7 | 南北 | G 1 区 |
| 5 | X25・26, Y89～91 | N－10°－E | 25 | 50 | 5 | 南北 | G 1 区 |
| 6 | X25～28, Y91 | N－86°－E | 30 | 56 | 7 | 東西 | G 1 区 |
| 7 | X27・28, Y88～93 | N－ 2°－W | 32 | 60 | 7 | 南北 | G 1 区 |
| 8 | X28～31, Y90・91 | N－85°－W | 28 | 55 | 4 | 東西 | G 1 区 |
| 9 | X29 , Y90～92 | N－ 3°－W | 30 | 52 | 4 | 南北 | G 1 区 |
| 10 | X30 , Y89・90 | N－18°－W | 22 | 44 | 5 | 南北 | G 1 区 |
| 11 | X31・32, Y89～91 | N－ 2°－W | 38 | 62 | 5 | 南北 | G 1 区 |
| 12 | X28～34, Y88・89 | N－16°－W | 36 | 62 | 9 | 東西 | G 1 区 |
| 13 | X32 , Y87・88 | N－ 3°－W | 22 | 52 | 5 | 南北 | G 1 区 |
| 14 | X34 , Y87～91 | N－ 6°－W | 42 | 76 | 9 | 南北 | G 1 区 |
| 15 | X36～38, Y87～91 | N－20°－W | 30 | 60 | 6 | 南北 | G 1 区 |
| 16 | X38・39, Y87～89 | N－12°－W | 26 | 60 | 5 | 南北 | G 1 区 |
| 17 | X34～41, Y88・89 | N－82°－E | 40 | 74 | 6 | 東西 | G 1 区 |
| 18 | X38～41, Y91 | N－87°－E | 38 | 68 | 6 | 東西 | G 1 区 |
| 19 | X43～50, Y93 | N－86°－E | 22 | 52 | 7 | 東西 | G 2 区 |
| 20 | X43～49, Y90・91 | N－87°－E | 28 | 58 | 6 | 東西 | G 2 区 |
| 21 | X43～45, Y88 | N－82°－E | 21 | 41 | 6 | 東西 | G 2 区 |
| 22 | X45 , Y93・94 | N－ 8°－W | 20 | 48 | 4 | 南北 | G 2 区 |
| 23 | X45 , Y88～90 | N－ 8°－W | 18 | 50 | 5 | 南北 | G 2 区 |
| 24 | X48 , Y90～93 | N－ 5°－W | 20 | 56 | 4 | 南北 | G 2 区 |

註）表の記載は以下の基準で行った。
各項目の計測については1/40の縮尺で行った。
上幅、下幅、高さの単位はcmである。

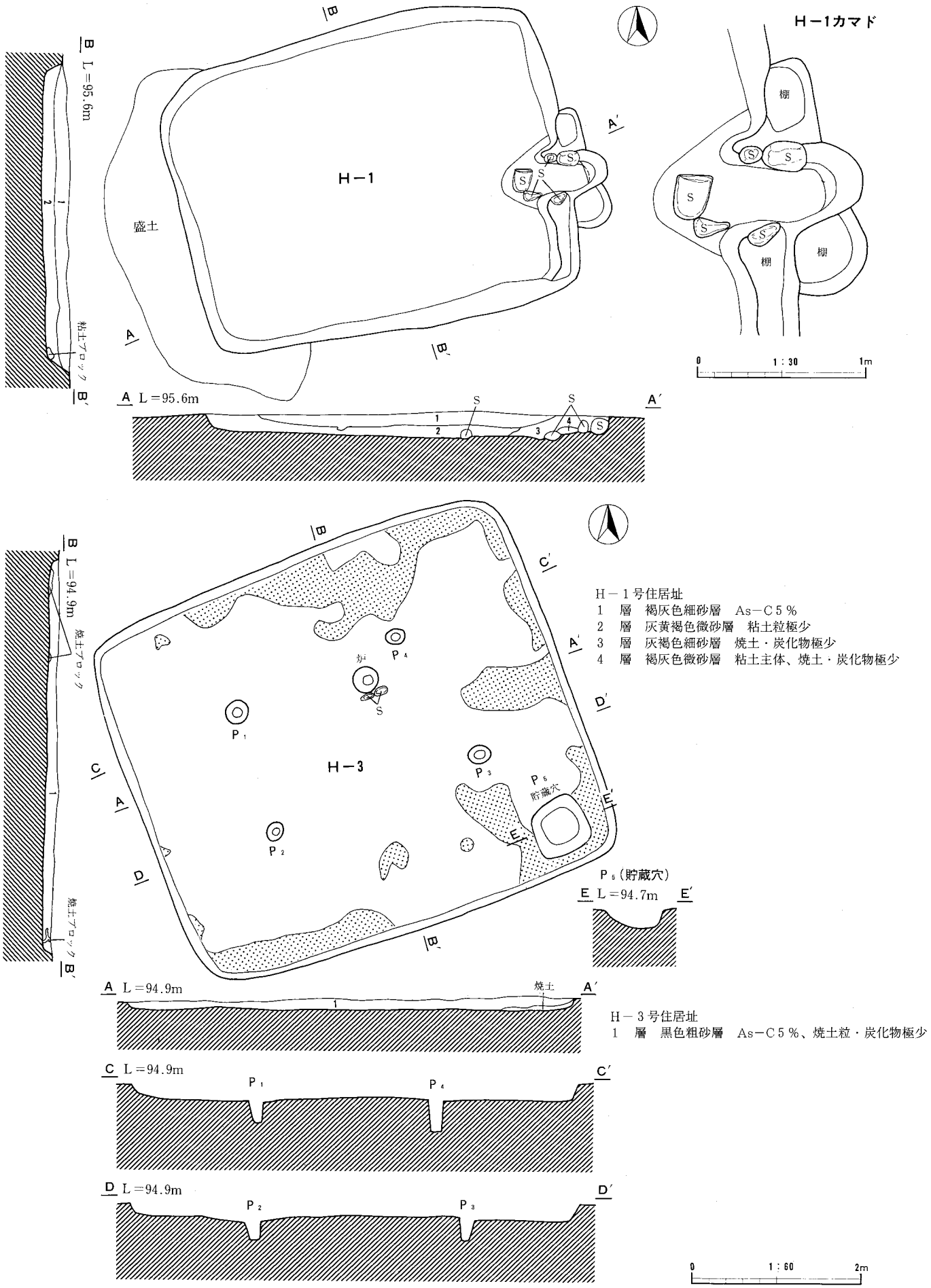



Fig. 9 H－1・3号住居址

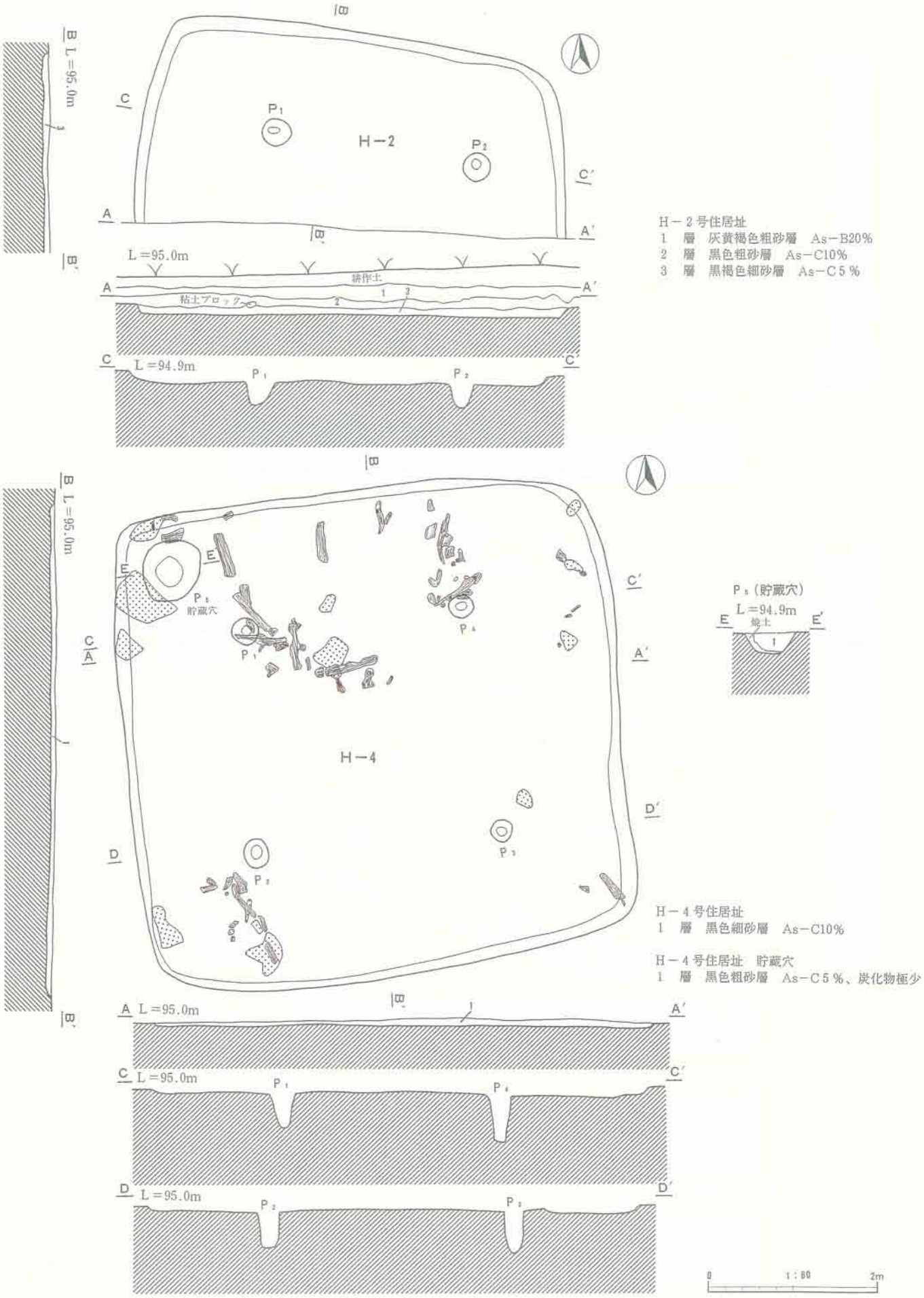
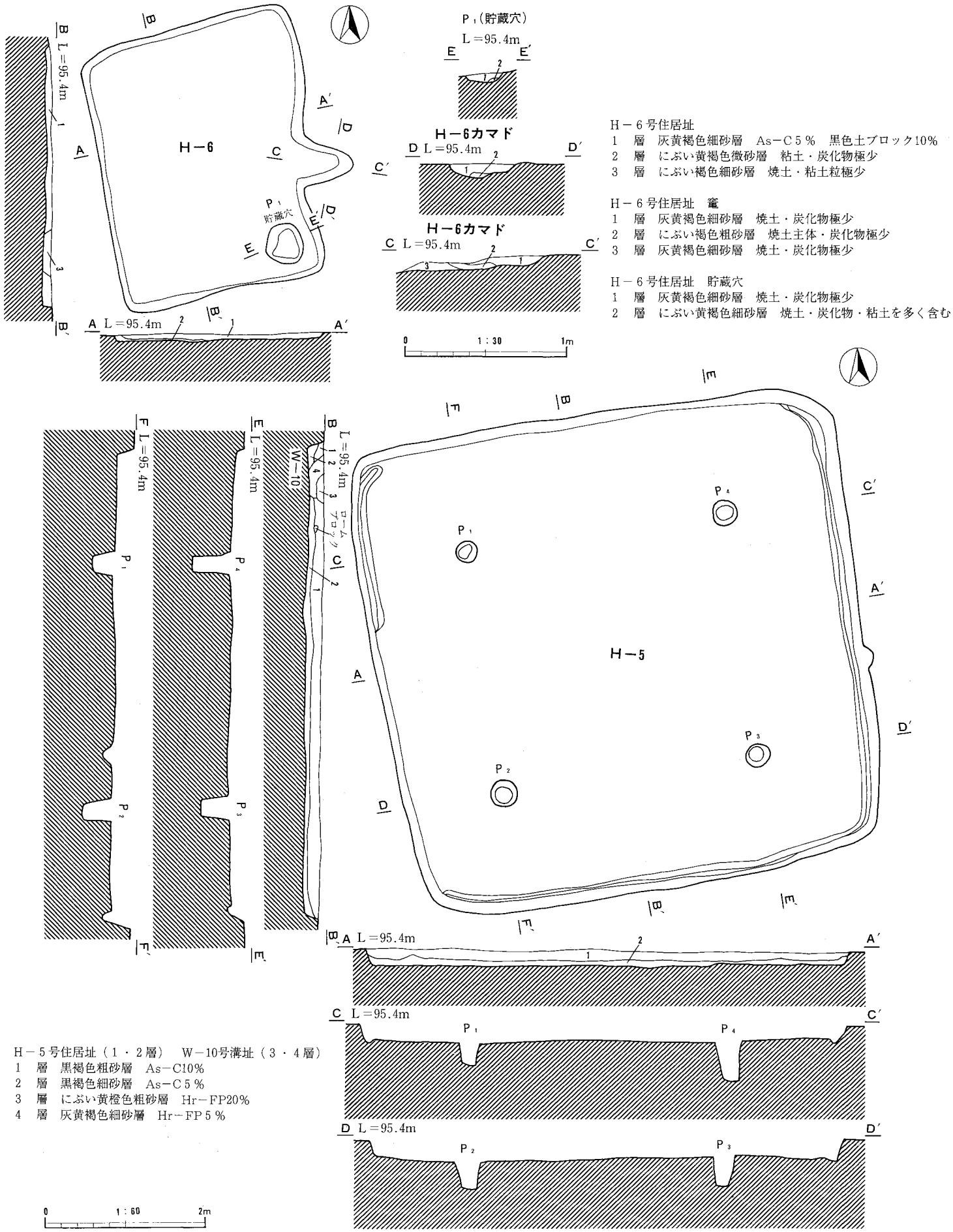



Fig. 10　H－2・4号住居址




H－6号住居址
1　層　灰黄褐色細砂層　As－C5％　黒色土ブロック10％
2　層　にぶい黄褐色微砂層　粘土・炭化物極少
3　層　にぶい褐色細砂層　焼土・粘土粒極少

H－6号住居址　竈
1　層　灰黄褐色細砂層　焼土・炭化物極少
2　層　にぶい褐色粗砂層　焼土主体・炭化物極少
3　層　灰黄褐色細砂層　焼土・炭化物極少

H－6号住居址　貯蔵穴
1　層　灰黄褐色細砂層　焼土・炭化物極少
2　層　にぶい黄褐色細砂層　焼土・炭化物・粘土を多く含む

H－5号住居址（1・2層）　W－10号溝址（3・4層）
1　層　黒褐色粗砂層　As－C10％
2　層　黒褐色細砂層　As－C5％
3　層　にぶい黄橙色粗砂層　Hr－FP20％
4　層　灰黄褐色細砂層　Hr－FP5％

Fig. 11　H－5・6号住居址

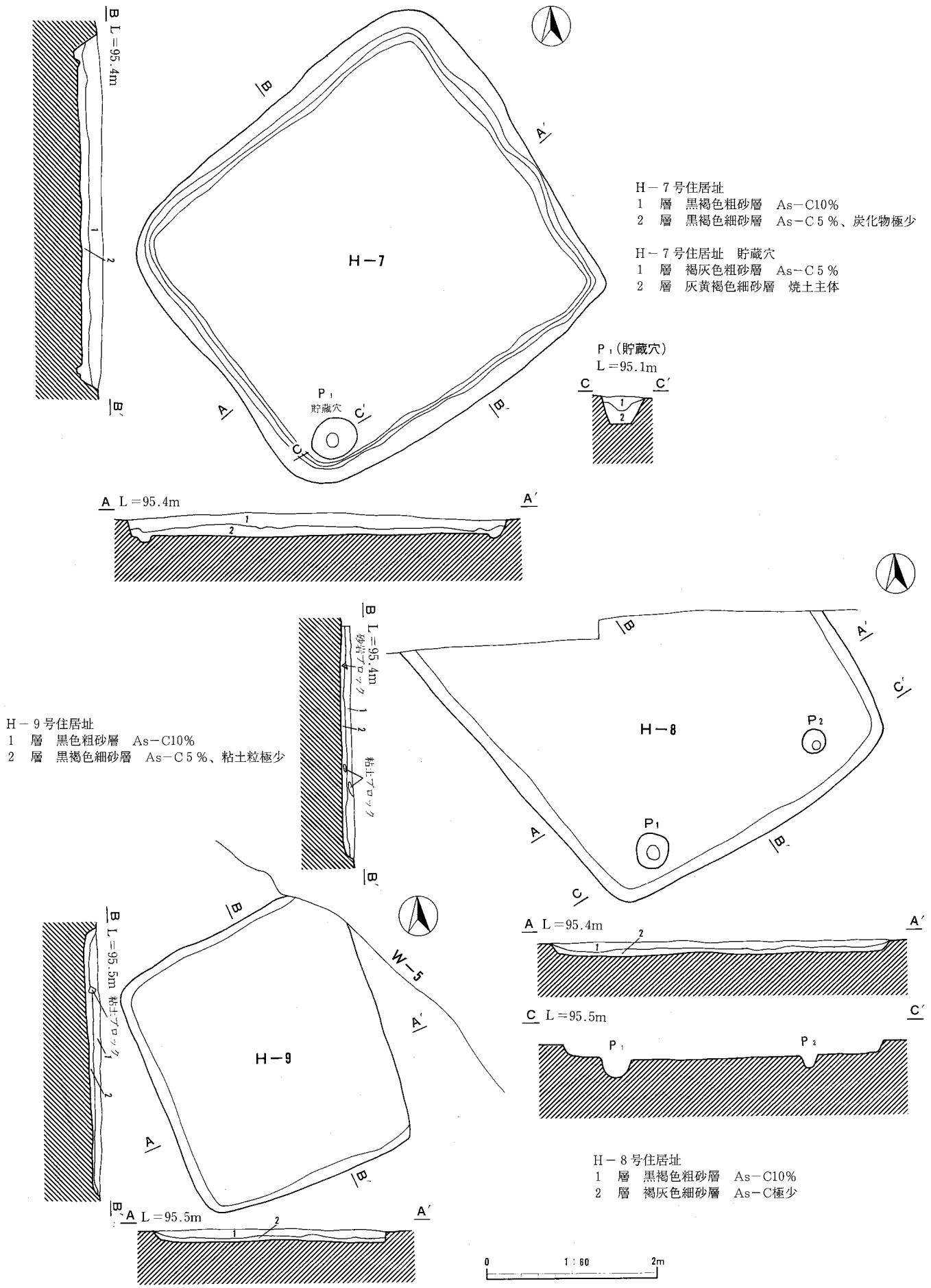



Fig. 12　H－7～9号住居址

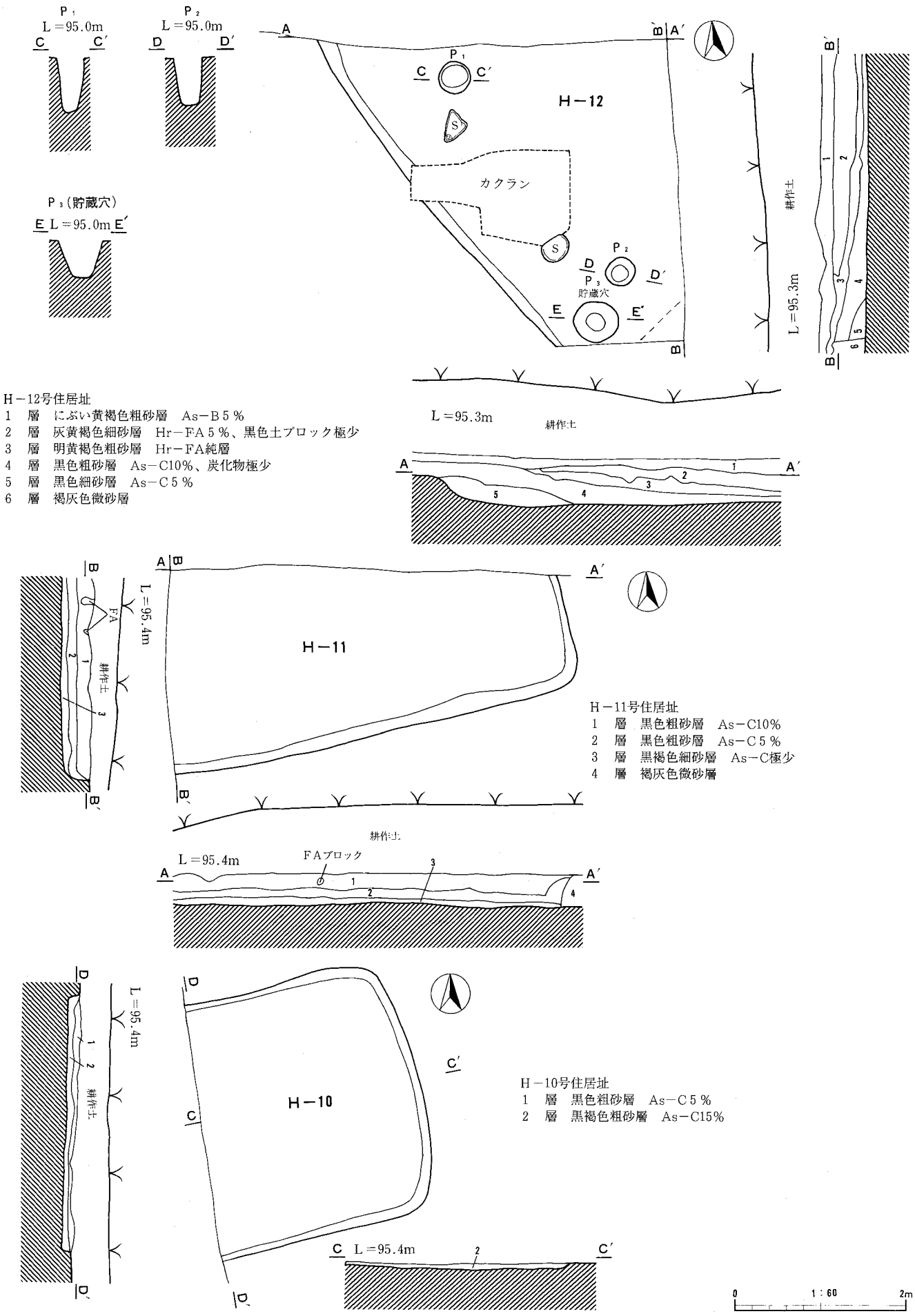
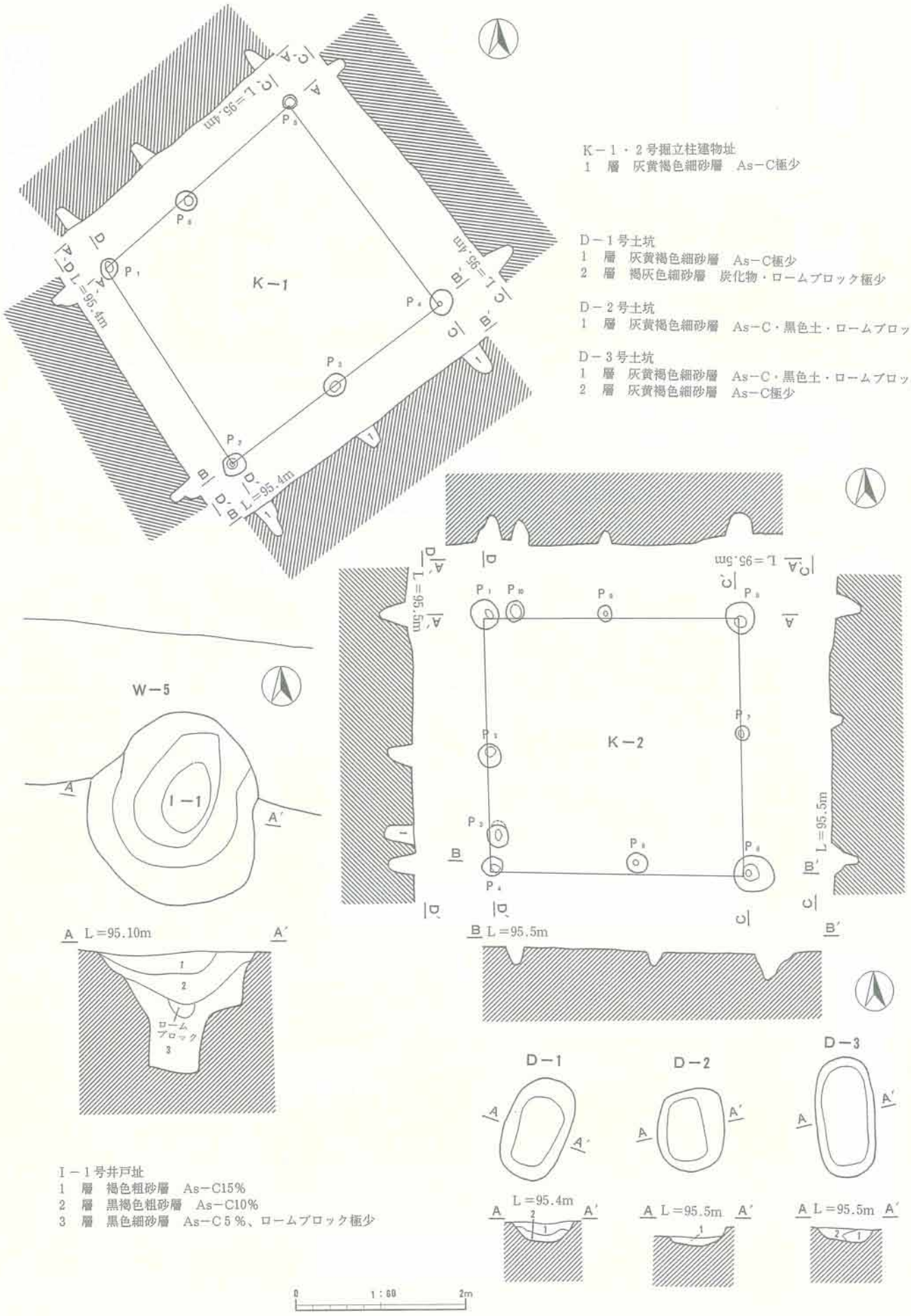



Fig. 13　H－10～12号住居址




K－1・2号掘立柱建物址
1　層　灰黄褐色細砂層　As－C極少

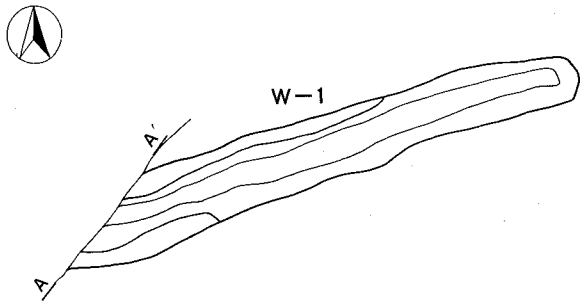
D－1号土坑
1　層　灰黄褐色細砂層　As－C極少
2　層　褐灰色細砂層　炭化物・ロームブロック極少

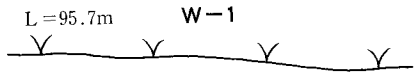
D－2号土坑
1　層　灰黄褐色細砂層　As－C・黒色土・ロームブロック極少

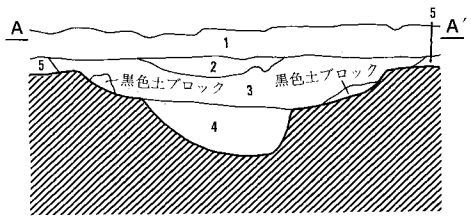
D－3号土坑
1　層　灰黄褐色細砂層　As－C・黒色土・ロームブロック極少
2　層　灰黄褐色細砂層　As－C極少

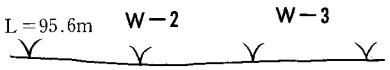
I－1号井戸址
1　層　褐色粗砂層　As－C15%
2　層　黒褐色粗砂層　As－C10%
3　層　黒色細砂層　As－C5%、ロームブロック極少

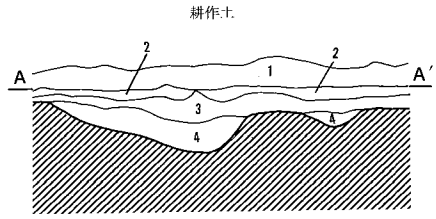
Fig. 14　K－1・2、D－1～3、I－1

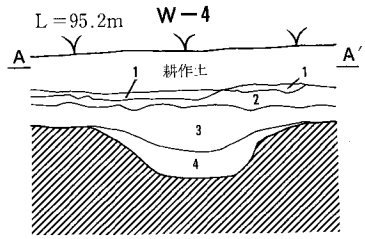


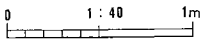




W－１号溝址北壁
1　層　褐灰色粗砂層　As－B10％
2　層　褐灰色細砂層　As－B極少
3　層　灰褐色細砂層　As－C極少
4　層　黒褐色細砂層　As－C極少
5　層　黒褐色粗砂層　As－C10％

W－２・３号溝址
1　層　褐灰色粗砂層　As－B５％
2　層　灰黄褐色粗砂層　As－B20％
3　層　褐灰色細砂層　As－C５％
4　層　灰黄褐色微砂層　As－C極少

W－４号溝址
1　層　黒色粗砂層　Hr－FP５％
2　層　灰黄褐色粗砂層　Hr－FAを多く含む
3　層　黒色粗砂層　As－C10％
4　層　黒褐色細砂層　As－C５％



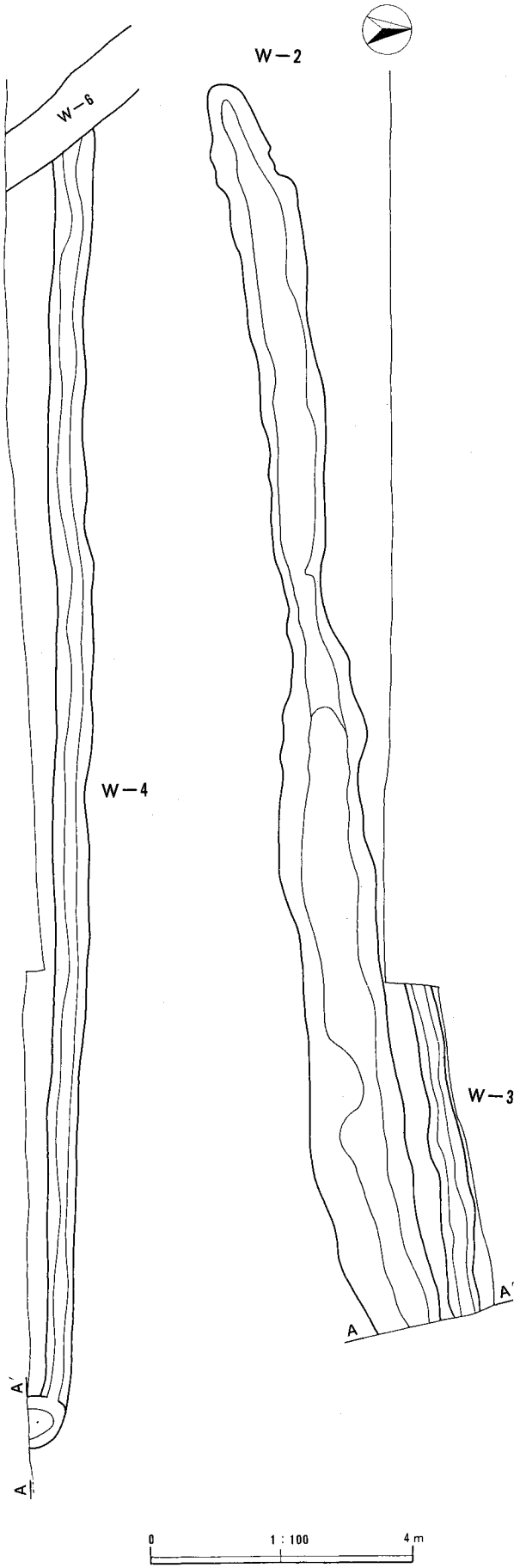




Fig. 15　W－１～４号溝址

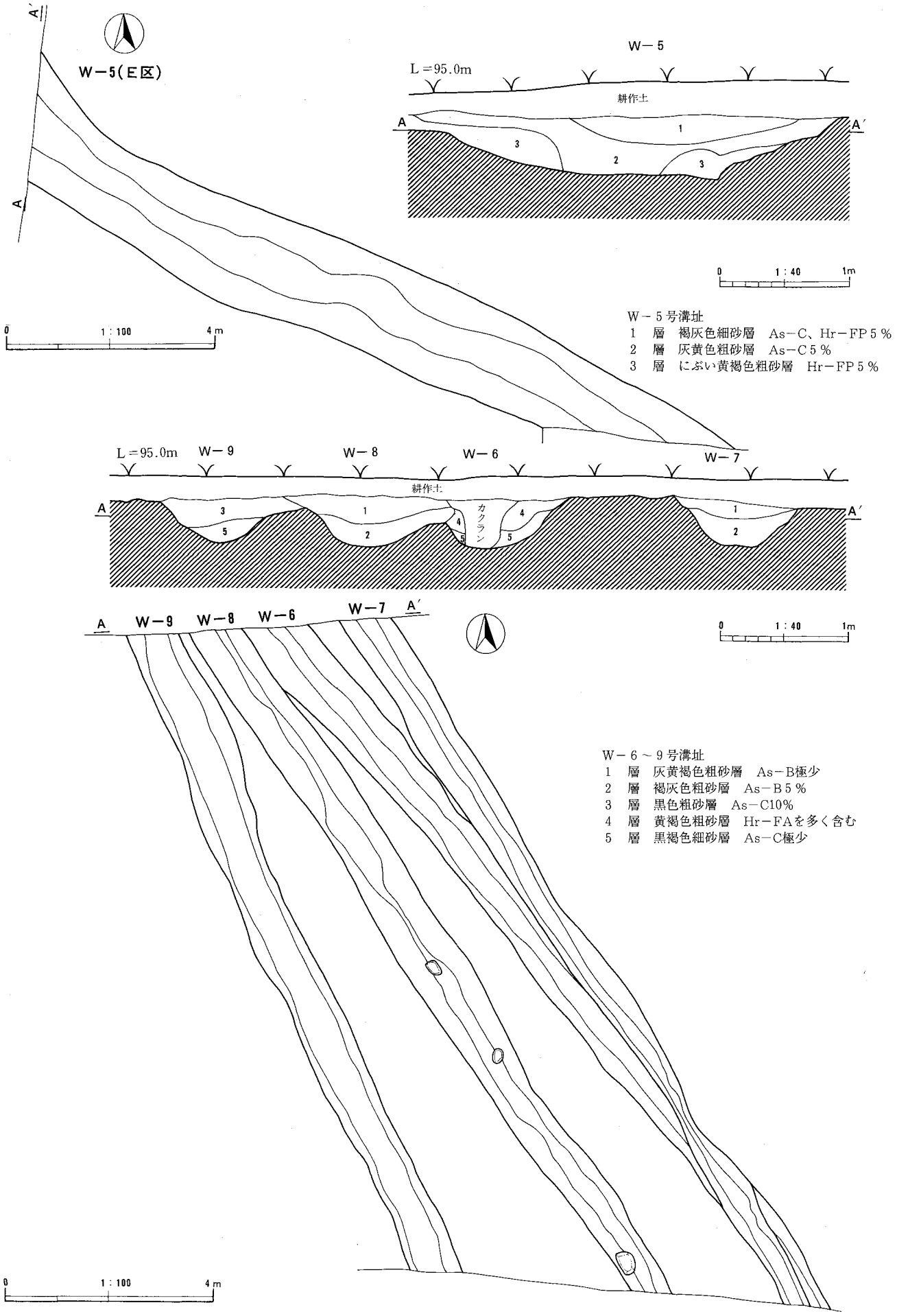



Fig. 16　W－5～9号溝址

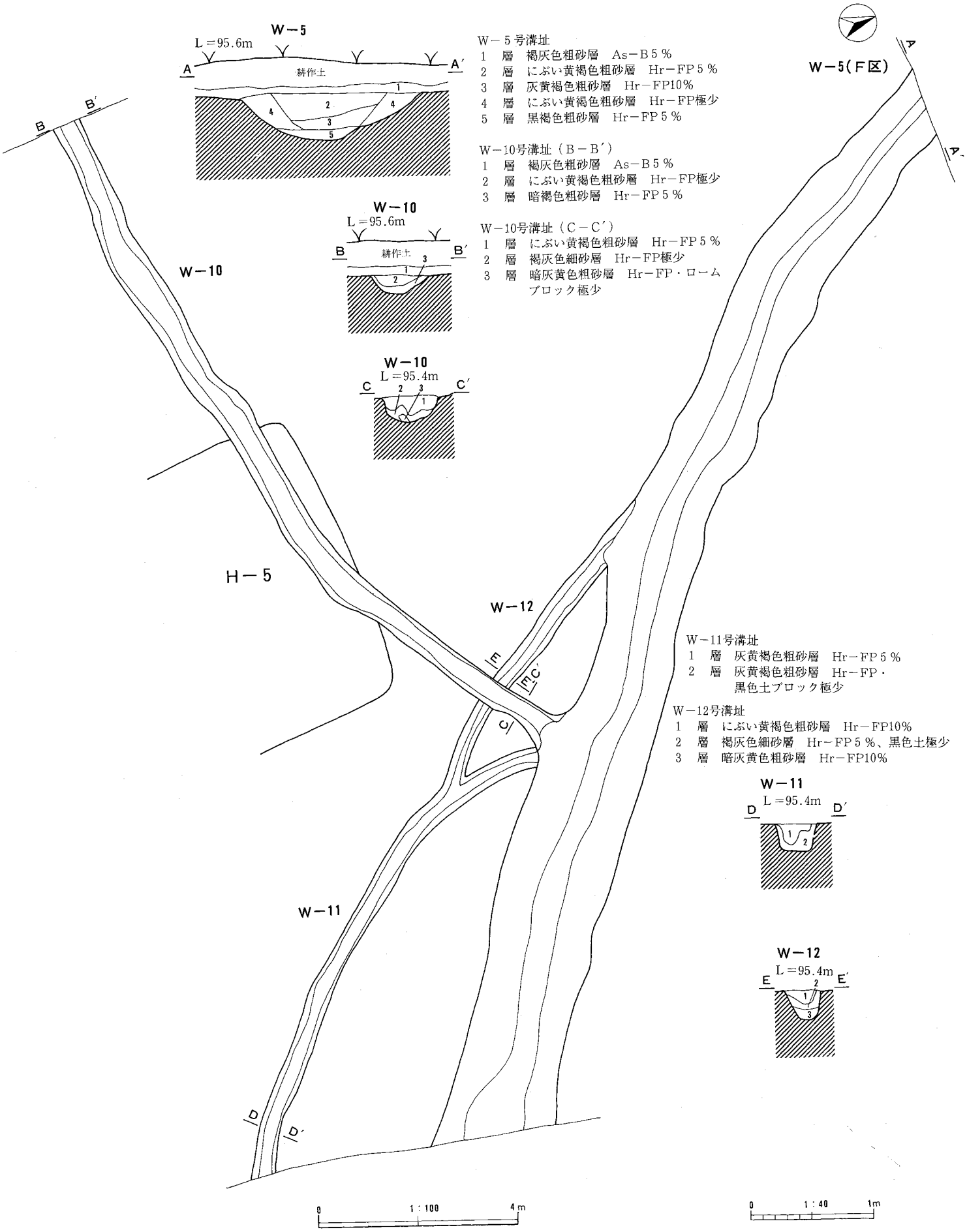



Fig. 17　W－５・10～12号溝址

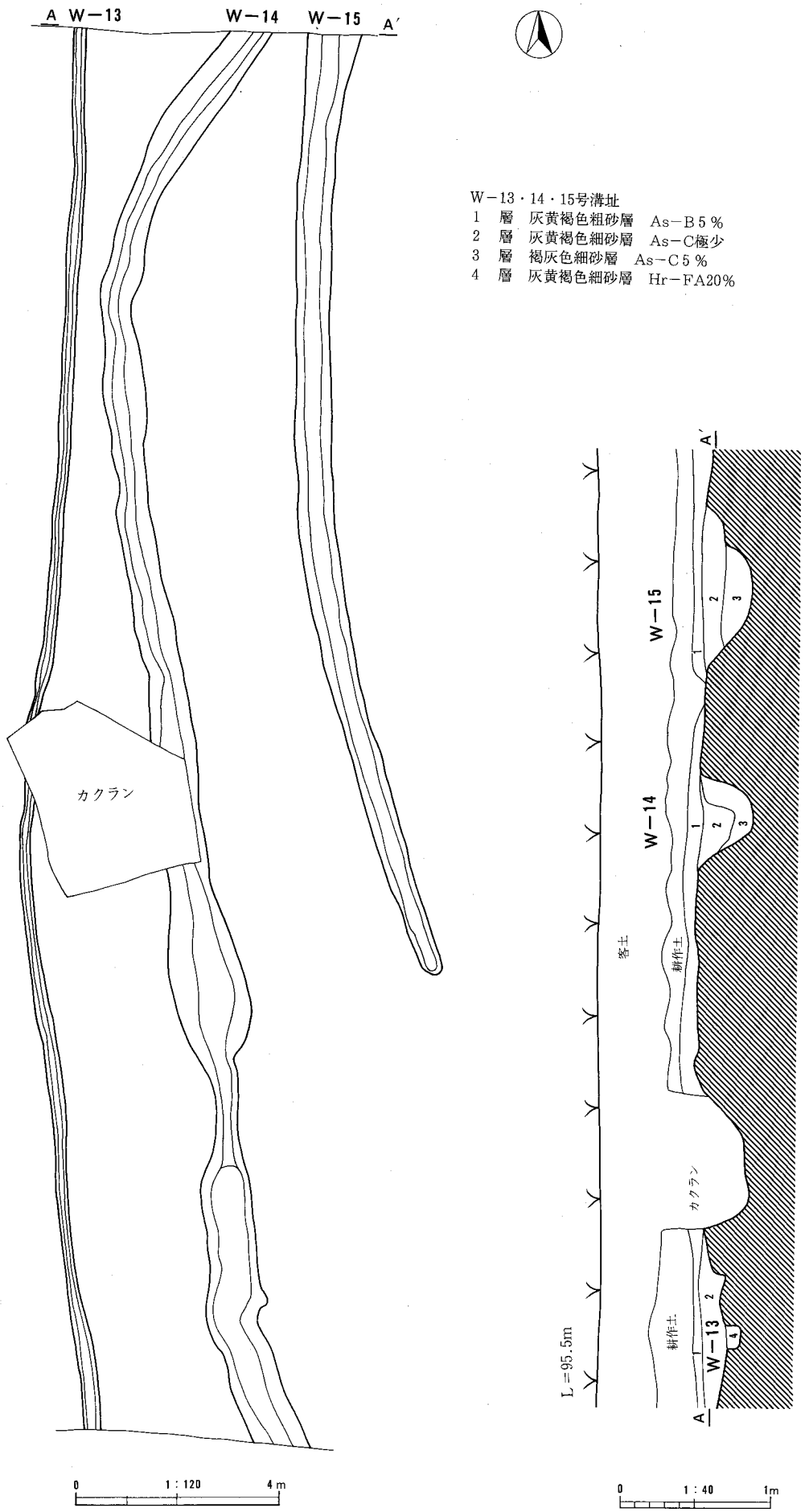
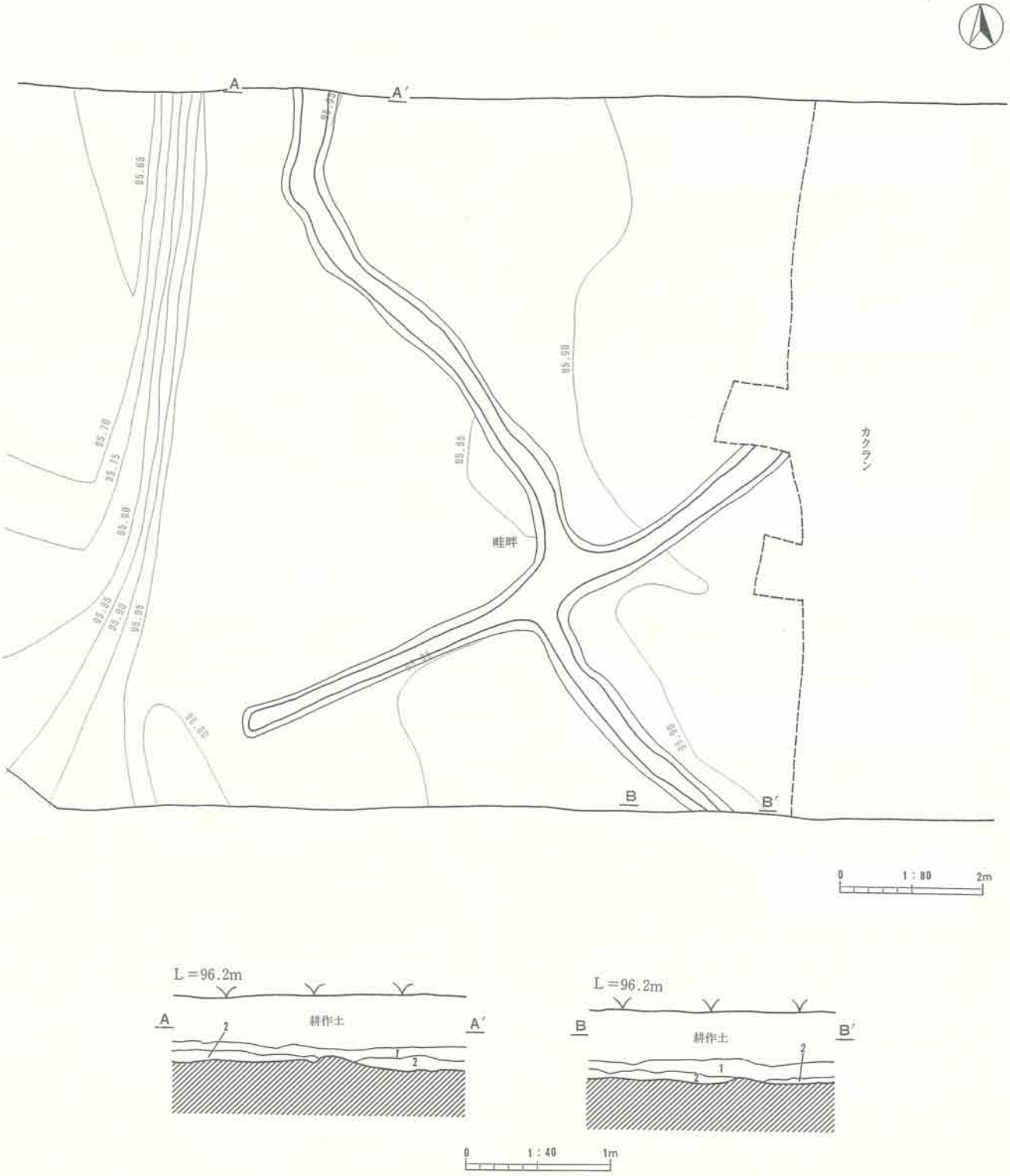



Fig. 18　W－13～15号溝址




A区　水田址
1　層　灰黄褐色粗砂層　As－B20％、鉄分の酸化・沈殿が見られる
2　層　オリーブ灰色粗砂層　As－B純層

Fig. 19　A区水田址

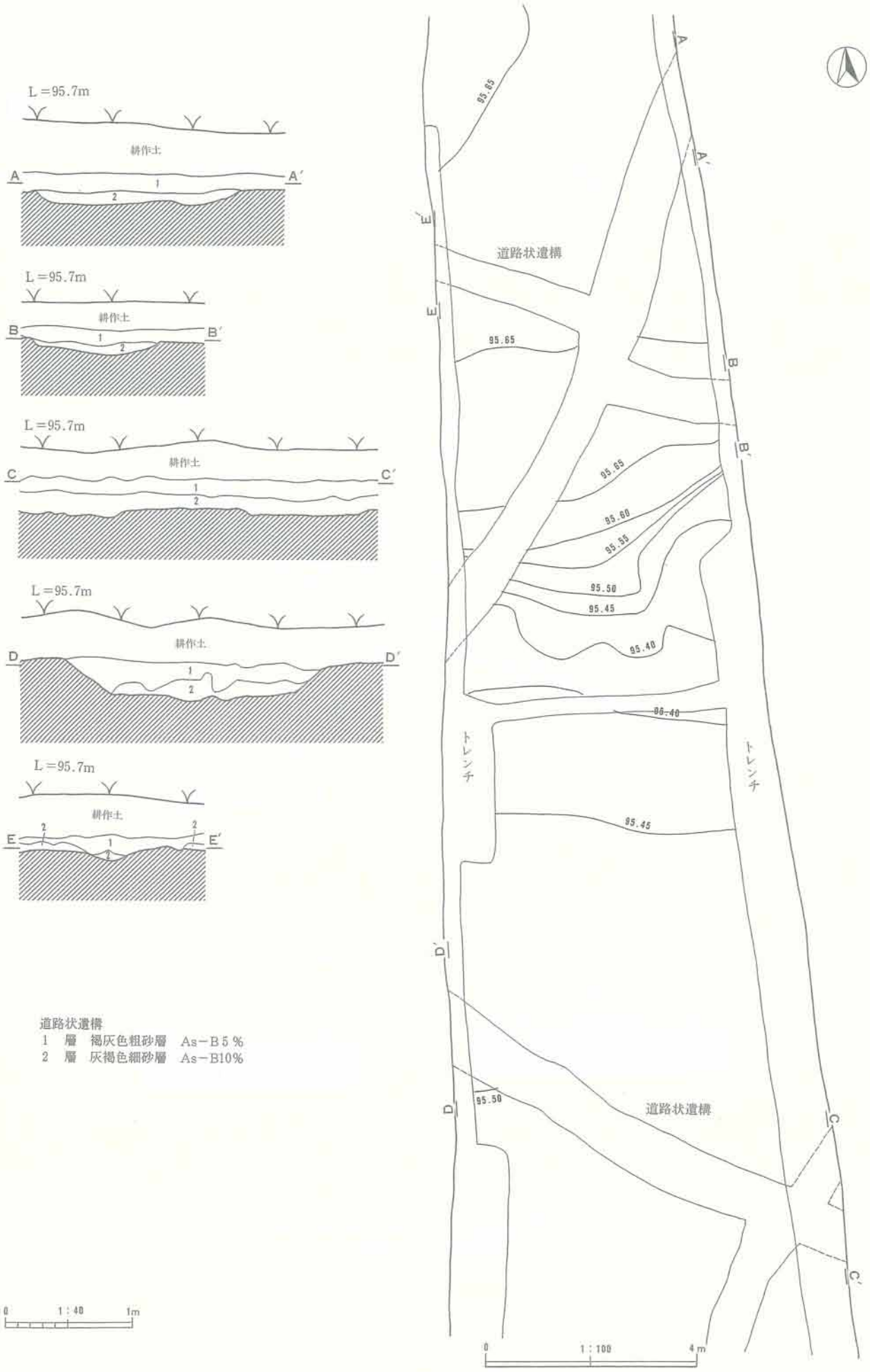



Fig. 20 B区道路状遺構

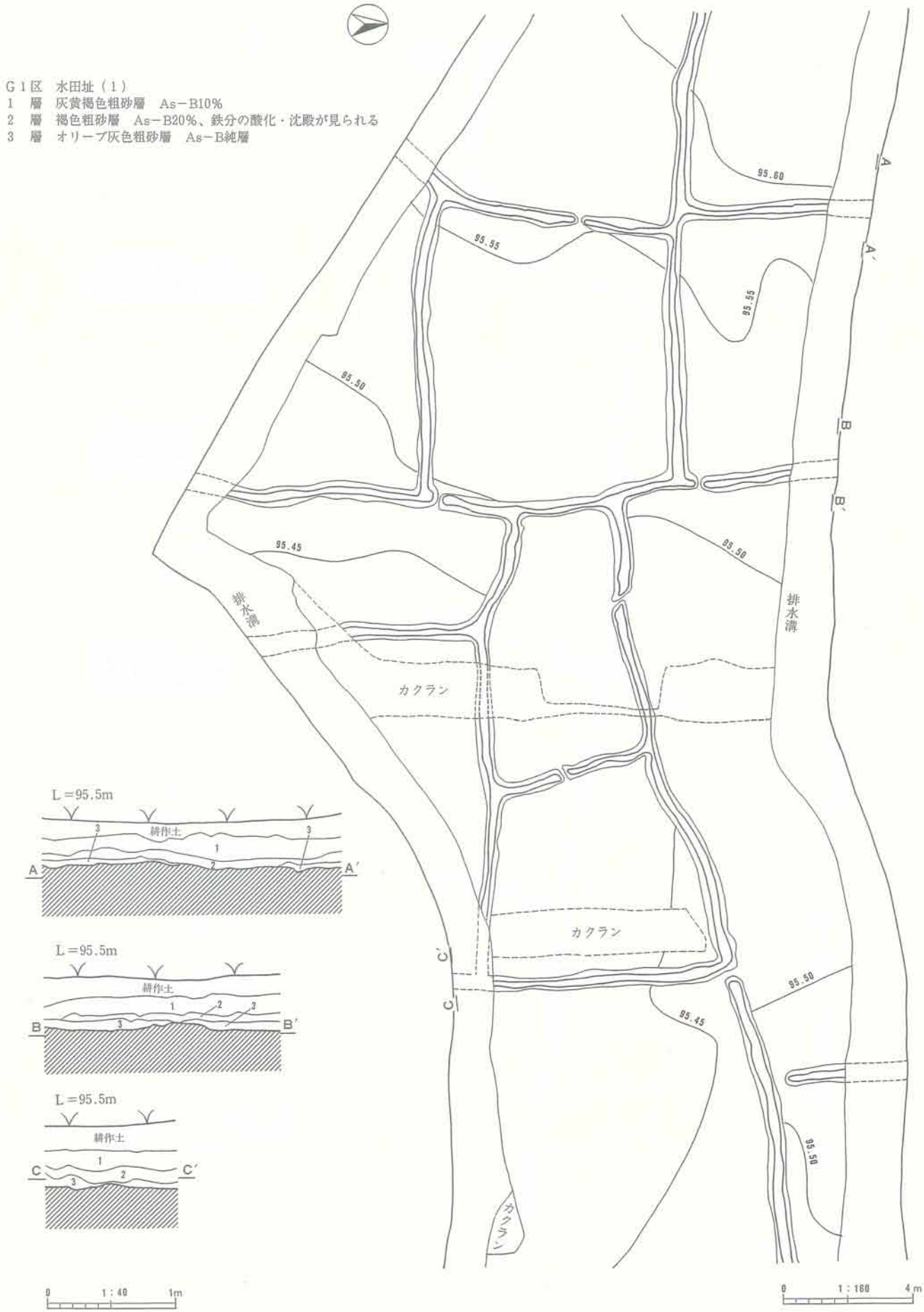
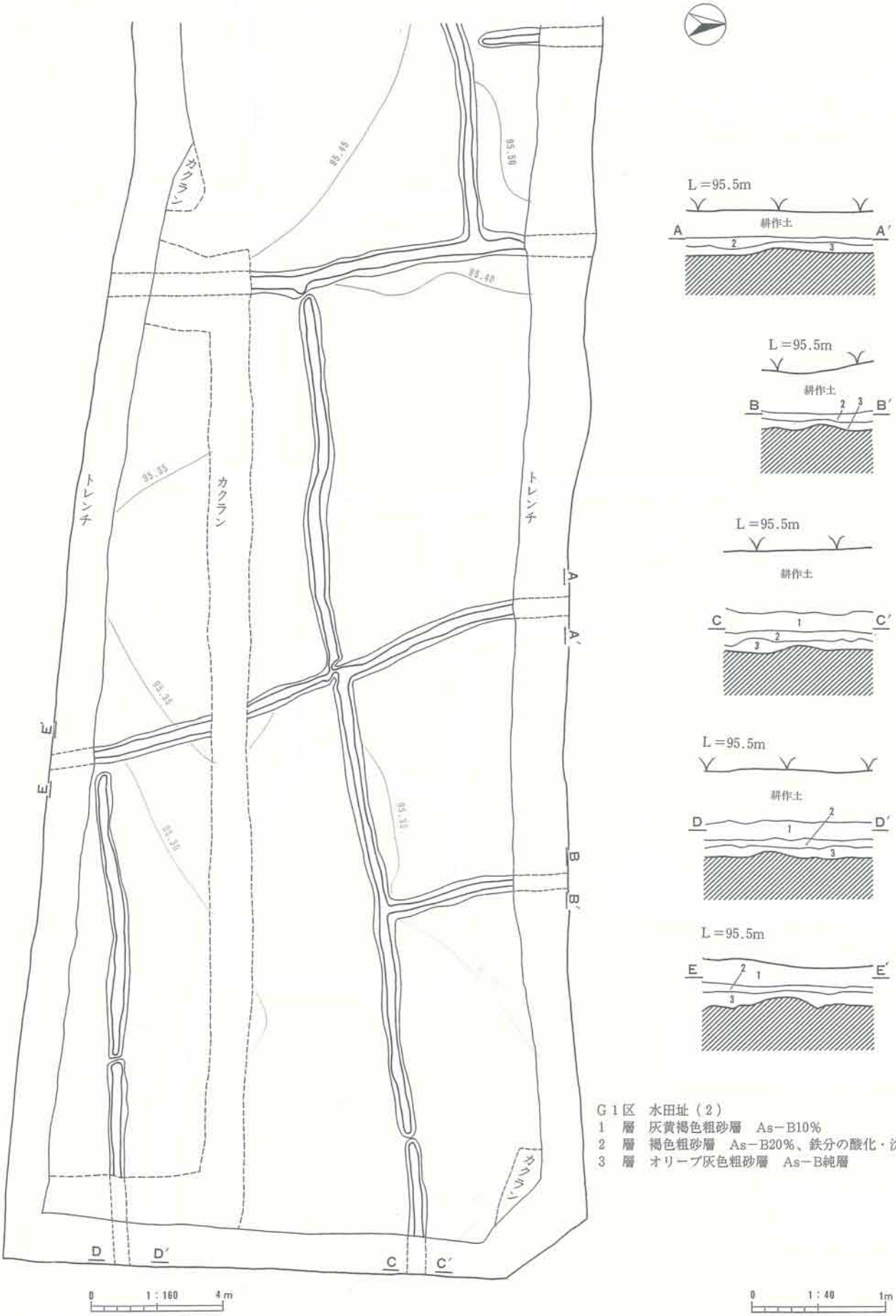



Fig. 21　G１区水田址（１）




G１区　水田址（２）
1　層　灰黄褐色粗砂層　As－B10%
2　層　褐色粗砂層　As－B20%、鉄分の酸化・沈殿が見られる
3　層　オリーブ灰色粗砂層　As－B純層

Fig. 22　G１区水田址（２）

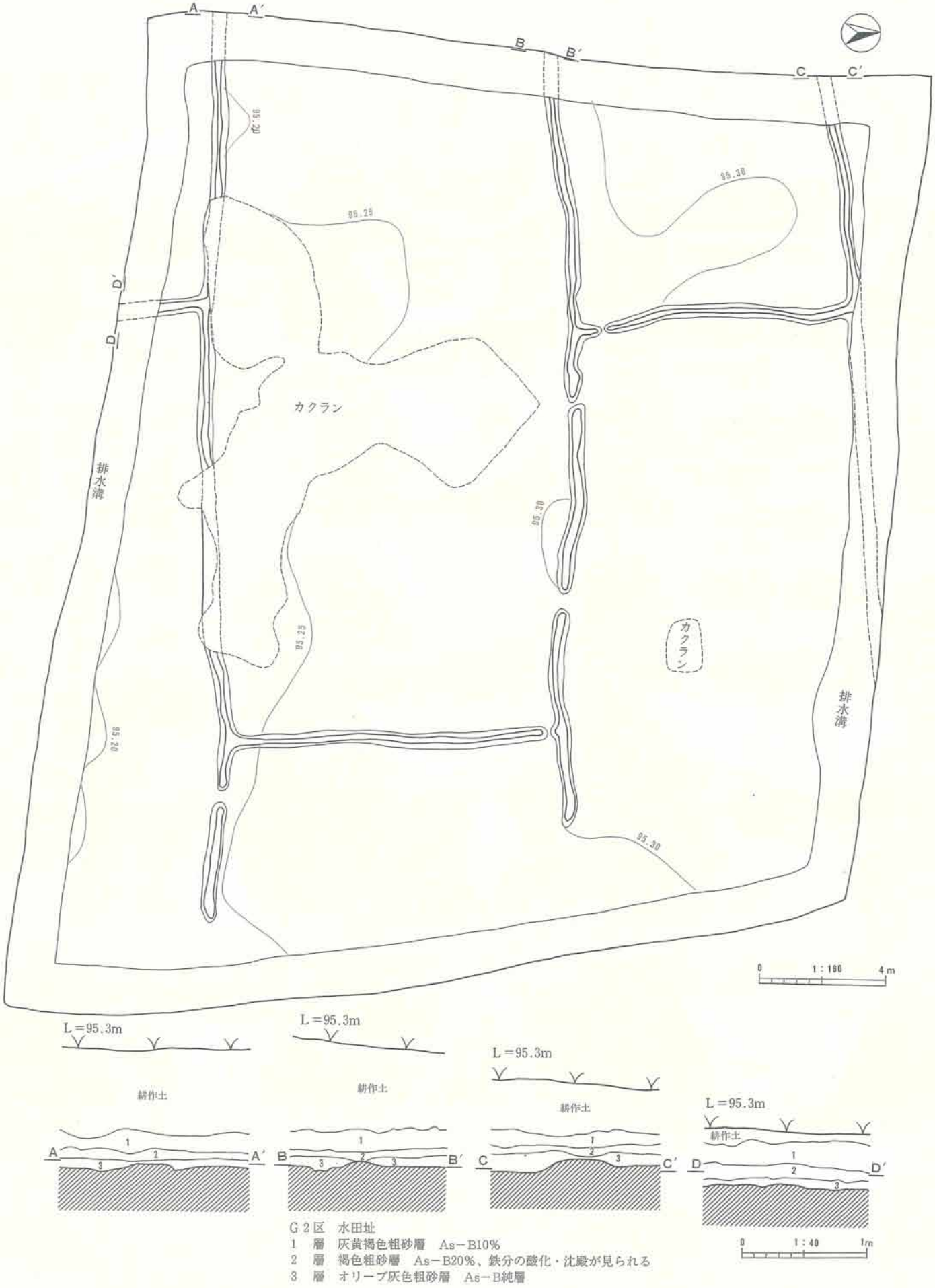



Fig. 23　G 2 区水田址

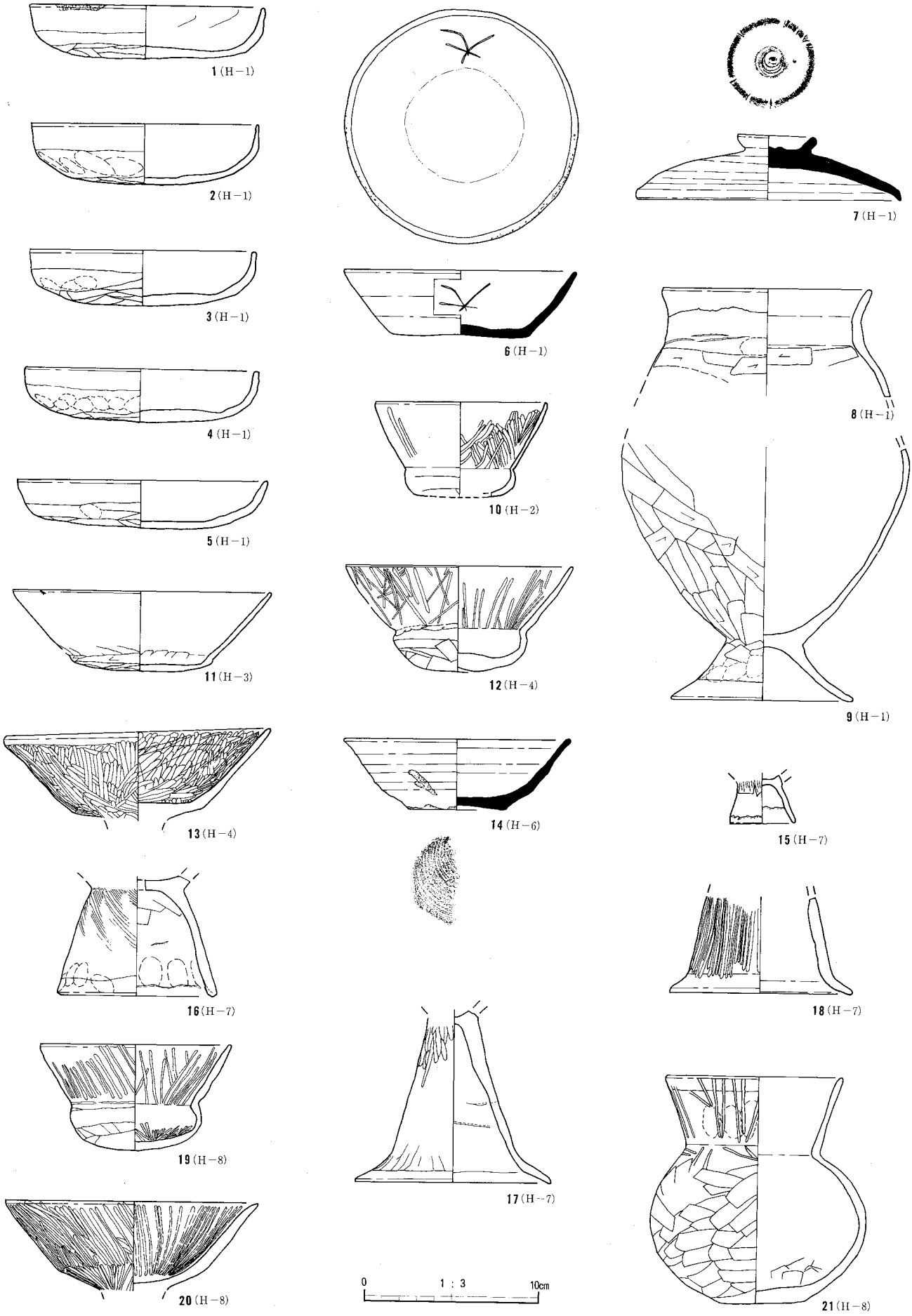



Fig. 24　H－1～4・6～8出土の土器

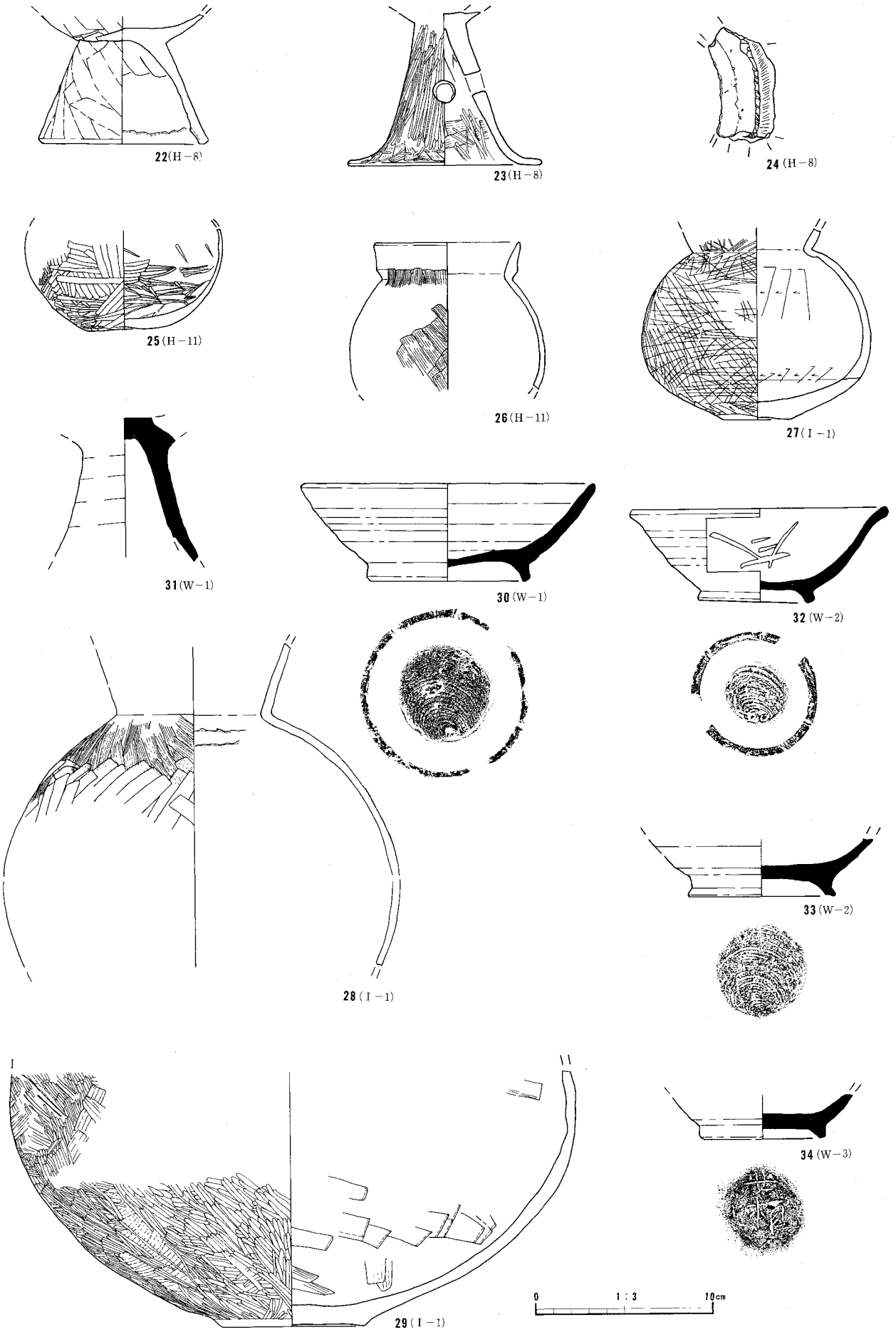



Fig. 25　H－8・11、I－1、W－1～3出土の土器

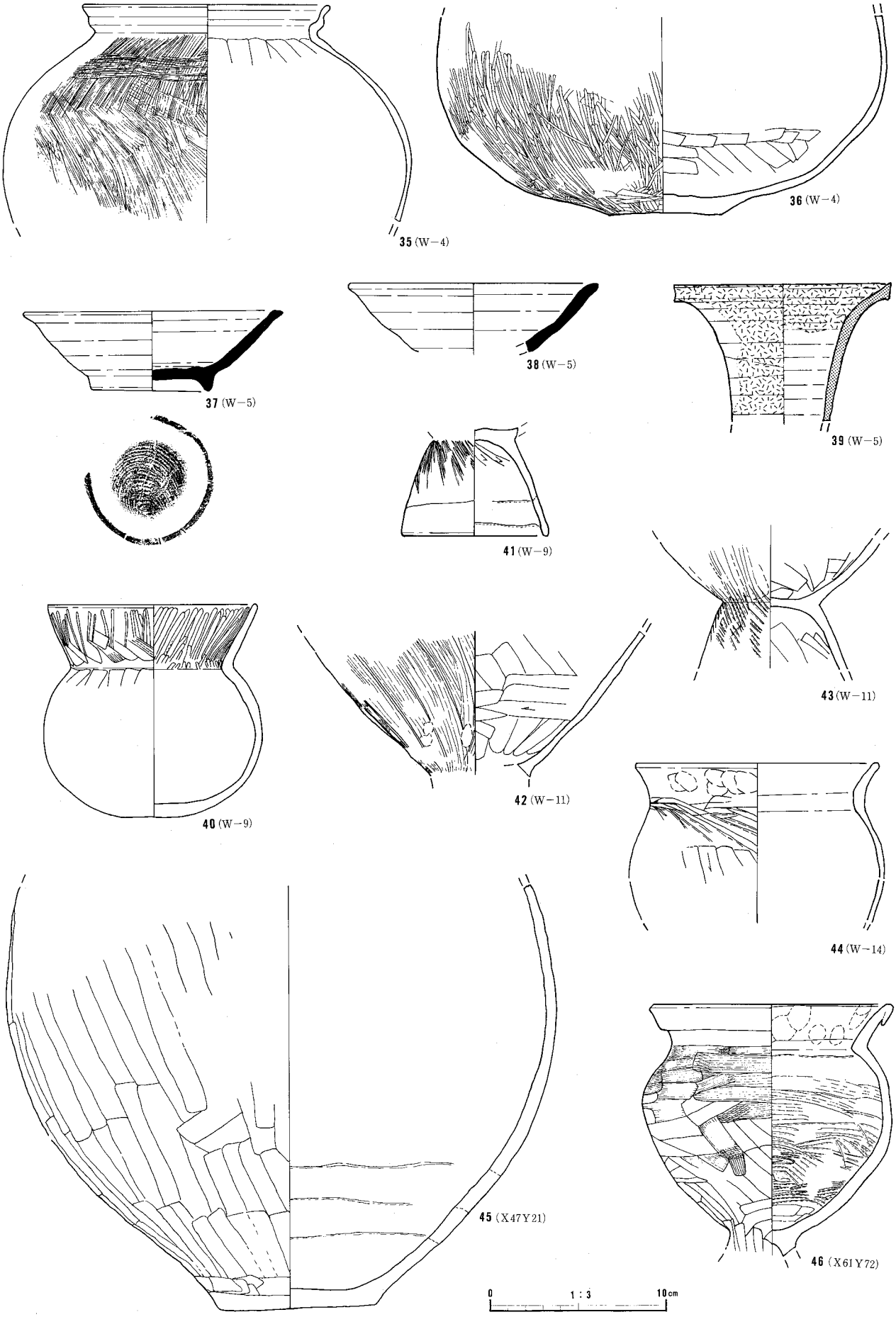



Fig. 26　W－4・5・9・11・14、グリッド出土の土器

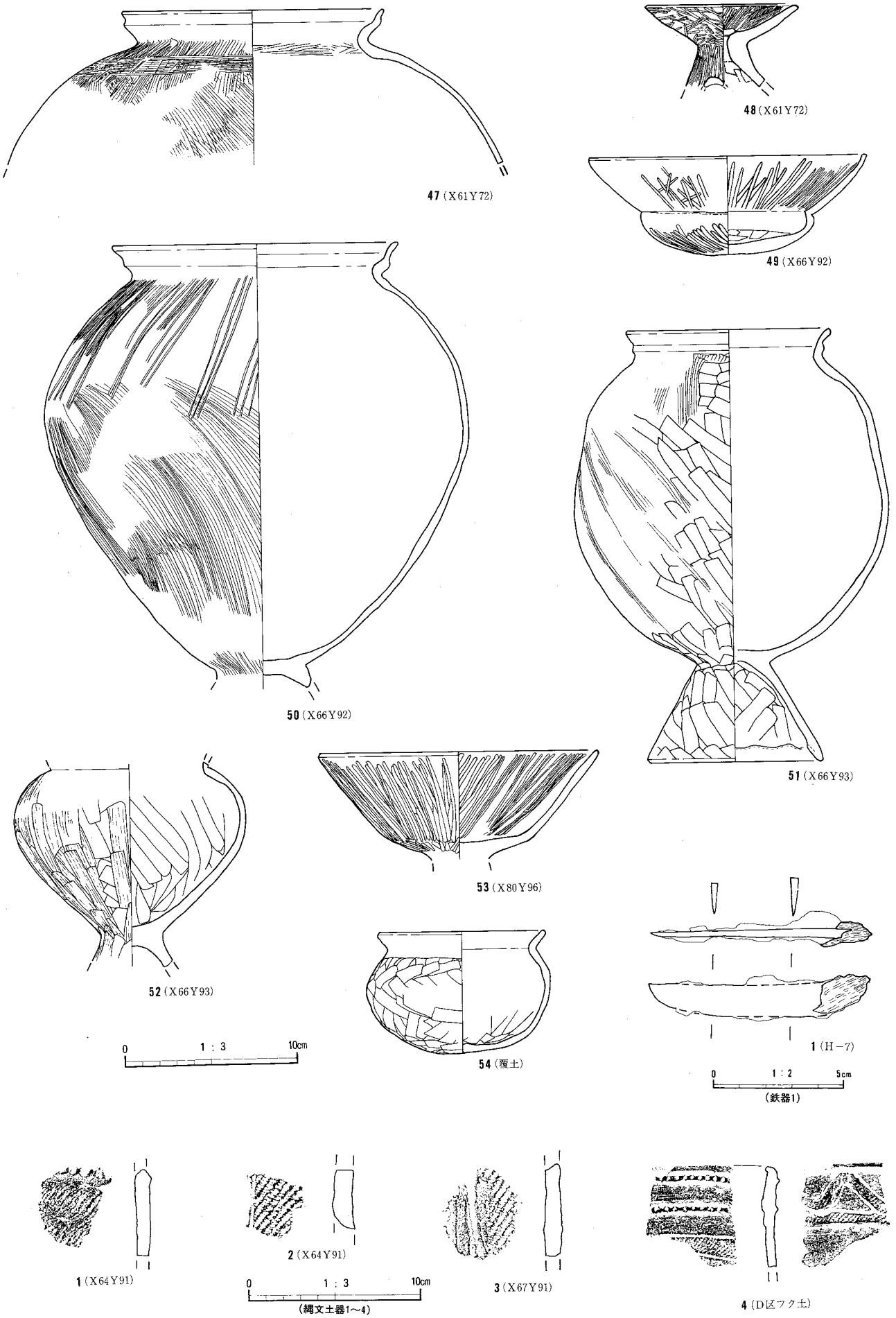



Fig. 27 グリッド出土の土器、鉄器、縄文土器

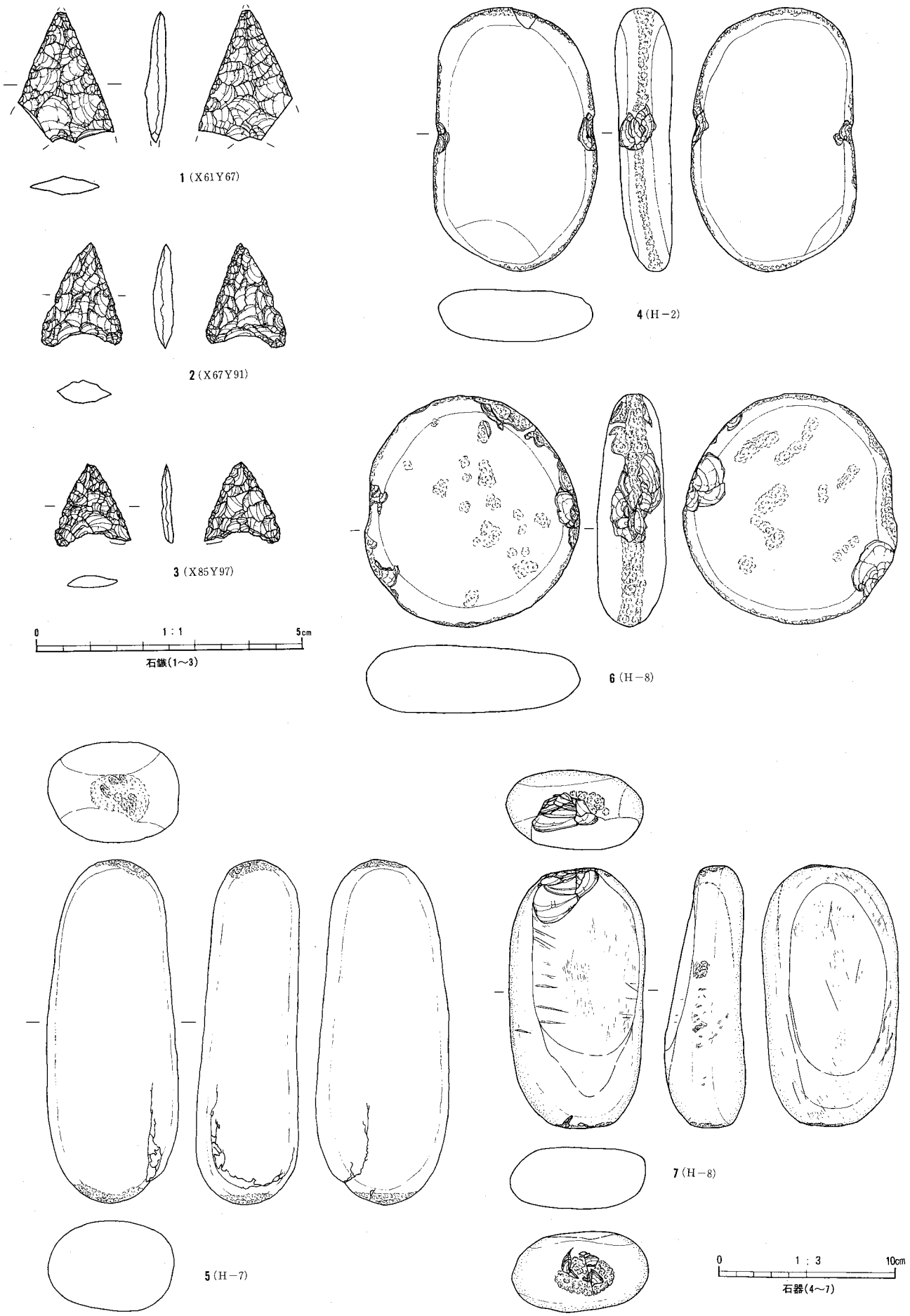



Fig. 28　六供東京安寺遺跡出土の石器

# 付編１　六供東京安寺遺跡の自然科学分析

株式会社　古環境研究所

## Ⅰ．六供東京安寺遺跡の土層とテフラ

### １．はじめに

群馬県域に分布する後期更新世以降に堆積した地層の中には、浅間火山や榛名火山をはじめとする北関東地方とその周辺に分布する火山のほか、九州地方の姶良カルデラなど遠方の火山に由来するテフラ（火山砕屑物，いわゆる火山灰）が多く認められる。テフラには噴出年代が明らかにされている示標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡で求めることで、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代を知ることができるようになっている。

そこで、構築年代の不明な土層や遺構が認められた六供東京安寺遺跡において、地質調査を行って土層を記載するとともにテフラの観察同定を行い、土層や遺構の年代に関する資料を収集することになった。調査分析の対象となった地点は、Ｇ－２区およびＧ－３区北壁中央地点の２地点である。

### ２．土層の層序

(1)　Ｇ－２区

Ｇ－２区では、下位より青灰色粘質土（層厚10cm以上）、黄色がかった褐色粘質土（層厚23cm）、灰色粘質土（層厚７cm）、黒泥層（層厚12cm）、灰色軽石に富む灰色土（層厚７cm，軽石の最大径５mm）、下位の灰色軽石混じり黒灰色土（層厚10cm，軽石の最大径４mm）、黒灰色粘質土（層厚１cm）、成層したテフラ層（層厚3.8cm）、白色軽石混じり灰色粘質土（層厚12cm，軽石の最大径５mm）、暗灰色土（層厚４cm）、成層したテフラ層（層厚7.2cm）、暗褐色土（層厚５cm）、黄灰色土（層厚15cm）、暗灰色土（層厚13cm）、盛土（層厚27cm）の連続が認められた（図１）。

これらのうち、発掘調査では上位の成層したテフラ層の直下から水田面が検出されている。また灰色土中に多く含まれる灰色軽石は、その層相から４世紀中葉に浅間火山から噴出した浅間Ｃ軽石（As－C，新井，1979）に由来すると考えられる。２層の成層したテフラ層のうち、下位のテフラ層は下部の桃褐色細粒火山灰層（層厚0.8cm）と白色軽石を含む黄色粗粒火山灰層（層厚３cm，軽石の最大径18mm）から構成されている。このテフラ層は、その特徴から６世紀初頭に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳渋川テフラ（Hr－FA，新井，1979，坂口，1986，早田，1989，町田・新井，1992）に同定される。

一方、上位の成層したテフラ層は、下位より灰色細粒火山灰層（層厚0.2cm）、灰色細粒火山灰混じり褐灰色軽石層（層厚２cm，軽石の最大径３mm）、褐色細粒軽石層（層厚２cm，軽石の最大径２mm）、黄色細粒軽石層（層厚３cm，軽石の最大径２mm）から構成されている。このテフラ層は、その層相から1108（天仁元）年に浅間火山から噴出した浅間Ｂテフラ（As－B，新井，1979）に同定される。このことから、発掘調査により検出された水田面は、As－Bにより覆われていることがわかる。

(2)　Ｇ－３区北壁中央地点

Ｇ－３区北壁中央地点では、下位より暗灰色粘質土（層厚４cm以上）、灰色軽石に富む灰色土（層厚５cm，軽石の最大径５mm）、下位の灰色軽石混じり黒灰色土（層厚３cm，軽石の最大径４mm）、成層したテフラ層（層厚３cm）、白色軽石混じり灰色粘質土（層厚12cm，軽石の最大径４mm）、黒色土（層厚0.7cm）、黄白色細粒火山灰層（層厚0.2cm）、黒色土（層厚0.1cm）、黄白色シルト層（層厚0.5cm）、黄褐色シルト層（層厚３

cm）、暗灰色土（層厚10cm）、黒褐色土（層厚３cm）、成層したテフラ層（層厚5.2cm）、黒褐色砂質土（層厚４cm）が認められた（図２）。

これら中で、灰色土中に多く含まれる灰色軽石は、その岩相からAs－Cに由来すると考えられる。成層した２層のテフラ層のうち、下位のテフラ層は下部の桃褐色細粒火山灰層（層厚１cm）と白色軽石を含む黄色粗粒火山灰層（層厚２cm，軽石の最大径18mm）から構成されている。このテフラ層は、その特徴からHr－FAに同定される。また、その上位の黄白色細粒火山灰層は、その層位や層相から６世紀中葉に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳伊香保テフラ（Hr－FP，新井，1962，坂口，1986，早田，1989，町田・新井，1992）の最上部（早田，1993）に同定される。したがって、その上位にある黄白色シルト層や黄褐色シルト層は、Hr－FPの噴火に伴う火山泥流の可能性が大きい。さらに、上位の成層したテフラ層は、下部の灰色細粒火山灰層（層厚0.2cm）と上部のかすかに成層した灰褐色細粒軽石層（層厚５cm，軽石の最大径３mm）から構成される。このテフラ層は、その層相からAs－Bに同定される。

## ３．小　　結

六供東京安寺遺跡において地質調査を行った結果、下位より浅間Ｃ軽石（As－C，４世紀中葉）、榛名二ツ岳渋川テフラ（Hr－FA，６世紀初頭）、榛名二ツ岳伊香保テフラ（Hr－FP，６世紀中葉）、浅間Ｂテフラ（As－B，1108年）などの示標テフラが認められた。またHr－FPの上位には、Hr－FPに伴う火山泥流堆積物も検出された。この結果、本遺跡で検出された水田面は、As－Bの降灰により埋没した遺構と判断される。

《文　献》


新井　房夫　（1962）　関東盆地北西部地域の第四紀編年．群馬大学紀要自然科学編，10，p.1－79.

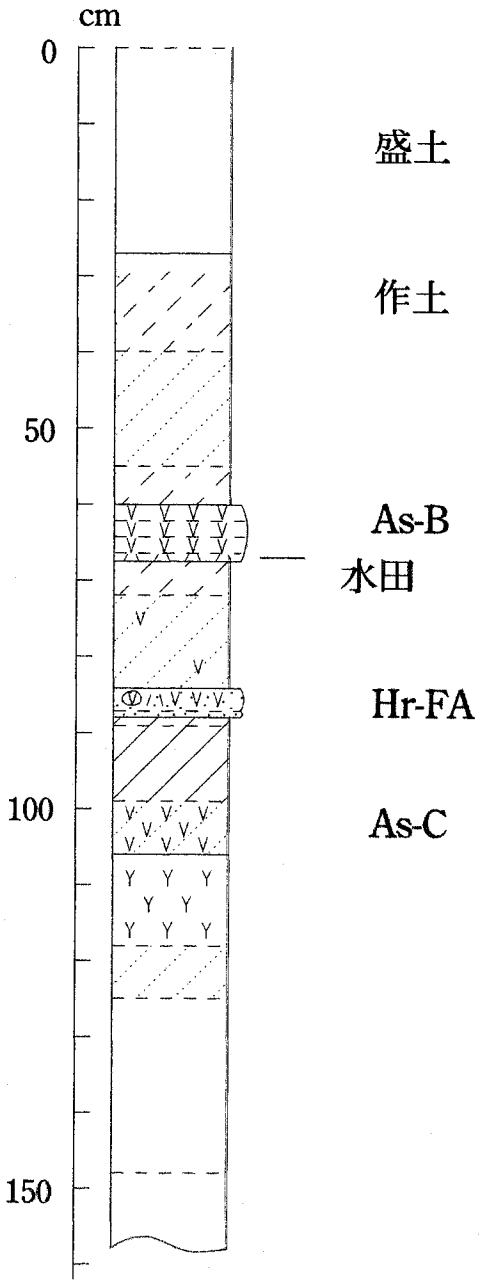
新井　房夫　（1979）　関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層．考古学ジャーナル，no.53，p.41－52.

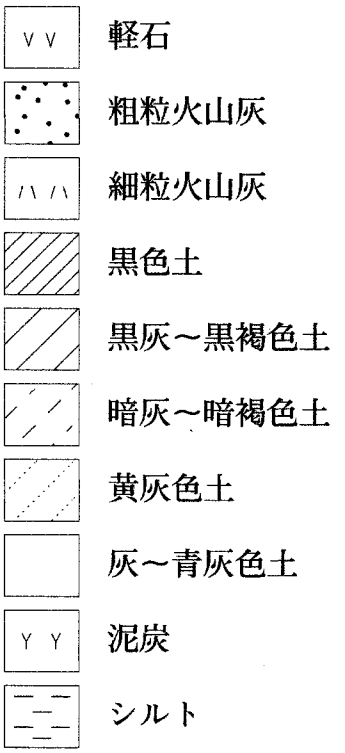
町田　　洋・新井　房夫　（1992）　火山灰アトラス．東京大学出版会，276p.

坂口　　一　（1986）　榛名二ツ岳起源FA・FP層下の土師器と須恵器．群馬県教育委員会編「荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡」，p.103－119.

早田　　勉　（1989）　６世紀における榛名火山の２回の噴火とその災害．第四紀研究，27，p.297－312.

早田　　勉　（1993）　古墳時代に起こった榛名山二ツ岳の噴火．新井房夫編「火山灰考古学」，古今書院，p.128－150.



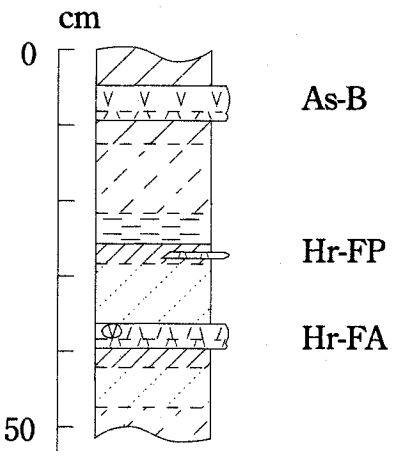




図１　Ｇ－２区の土層柱状図　　図２　Ｇ－３区中央地点の土層柱状図

# Ⅱ．六供東京安寺遺跡におけるプラント・オパール分析

## 1．はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸（$SiO_2$）が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石（プラント・オパール）となって土壌中に半永久的に残っている。プラント・オパール分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出する分析であり、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査が可能である（藤原・杉山，1984）。

六供東京安寺遺跡の発掘調査では、As－B直下から水田遺構が検出された。ここでは、同遺構における稲作の検証およびその他の層準における水田跡の探査を主目的として分析を行った。

## 2．試　　料

試料は、G－2区、G－3区（北壁中央地点）、G－1区（x27，y90杭脇）の3地点から採取された16点である。試料採取箇所を分析結果の柱状図に示す。

## 3．分　析　法

プラント・オパールの抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法（藤原，1976）をもとに、次の手順で行った。

1）試料を105℃で24時間乾燥（絶乾）

2）試料約1ｇに対し直径約40μｍのガラスビーズを約0.02ｇ添加
（電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量）

3）電気炉灰化法（550℃・6時間）による脱有機物処理

4）超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散

5）沈底法による20μｍ以下の微粒子除去

6）封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成

7）検鏡・計数。

同定は、イネ科植物の機動細胞に由来するプラント・オパールをおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1ｇあたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1ｇ中のプラント・オパール個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位：$10^{-5}$ｇ）をかけて、単位面積で層厚1㎝あたりの植物体生産量を算出した。イネ（赤米）の換算係数は2.94（種実重は1.03）、ヒエ属（ヒエ）は8.40、ヨシ属（ヨシ）は6.31、ススキ属（ススキ）は1.24、タケ亜科（ネザサ節）は0.48である。

## 4．分析結果

水田跡（稲作跡）の検討が主目的であることから、同定および定量はイネ、ヒエ属型、ヨシ属、ススキ属型、タケ亜科（おもにネザサ節）の主要な5分類群に限定した。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1および図1～図3に示した。写真図版に主要な分類群の顕微鏡写真を示す。

## 5．考　　察

(1) 水田跡の検討

水田跡（稲作跡）の検証や探査を行う場合、一般にイネのプラント・オパールが試料１ｇあたり5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している。ただし、関東周辺では密度が3,000個/ｇ程度でも水田遺構が検出されていることから、ここでは判断の基準を3,000個/ｇとして検討を行った。

１）Ｇ－２区（図１）

作土直下層（試料１）からAs－Cの下層（試料９）までの層準について分析を行った。その結果、作土直下層（試料１）、As－B直下層（試料３、４）、Hr－FA直下層（試料５、６）、As－C混層（試料７）からイネが検出された。このうち、作土直下層（試料１）、As－B直下層（試料３、４）、Hr－FA直下層（試料５）では、密度が7,500～9,000個/ｇと高い値であり、As－C混層（試料７）でも3,700個/ｇと比較的高い値である。したがって、これらの層準では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

２）Ｇ－３区北壁中央地点（図２）

As－B直下層（試料１）からHr－FA直下層（試料６）までの層準について分析を行った。その結果、As－B直下層（試料１、２）、Hr－FP直上層（試料３）、Hr－FP直下層（試料４）、Hr－FA直下層（試料６）からイネが検出された。このうち、As－B直下層（試料１、２）では密度が7,600～8,300個/ｇと高い値である。したがって、同層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。その他の層準では、密度が1,500～2,300個/ｇと比較的低い値である。イネの密度が低い原因としては、稲作が行われていた期間が短かったこと、土層の堆積速度が速かったこと、洪水などによって耕作土が流出したことなどが考えられる。

３）Ｇ－１区（x27，y90杭脇、図３）

As－B直下水田面（試料１）について分析を行った。その結果、イネが3,700個/ｇと比較的高い密度で検出された。したがって、同層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

(2) 稲籾の生産総量の推定

As－B直下水田層について、そこで生産された稲籾の総量を算出した（層厚を10㎝と仮定）。その結果、面積10a（1,000㎡）あたり7,200kgと推定された。当時の稲籾の年間生産量を面積10aあたり100kgとすると、同層ではおよそ72年間と比較的長期間にわたって稲作が営まれていたものと推定される。ただし、これらの値は収穫が穂刈りで行われ、稲わらがすべて水田内に還元されたと仮定して算出しているため、収穫が株刈りで行われて稲わらが水田から持ち出された場合は、その割合に応じて修正を行う必要がある。

(3) 堆積環境の推定

ヨシ属は比較的湿ったところに生育し、ススキ属やタケ亜科は比較的乾いたところに生育している。このことから、これらの植物の出現状況を検討することによって、堆積当時の環境（乾燥・湿潤）を推定することができる。

イネ以外の分類群では、下位層準を中心にヨシ属が比較的多く検出され、ススキ属型やタケ亜科は比較的少量である。おもな分類群の推定生産量によると、Hr－FPより下位ではヨシ属が卓越していることが分かる。

以上の結果から、稲作が開始される以前の遺跡周辺は、ヨシ属などが生育する湿地的な環境であったと考えられ、As－C混層の時期にそこを利用して水田稲作が開始されたものと推定される。なお、稲作の開始以降もヨシ属が多く見られることから、水田雑草などとしてヨシ属が生育していたことが考えられる。

## 6．ま　と　め

プラント・オパール分析の結果、水田遺構が検出された浅間Ｂテフラ（As－B，1108年）直下層からはイネが多量に検出され、同層で稲作が行われていたことが分析的に検証された。また、榛名二ツ岳渋川テフラ（Hr－FA，６世紀初頭）直下層や浅間Ｃ軽石（As－C，４世紀中葉）混層でもイネが多量に検出され、稲作が行われていた可能性が高いと判断された。さらに、榛名二ツ岳伊香保テフラ（Hr－FP，６世紀中葉）直下層などでも稲作が行われていた可能性が認められた。

本遺跡周辺は、稲作が開始される以前はヨシ属などが生育する湿地的な環境であったと考えられ、As－C混層の時期にそこを利用して水田稲作が開始されたものと推定される。

《文　献》


藤原　宏志　(1976)　プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－．考古学と自然科学，９，p.15－29.

藤原　宏志・杉山　真二　(1984)　プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)－プラント・オパール分析による水田址の探査－．考古学と自然科学，17，p.73－85.

表１　前橋市、六供東京安寺遺跡におけるプラント・オパール分析結果

検出密度（単位：×100個/ｇ）

| 地点・試料 | | G－2区 | | | | | | | | | G－3区 | | | | | | G-1区 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 分類群 | 学　名 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 1 |
| イネ | Oryza sativa(domestic rice) | 82 | | 90 | 75 | 75 | 30 | 37 | | | 83 | 76 | 15 | 15 | | 23 | 37 |
| ヒエ属型 | Echinochloa type | 7 | | | | | | | | | | | | | | | 15 |
| ヨシ属 | Phragmites (reed) | | | 7 | 7 | 37 | 60 | 22 | 22 | 105 | 8 | | 8 | 60 | 15 | 23 | 30 |
| ススキ属型 | Miscanthus type | 22 | 38 | 75 | 22 | 7 | 45 | 15 | 30 | | 38 | | | 15 | 22 | 61 | 52 |
| タケ亜科 | Bambusoideae (Bamboo) | 30 | 8 | 52 | 37 | 15 | | 7 | 7 | | 30 | 38 | | 7 | 7 | 46 | 22 |

推定生産量（単位:kg/m²・cm）

| | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| イネ | Oryza sativa(domestic rice) | 2.42 | | 2.64 | 2.20 | 2.20 | 0.88 | 1.10 | | | 2.44 | 2.23 | 0.44 | 0.44 | | 0.67 | 1.10 |
| ヒエ属型 | Echinochloa type | 0.63 | | | | | | | | | | | | | | | 1.26 |
| ヨシ属 | Phragmites (reed) | | | 0.47 | 0.47 | 2.36 | 3.79 | 1.41 | 1.42 | 6.63 | 0.48 | | 0.48 | 3.77 | 0.94 | 1.44 | 1.89 |
| ススキ属型 | Miscanthus type | 0.28 | 0.47 | 0.93 | 0.28 | 0.09 | 0.56 | 0.19 | 0.37 | | 0.47 | | | 0.19 | 0.28 | 0.75 | 0.65 |
| タケ亜科 | Bambusoideae (Bamboo) | 0.14 | 0.04 | 0.25 | 0.18 | 0.07 | | 0.04 | 0.04 | | 0.14 | 0.18 | | 0.04 | 0.04 | 0.22 | 0.11 |

※試料の仮比重を1.0と仮定して算出。

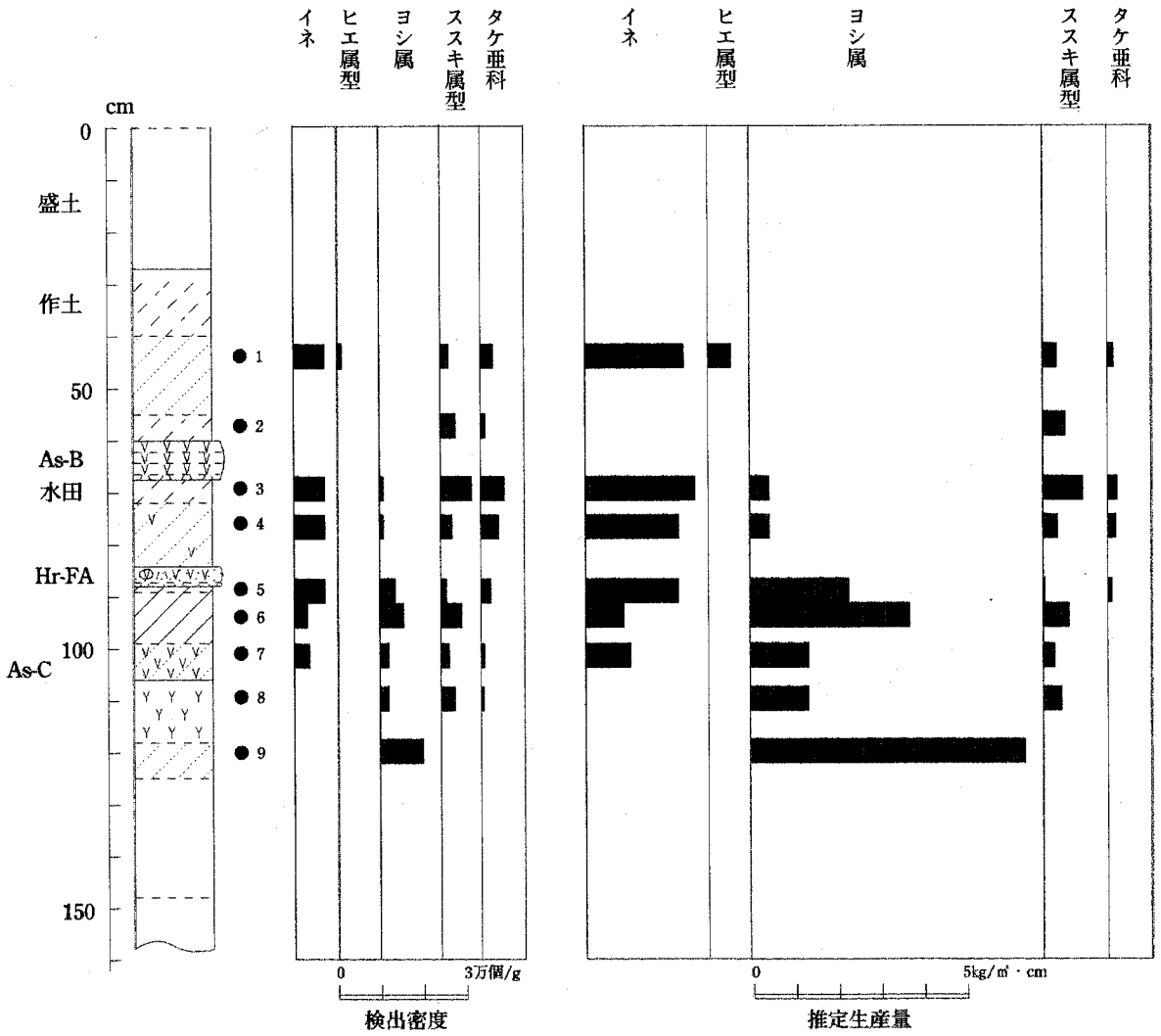



図１　六供東京安寺遺跡、Ｇ－２区におけるプラント・オパール分析結果

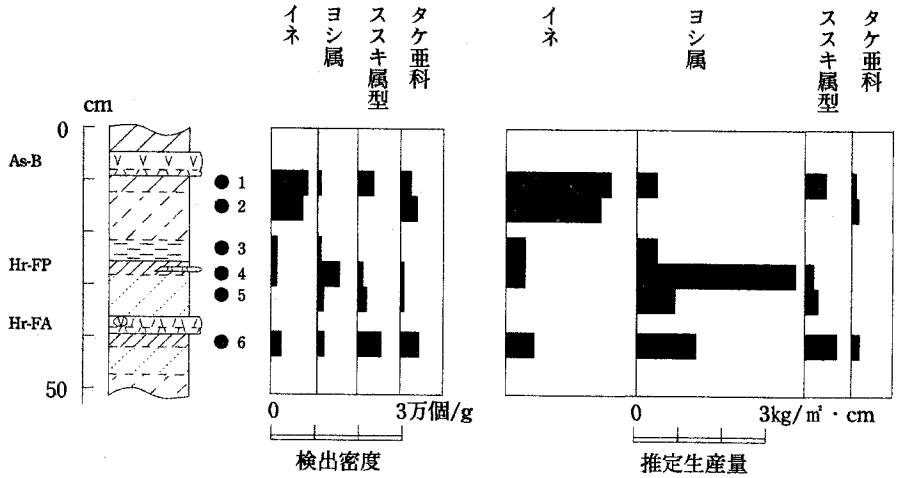



図2　六供東京安寺遺跡、G－3区におけるプラント・オパール分析結果

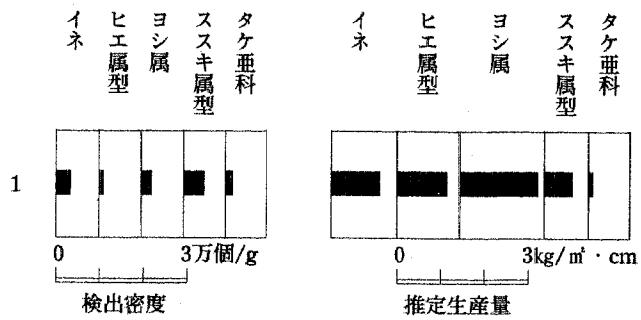


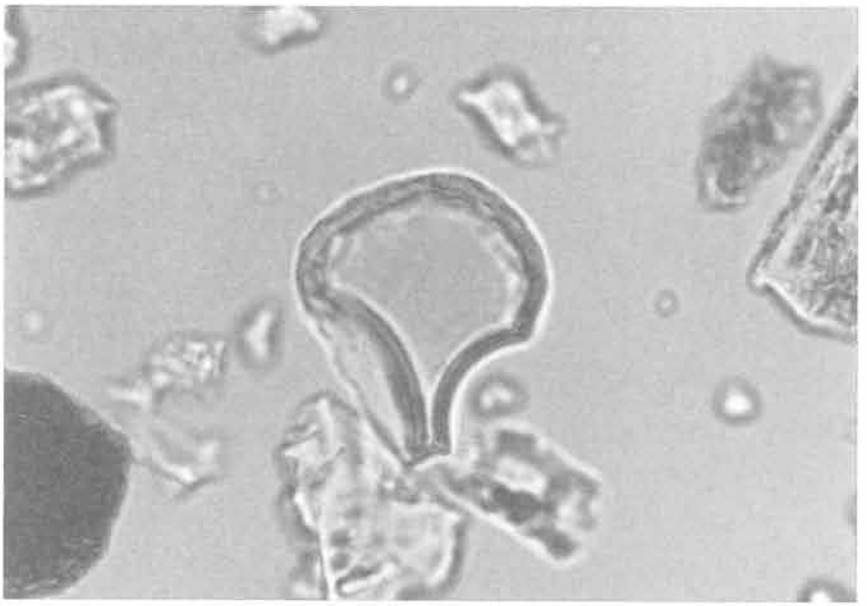

図3　G－1区（X27，Y90抗脇）As－B下水田面におけるプラント・オパール分析結果

植物珪酸体の顕微鏡写真

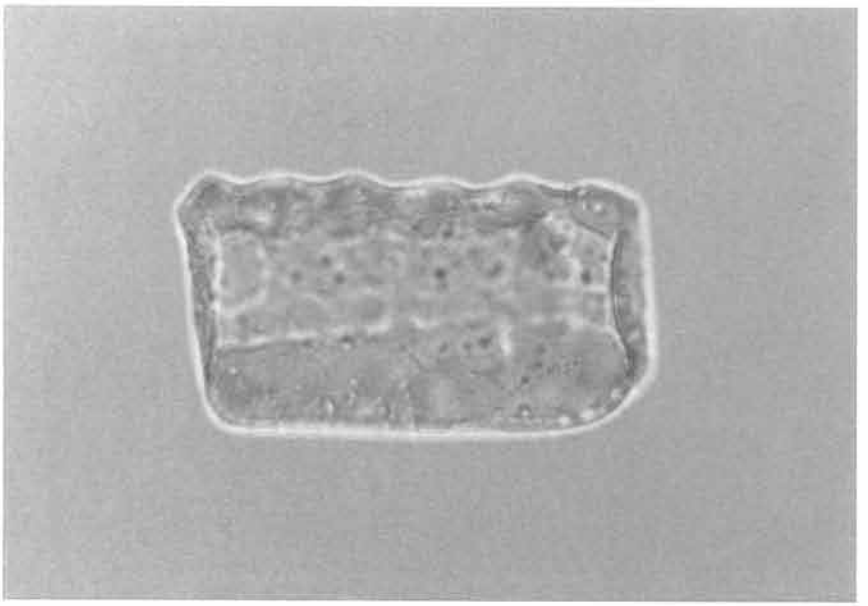
（倍率はすべて400倍）

| No. | 分類群 | 地点 | 試料名 |
|---|---|---|---|
| 1 | イネ | G－3 | 1 |
| 2 | イネ | G－1 | 1 |
| 3 | ヒエ属型 | G－2 | 1 |
| 4 | ジュズダマ属 | G－1 | 5 |
| 5 | ヨシ属 | G－1 | 6 |
| 6 | ススキ属型 | G－1 | 2 |
| 7 | ネザサ節型 | G－1 | 3 |
| 8 | マダケ属型 | G－1 | 1 |
| 9 | はめ絵パズル状（ブナ属など） | G－1 | 7 |

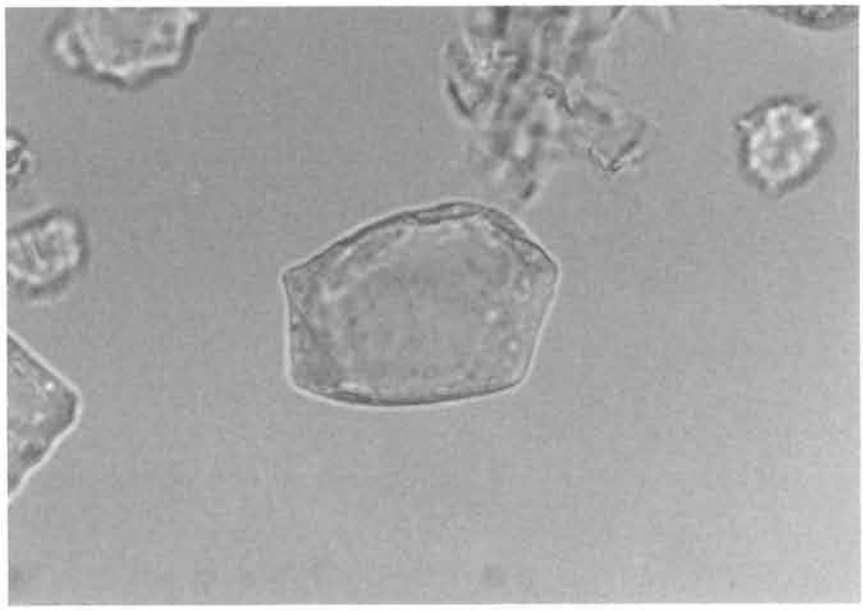
1



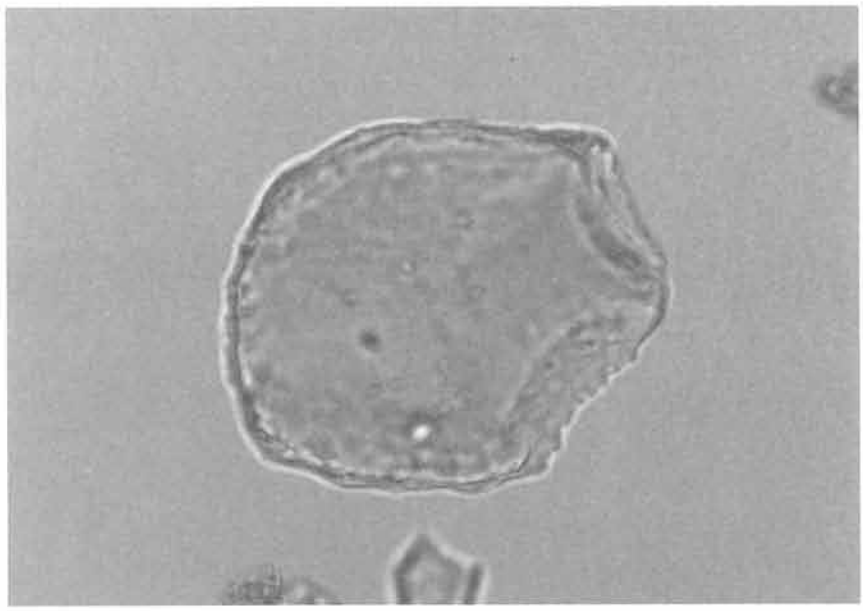
2



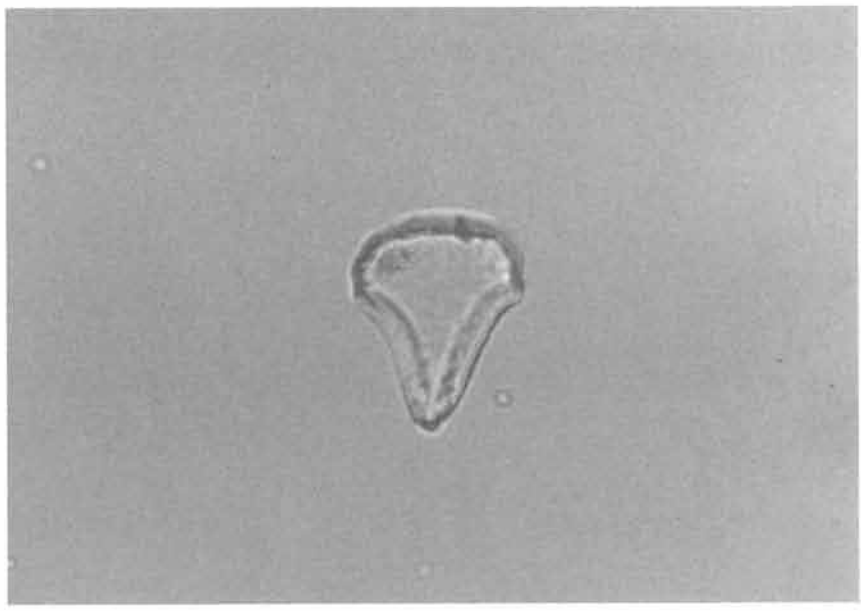
3



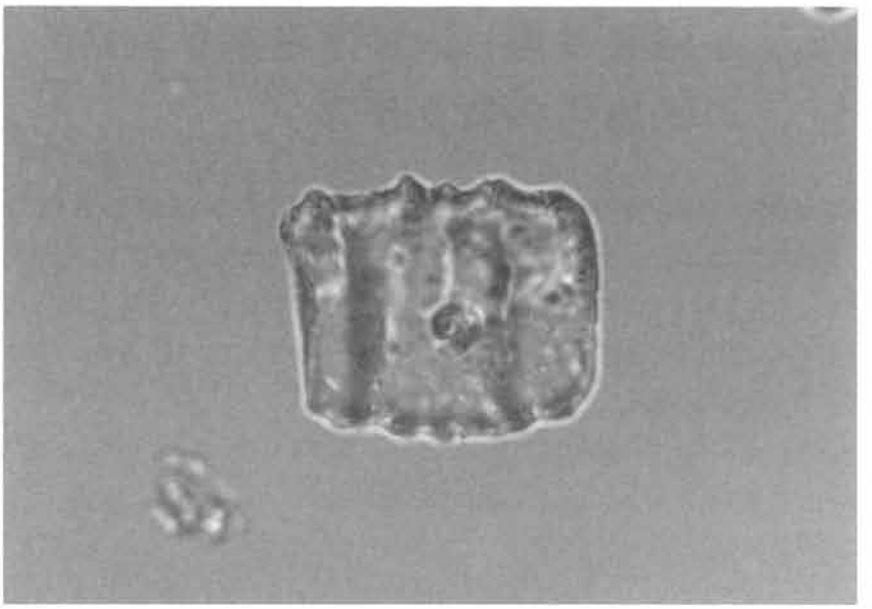
4



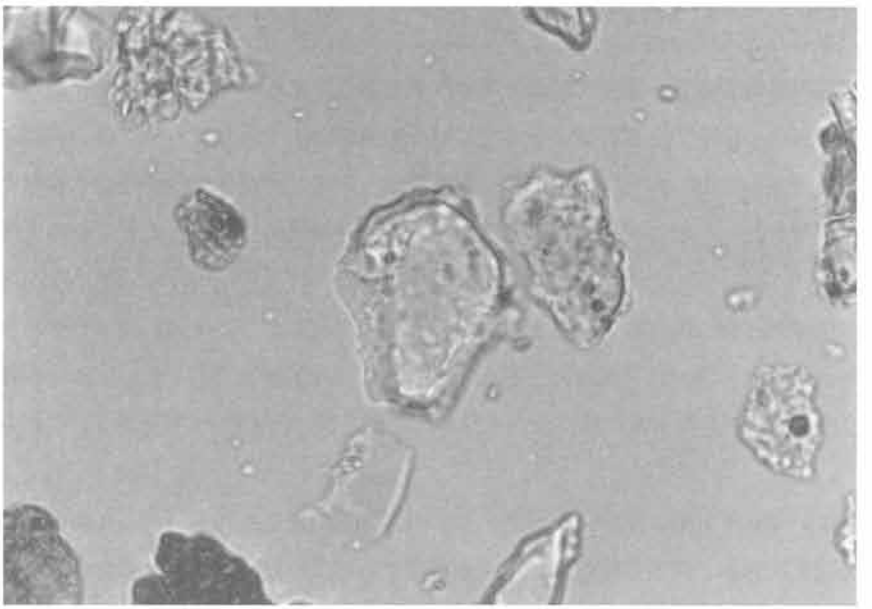
5



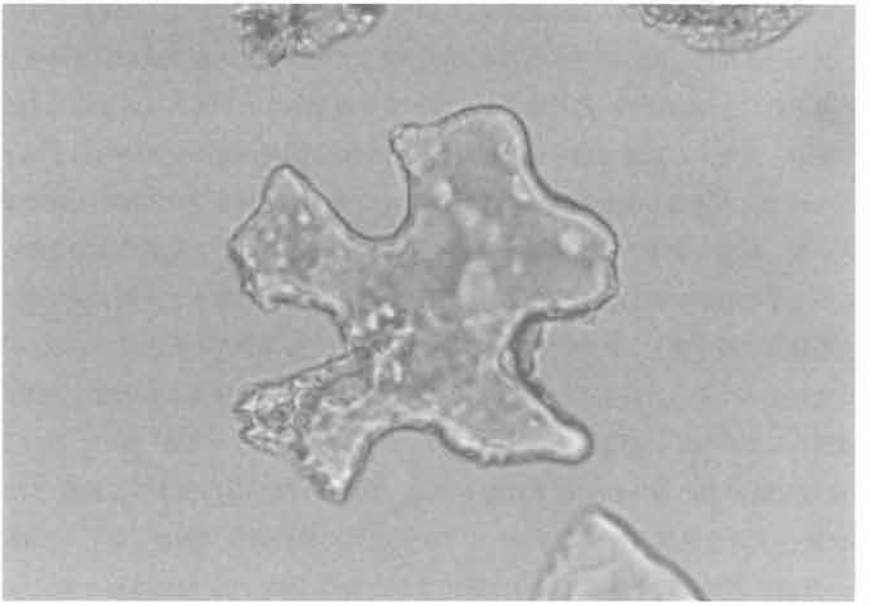
6



7



8



9

# 付編２　小幡家墓地（六供下堂木Ⅳ遺跡）の緊急発掘調査報告

今回、六供地区区画整理に関係し墓地移転が行われることになり、平成10年５月19・20日に緊急調査を実施することになった。調査面積は約30㎡で近世土坑墓３基が検出された。遺物は遺構内27点、遺構外84点、合計111点が出土した。なお、遺跡名称『六供下堂木Ⅳ遺跡』の『下堂木』は旧地籍の小字名を採用している。遺跡地は前橋市南部の六供町の県立聾学校の南側に位置し、住宅や農耕地が隣接している。墓地には調査前まで11基の墓石等が存在し古くから小幡家の墓地として知られている。

六供町の町名の由来については「六供由来記」に詳しい。小幡藩城主熊出将監が出家し一宿斉と名乗り、諸国を巡ってこの六供の地に足をとどめた。ある夜、庭に不思議な光が射し込んだので、近寄ってみるとそれは千手観音であった。この仏像は昔、羊太夫が守本尊とした霊験あらたかなものであった。一宿斉は、羊太夫の古い習わしに従ってこの地に六ヵ寺をたて、この村を六句村と名付けたという。また戦国時代の小幡（甘楽郡甘楽町）城の城主小幡忠利が武田信玄に追われこの地に移り住み、その時以来忠利に従ってきた側近の侍が６人いたので六供と呼ぶようになったともいわれている。この時の供は、松本、野口、斉藤、高橋、萩原、荒木とされる。

調査に先立ち現在の墓地管理者と前橋市役所区画整理第一課、同市教育委員会文化財保護課の３者間で今回の調査について協議を行い、出土する遺骨等については墓地管理者が引き取り、それ以外の遺物に関しては文化財保護課で保管することとなった。墓石については位置を記録した後、寿延寺境内の墓地へ移転することになった。墓石移転後、表土掘削を行ったところ３箇所で方形の掘り込み跡が検出された。以下はその発掘調査の内容である。

１号土坑墓から副葬銭５枚、陶器皿、磁器花瓶が出土、２号土坑墓からは土師質皿（カワラケ）の他、漆塗りの木椀が出土したが、残存状態が悪く現況のまま取り上げることは不可能であった。同じく３号土坑墓からは土師質土器（カワラケ）、陶器香炉・鉢が出土し、また各土坑墓内からは木棺の一部と考えられる木片、人骨片、人歯等も出土した。

調査した土坑墓はいずれも方形に掘り込まれており、方形木棺が使用されていた。３基の土坑墓の平面形態は短辺平均46㎝、長辺平均70㎝、深さは確認面から１ｍ程度であり、座葬であったと考えられる（座葬：脚を抱えて座った格好で埋葬される葬法）。

１号土坑墓に副葬されていた銅銭は４点であるが、２枚が重なった状態で出土したものが１点あったため総数は５枚である。これらには棺の一部と考えられる木片が付着していた。この副葬銭はいわゆる『六道銭』・『極楽浄土に行くための泊賃』と呼ばれているもので、１枚から15枚と様々だが多くは６枚の場合が多く、種類は寛永通寶が一般的である。重なった状態で出土した銭貨は形状等から同種のものと考えられ、出土した銭貨はすべて寛永通寶と考えられる。六道銭の出土例については、死者の首に頭陀袋をかけその中に納めたり、手に握らせる、口にくわえさせる、死者の装束の裾に縫いつけるなどの調査例がある。六道銭には宗教的な意味合いもあるが、死者が冥土にいっても生活に不自由のないように生前に愛用していた品々と一緒に棺に収めたとされる。この習慣は古くは室町時代に端を発し、江戸時代には６枚１組という報告例が多くなっている。一般的な広がりを見せたのは江戸時代になってからといえる。また、近世墓地調査報告例では渡来銭と寛永通寶が一緒に出土する例もあるが今回は出土していない。中世から流通していた渡来銭は寛永13（1636）年に、寛永通寶（古寛永）が初鋳され大量に流通し始めると徐々に使用されなくなる。やがて古寛永は1659年に鋳造中止になり、寛文８（1668）年になると鋳造された銭貨の背面に『文』の字が刻まれた俗に言う文銭が、そして元禄10（1697）年に『文』の刻印のない新寛永通寶が鋳造される。今回検出されたものはすべてこの新寛永と考えられる。

銭貨以外の副葬品では陶磁器製品が多い。陶器は瀬戸系の物が多く、完形で出土したものは３号土坑墓の陶器香炉のみで、底部には摘み高台が付いており制作者の指紋の痕跡が認められる。磁器は梅花紋の入る花瓶の一部が１号土坑墓から出土したのみである。３号土坑墓出土の鉢は、死者の頭部に被らせて埋葬したものであると推測される。近隣の上朝倉を始め周辺の民俗調査報告例にお盆近くに亡くなった場合、遺体に被らせたとある。この意味は、お盆というのはそもそも死者が現世にお客様として里帰りに戻っていくのに、そのような時になぜ死んでこちら（冥土）に来るのかと閻魔様に頭を叩かれるので被せるのだといわれている。カワラケは２・３号土坑墓から出土している。３号土坑墓出土のカワラケは、口径10.2㎝・器高2.0㎝、小型で器肉は薄く底が浅い。口縁部と底部とで色調が異なっており、重ね焼き痕が観察される。カワラケは副葬品として埋納される例が多く、これまでの近世墓地調査例を見ても１つの墓坑に平均して２～３枚程度検出されているようである。

以上のことからこれらの墓坑は出土遺物や埋葬形態などから17世紀後半から18世紀前半のものと考えられ、墓籍台帳の所見とも合致する。調査区域内には石殿や石塔なども置かれていたが、その全ての下に墓坑が検出されたわけではない。このことから、これらの石塔は検出墓坑と合致せず、最初からここに設置されたものではないと考えられる。後世になると周辺の開発も進み石塔を移動せざるを得ない状況になり、その為１箇所に移し替えて祀られるようになったと考えられる。石塔は全部で11基であるが検出墓坑が３基であったのはそのためと考えられる。全ての墓碑が元来設置されていた場所に、現在も墓坑が残存するかは不明であるが、周辺開発に伴う調査が行われれば、発見される可能性は高い。

今回の調査は緊急のもので期間も限られたため、ごく簡易的な調査となった。残念ながら小幡家と結びつくような遺物等は確認できなかったが、六供地区の近世の埋葬形態を解明する手がかりにはなった。時にはこのような埋葬施設を調査することによって、埋葬者の身体の特徴、病気やけがの痕跡等が発見できることや、埋葬形式・納められていた副葬品の品々からその当時の風習や文化も伺い知ることさえも可能である。今後も周辺地域の発掘調査により近世墓地遺跡が発見される可能性がある。今回の調査で得られた成果が、今後類似遺跡調査の比較資料の一部となれば幸いである。

《参考文献・引用文献》


| | | |
|---|---|---|
| 古泉　　弘 | 1983年 | 『江戸を掘る』　柏書房 |
| 上毛民俗学会編 | 1987年 | 『上毛民俗』47号 |
| 前橋市教育委員会編 | 1993年 | 『前橋南部の民俗－上川淵・下川淵・旧木瀬地区－』 |
| 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 | 1997年 | 『鳥取東原遺跡』 |
| 静岡県磐田市教育委員会 | 1998年 | 『野口・マカダ近世墳墓群遺跡発掘調査報告書』 |

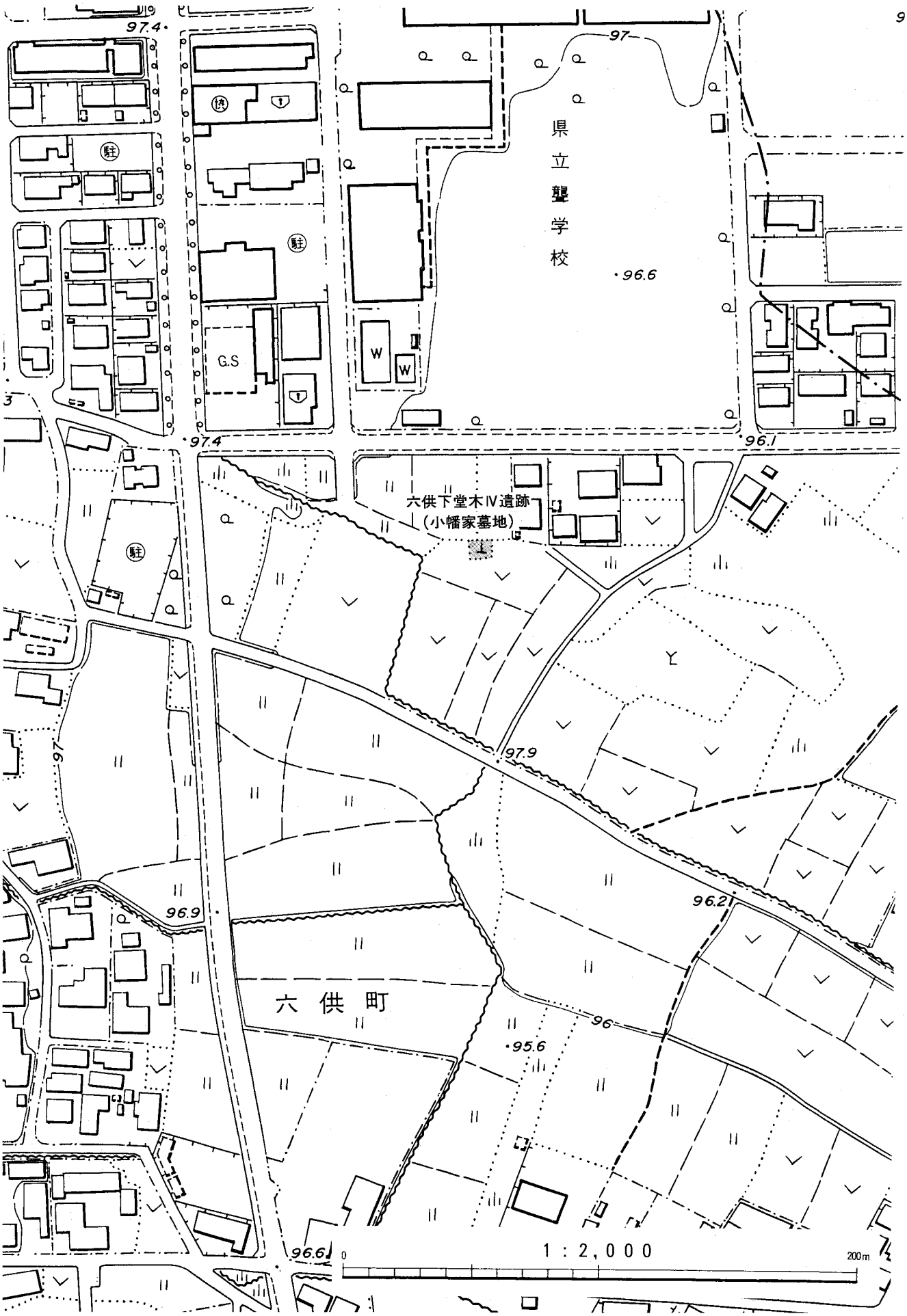



Fig. 29　六供下堂木Ⅳ遺跡（小幡家墓地）位置図

Tab. 7　小幡家墓地の墓籍台帳、過去帳の写し及び墓石対応表

| | 西　暦 | 元号年月日 | 法　　号 | 氏　　名 | 墓石番号 | 備　考 | Fig. |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 一　号 | 1746 | 延享三年11月11日 | 身相無相居士 | 小幡源五右衛門景重 | 9 | 石　塔 | 30 |
| 二　号 | 不　詳 | 不　詳 | 不　詳 | 小幡不詳 | － | － | － |
| 三　号 | 1649 | 慶安二年2月23日 | 郎翁浪心居士 | 小幡九郎右衛門景勝 | 3 | 石　殿 | 30 |
| 四　号 | 1653 | 承応二年4月5日 | 照月妙江大姉 | 同人の妻 | 5 | 石　殿 | 30 |
| 五　号 | 1675 | 延宝三年4月11日 | 鉄岩堯関居士 | 小幡加賀右衛門景近 | 6 | 石　殿 | 30 |
| 六　号 | 1630 | 寛永七年2月14日 | 不　詳 | 小幡不詳 | 7 | 石　塔 | 30 |
| 七　号 | 1746 | 延享三年9月12日 | 堂紅秋清信士 | 小幡三郎景久 | 8 | 石　塔 | 30 |
| 八　号 | 1740 | 元文五年12月9日 | 法岩妙心大姉 | 施主大澤氏 | 10 | 石　塔 | 30 |
| 九　号 | 1745 | 延享二年12月11日 | 大宗一乗居士 | 小幡茂右衛門景継 | 1 | 石　塔 | 30 |
| 十　号 | 1656 | 明暦二年9月10日 | 秋月紅山居士 | 松本清内 | － | － | － |

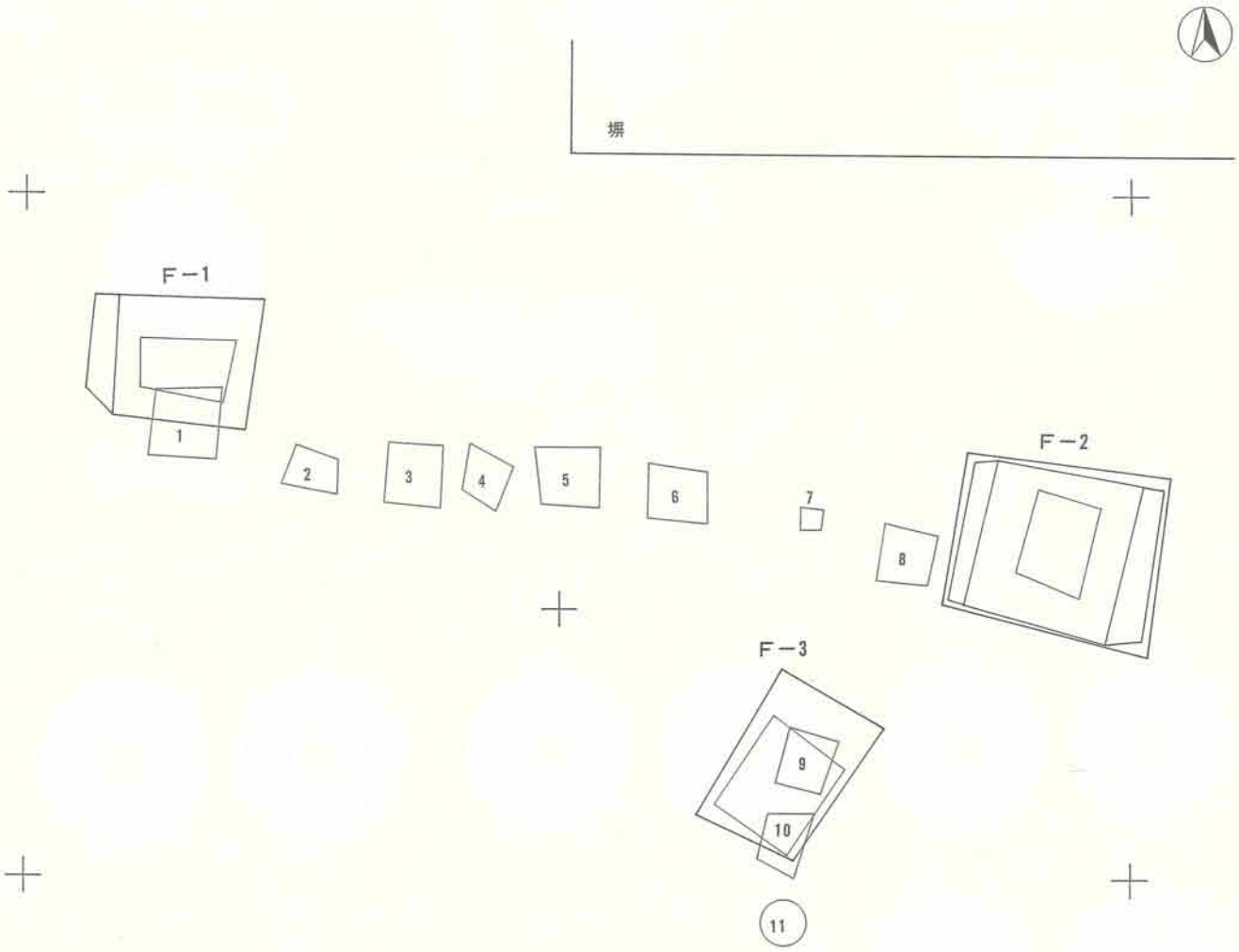



Fig. 30　F－1～3号土坑墓平面図（1/60）

## Tab. 8 · 六供下堂木Ⅳ遺跡土器観察表

| 番号 | 出土位置 | 器形 | 大きさ 口径 | 大きさ 器高 | ①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存 | 成・整形方法の特徴 | 備考 | Fig. |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | F－1 | 陶器皿 | [12.4] | (2.1) | ①細粒②良好③灰オリーブ④1/8 | 内外面とも轆轤ナデ。 | 瀬戸系 | 31 |
| 2 | F－1 | 磁器花瓶 | － | (5.8) | ①細粒②極好③緑灰④1/5 | 内外面とも轆轤ナデ。 | 外面に施釉と梅花文。 | 31 |
| 3 | F－2 | 土師質皿 | [10.2] | (1.7) | ①中粒②良好③橙④1/8 | 内外面とも轆轤ナデ。底部回転糸切り未調整。 | 口縁部に油煙付着。 | 31 |
| 4 | F－3 | 土師質皿 | 10.2 | 2.0 | ①中粒②良好③淡橙④4/5 | 内外面とも轆轤ナデ。底部回転糸切り未調整。 | 内外面に重ね焼き痕。 | 31 |
| 5 | F－3 | 陶器香炉 | 8.2 | 3.4 | ①細粒②良好③灰白④完形 | 内外面とも轆轤ナデ。底部回転糸切り未調整。摘まみ状高台。 | 瀬戸系 | 31 |
| 6 | F－3 | 陶器鉢 | [23.6] | 6.5 | ①細粒②良好③暗灰黄④1/2 | 外面回転篦削り。内面轆轤ナデ。削り出し高台。釉薬ドブ浸け。 | 内面に波状文と重ね焼き痕。瀬戸系 | 31 |

注）表の記載は、以下の基準で行った。

①胎土は、細粒（0.9㎜以下）、中粒（1.0㎜～1.9㎜以下）、粗粒（2.0㎜以上）とし、特徴的な鉱物が入る場合に鉱物名を記載した。

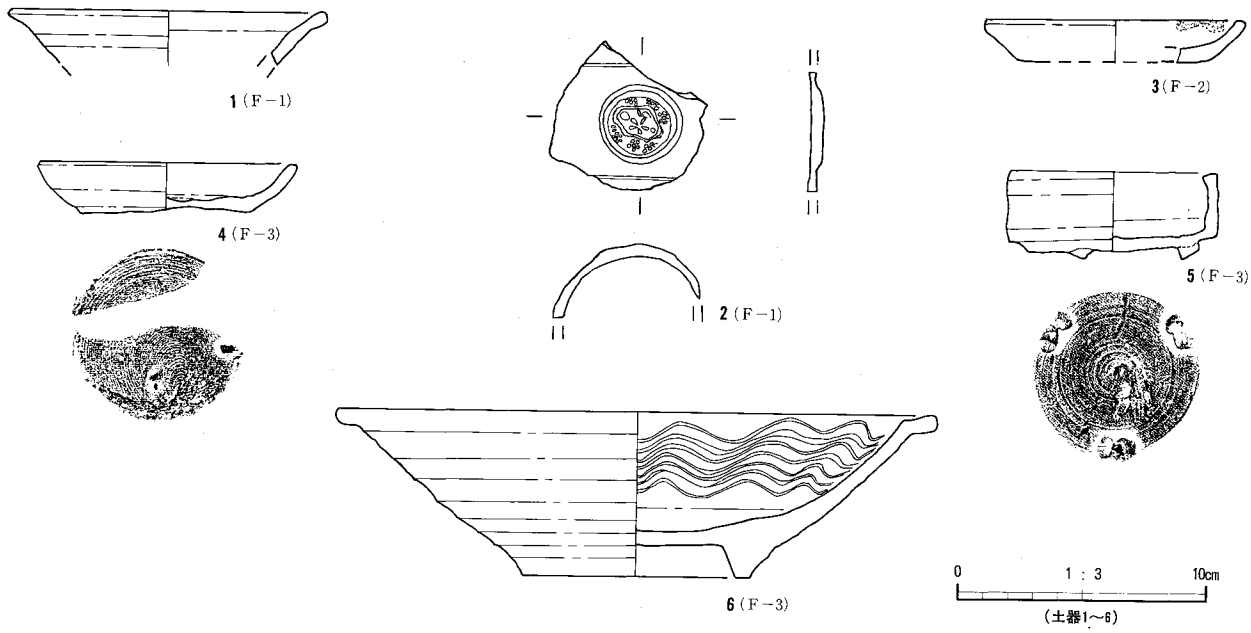
②焼成は、極良、良好、不良の三段階。

③色調は、土器外面で観察し、色名は新版標準土色帳（小山・竹原1976）に拠った。

④大きさの単位は㎝であり、現存値を（　）、復元値を［　］で示した。

## Tab. 9 銅　銭　観　察　表

| No. | 出土位置 | 種別 | 径(cm) | 孔(cm) | 厚さ(mm) | 重量(g) | 銭貨名 | 残存状況 | 特徴 | Fig. |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | F－1 | 銅銭 | 2.2 | 0.6 | 1.4 | 2.6 | 寛永通宝 | 完形 | 新寛永。木片付着。 | 31 |
| 2 | F－1 | 銅銭 | 2.2 | 0.6 | 1.1 | 2.4 | 寛永通宝 | 完形 | 新寛永。木片付着。 | 31 |
| 3 | F－1 | 銅銭 | 2.3 | 0.6 | 1.5 | 2.6 | 寛永通宝 | 完形 | 新寛永。木片付着。 | 31 |
| 4 | F－1 | 銅銭 | 2.3 | 0.6 | 3.0 | 5.0 | 寛永通宝 | 完形 | 新寛永。２枚が融着し剥離不可。木片付着。 | 31 |



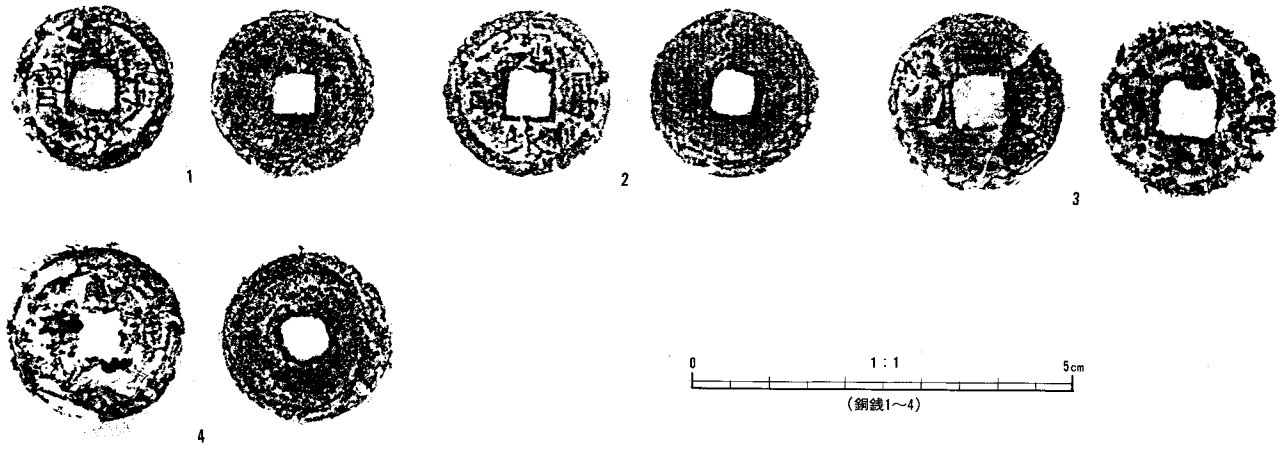
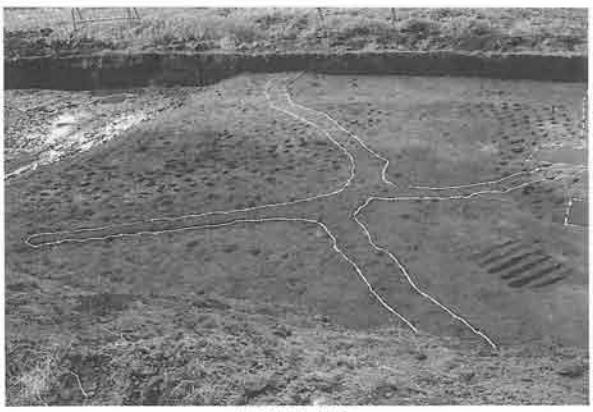
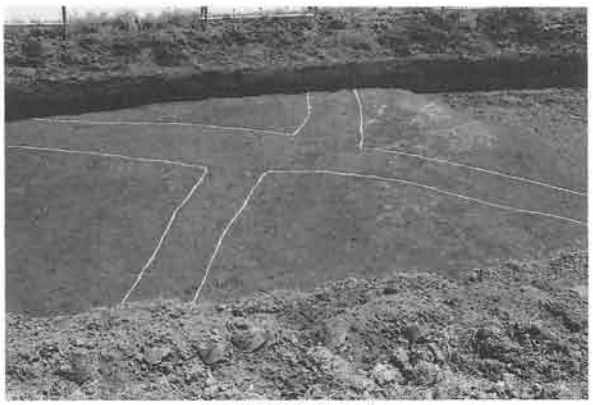




Fig. 31　F－1～3出土の土器・銅銭



A区畦畔（S）

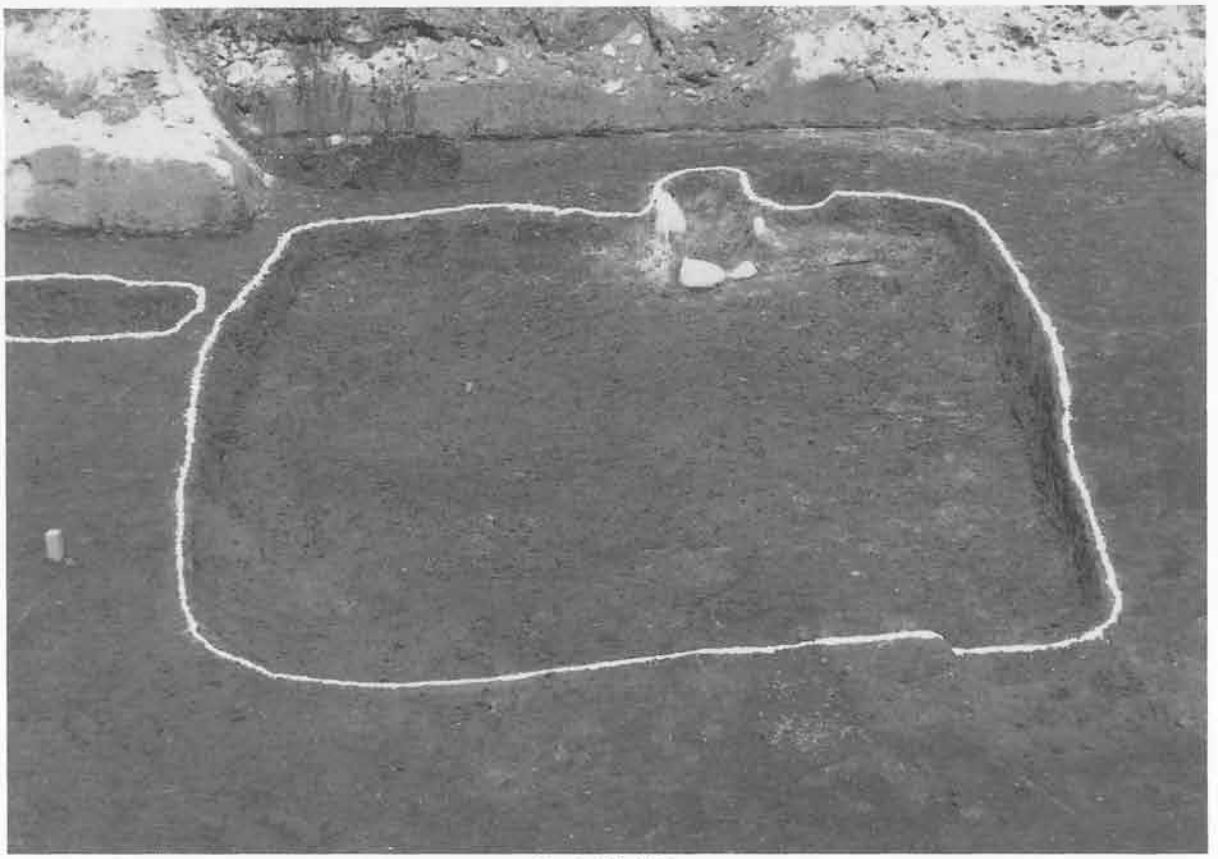
A区畦畔セクション（S）



B区道路状遺構（W）

B区道路状遺構セクション（E）

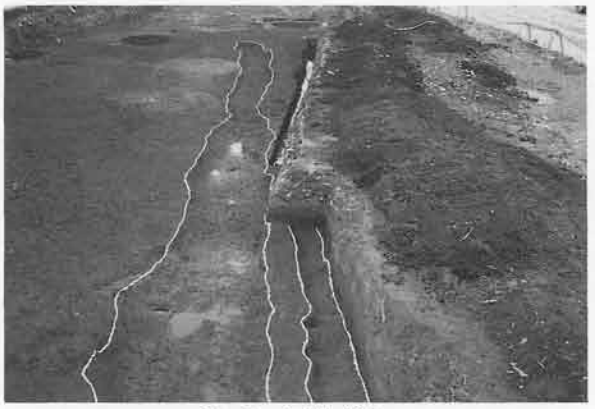
D区全景（N）



H－1全景（W）

H－1遺物出土状況（SW）

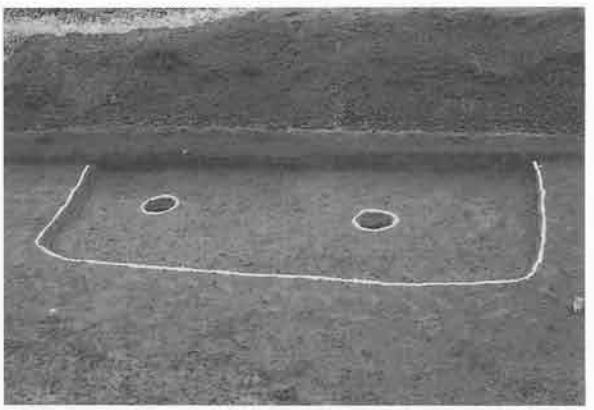
H－1カマド全景（W）



W－2・3全景（S）

W－2出土遺物（E）

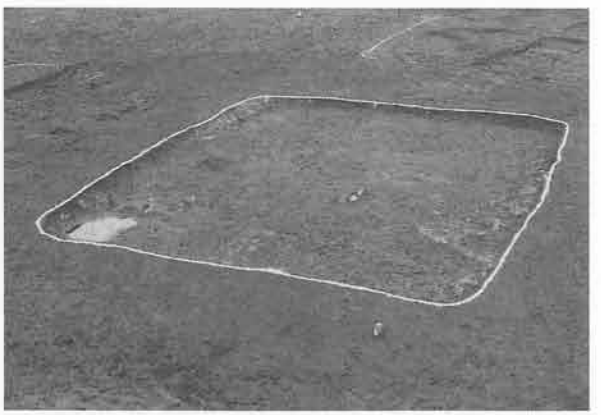
E区全景（E）



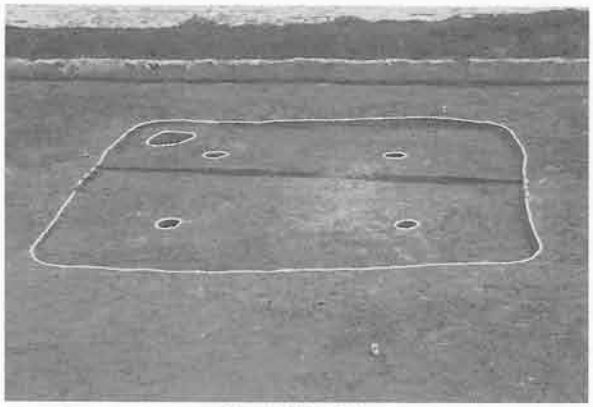
H－2全景（N）

H－2出土遺物（N）

H－3全景（S）



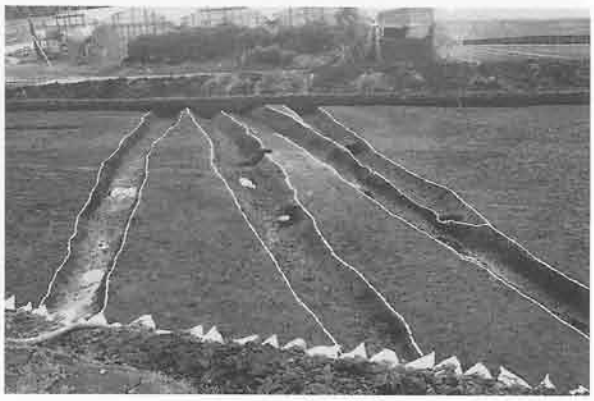
H－3焼土検出状態（NE）



H－4全景（S）

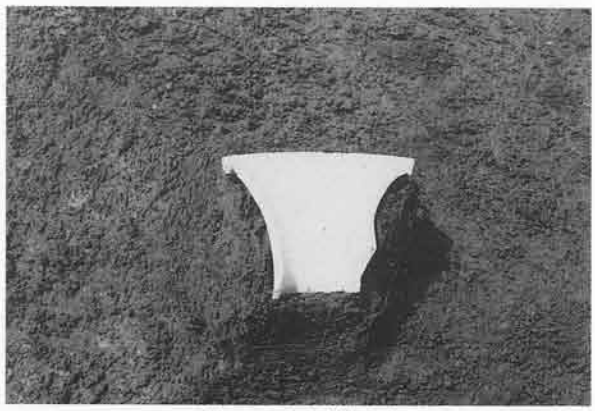
H－4出土遺物（E）

H－4炭化物出土状態（N）

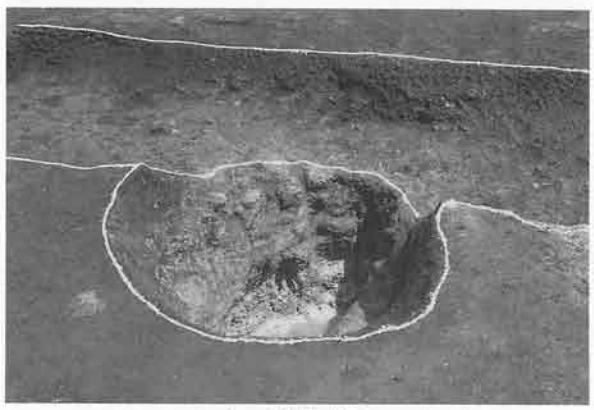


W－6～9全景（S）

E区W－5全景（W）

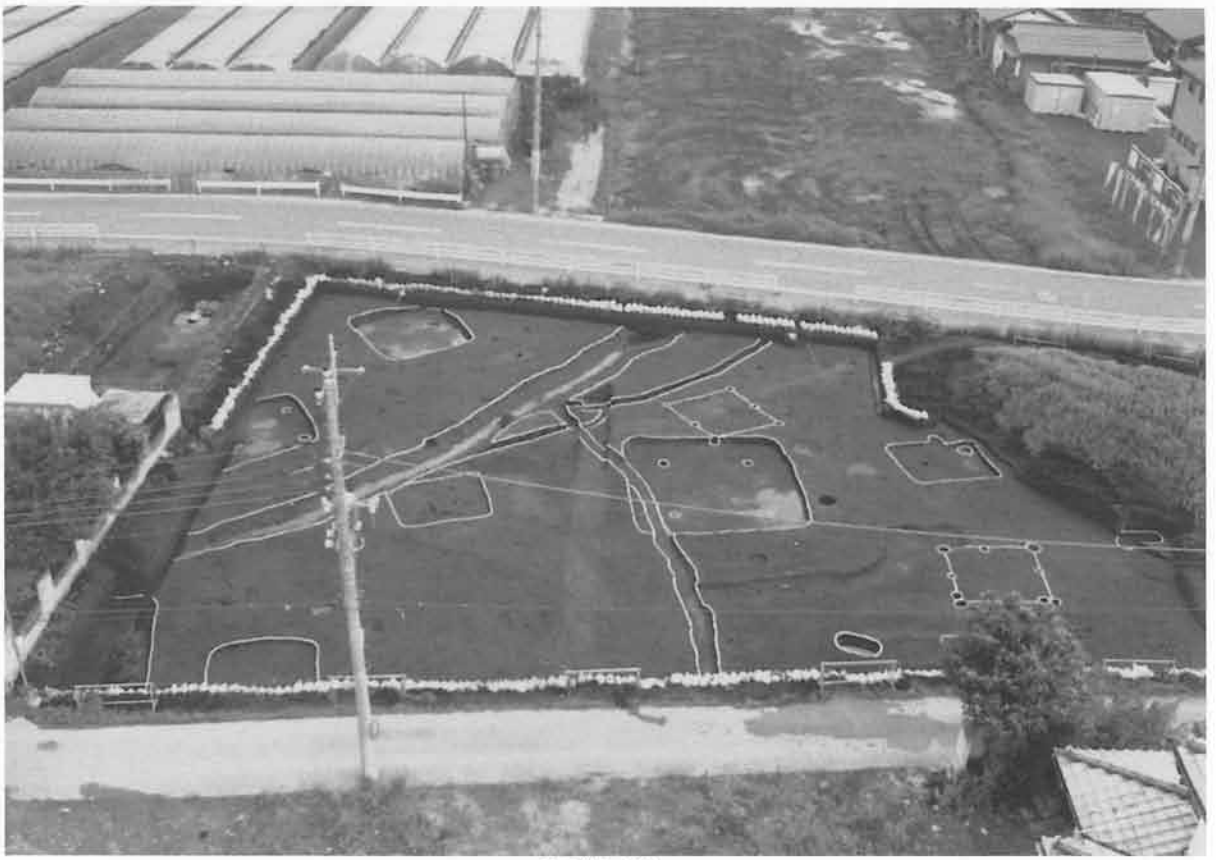


E区W－5出土遺物（N）

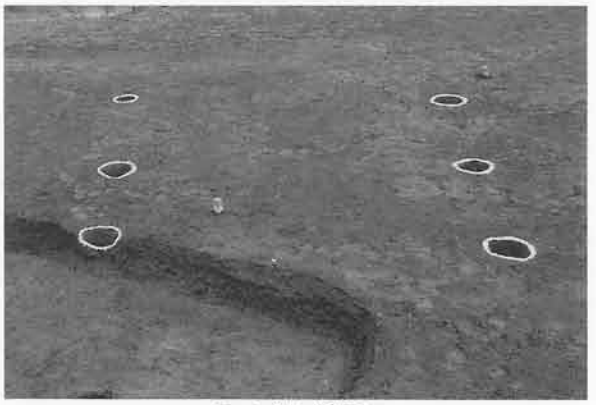


I－1全景（S）

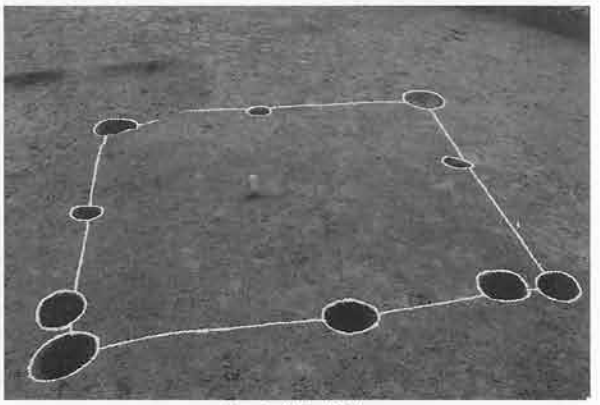
I－1出土遺物（N）



F区全景（W）

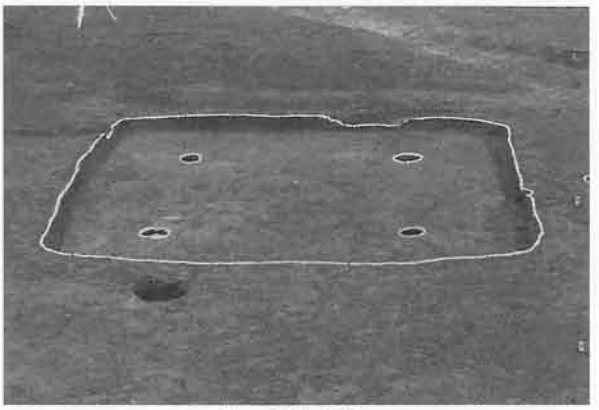


K－1全景（SW）



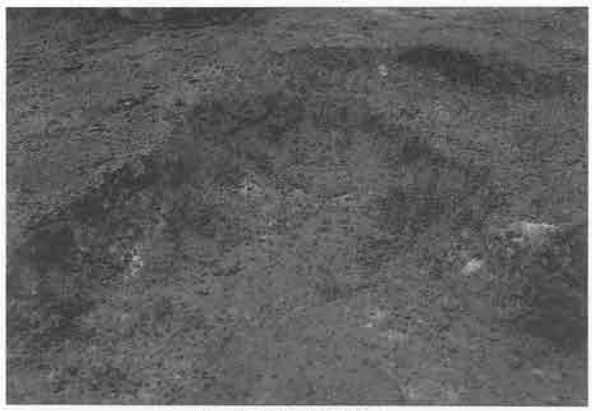
K－2全景（N）

W－5・10～12他全景（W）



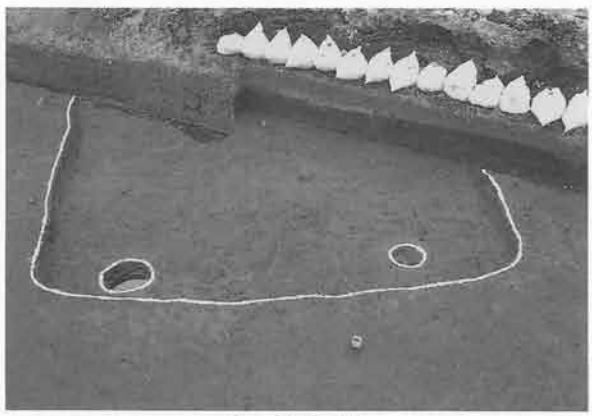
H－5全景（S）

H－6全景（SE）



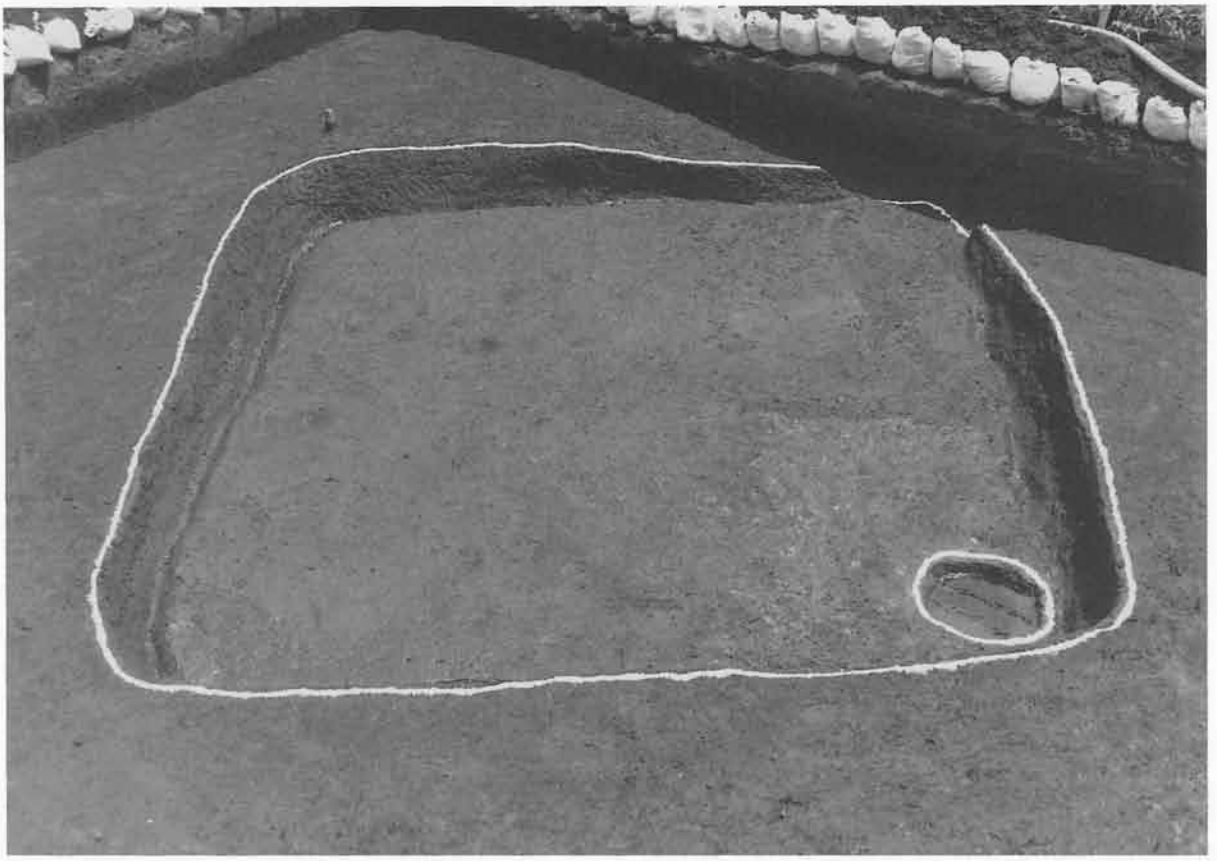
H－6カマド全景（W）

H－6出土遺物（S）

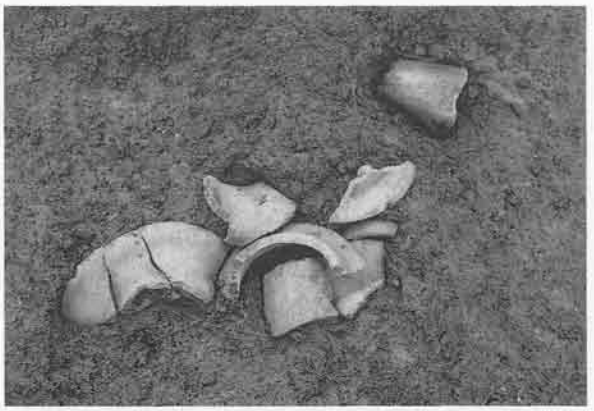


H－8全景（S）

H－8出土遺物（W）



H－7全景（SW）



H－7出土遺物（S）

H－7出土遺物（W）

H－11全景（S）

H－12セクション（S）

G 1 区全景（W）

G 1 区近景（S）

G 1 区畦畔（E）

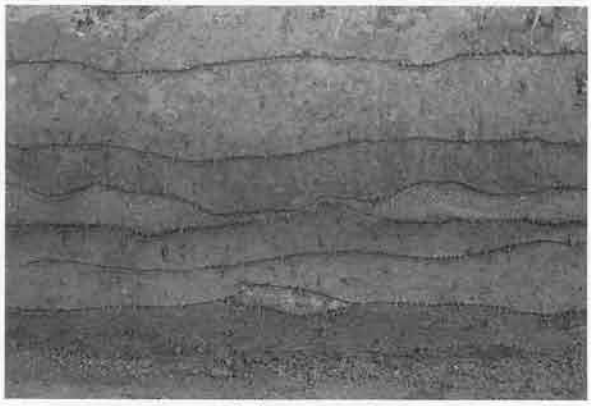
G 1 区畦畔（W）

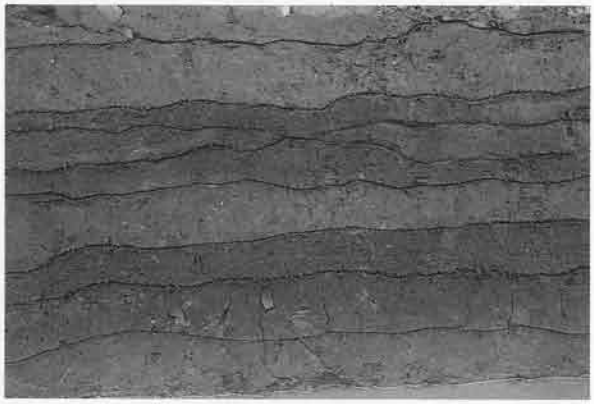
G 1 区畦畔（S）

G 1 区畦畔（N）

G 1 区畦畔（S）

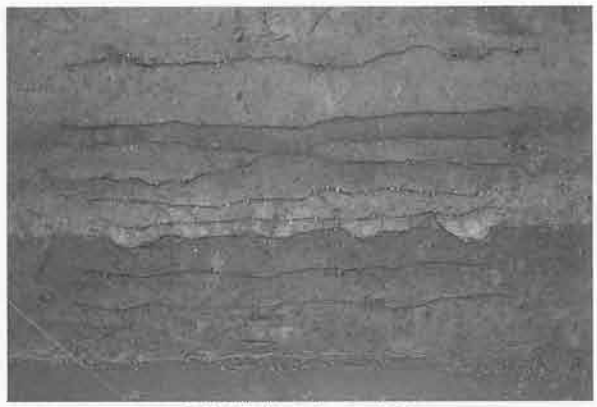
G 1 区畦畔セクション（W）


G 1 区畦畔セクション（N）


G 1 区畦畔セクション（S）

G 2 区全景（NE）

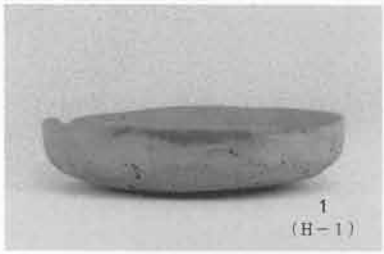
G 2 区畦畔（W）

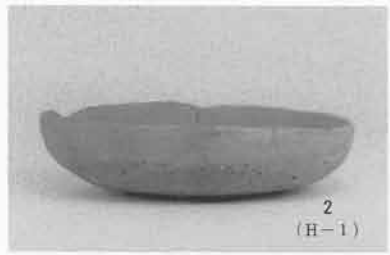


G 2 区畦畔セクション（E）

F－2 全景（E）

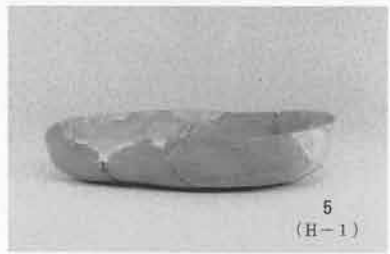
F－3 出土遺物（E）


1
(H－1)

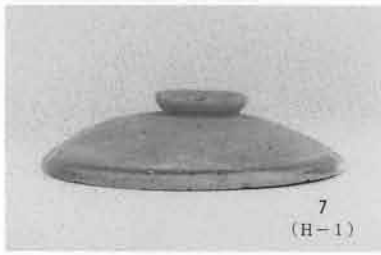

2
(H－1)

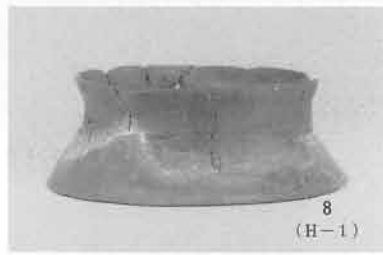
3
(H－1)

4
(H－1)

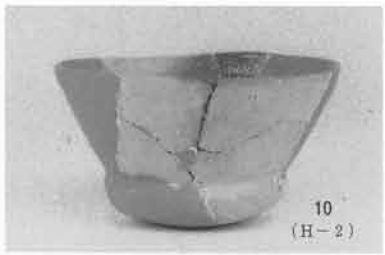

5
(H－1)

6
(H－1)


7
(H－1)


8
(H－1)

9
(H－1)


10
(H－2)

11
(H－3)

12
(H－4)

13
(H－4)

14
(H－6)

17
(H－7)

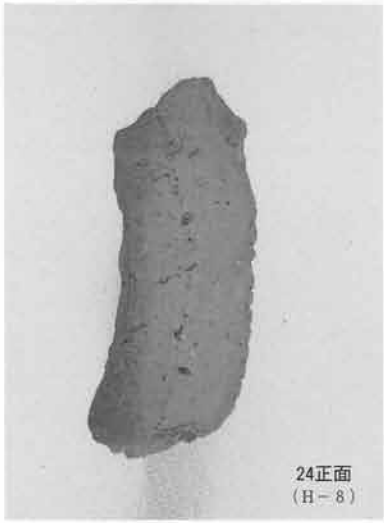
19
(H－8)

20
(H－8)

21
(H－8)

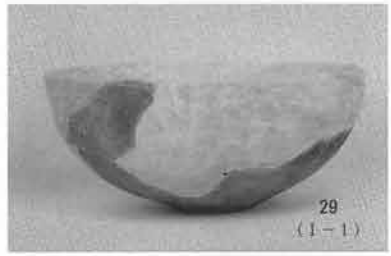
23
(H－8)

28
(I－1)


24正面
(H－8)

24横
(H－8)

27
(I－1)

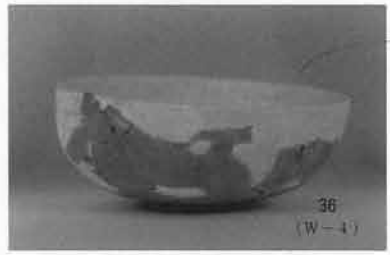

29
(I－1)

30
(W－1)

31
(W－1)

32
(W－2)

34
(W－3)


36
(W－4)

37
(W－5)

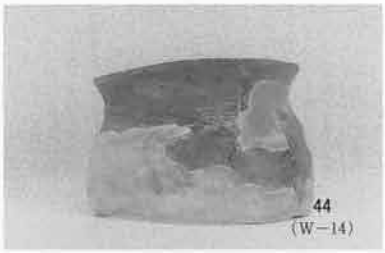
38
(W－5)

39
(W－5)

40
(W－9)

45
(X47・Y21)

46
(X61・Y72)


44
(W−14)

47
(X61・Y72)

48
(X61・Y72)

50
(X66・Y92)

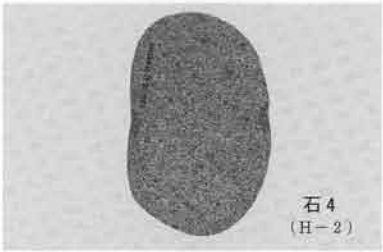
51
(X66・Y93)

49
(X66・Y92)

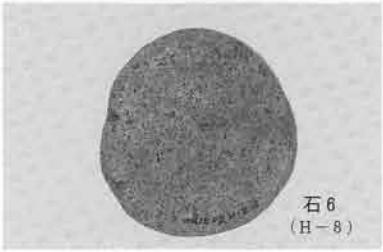
54
(F区覆土)

53
(X80・Y90)

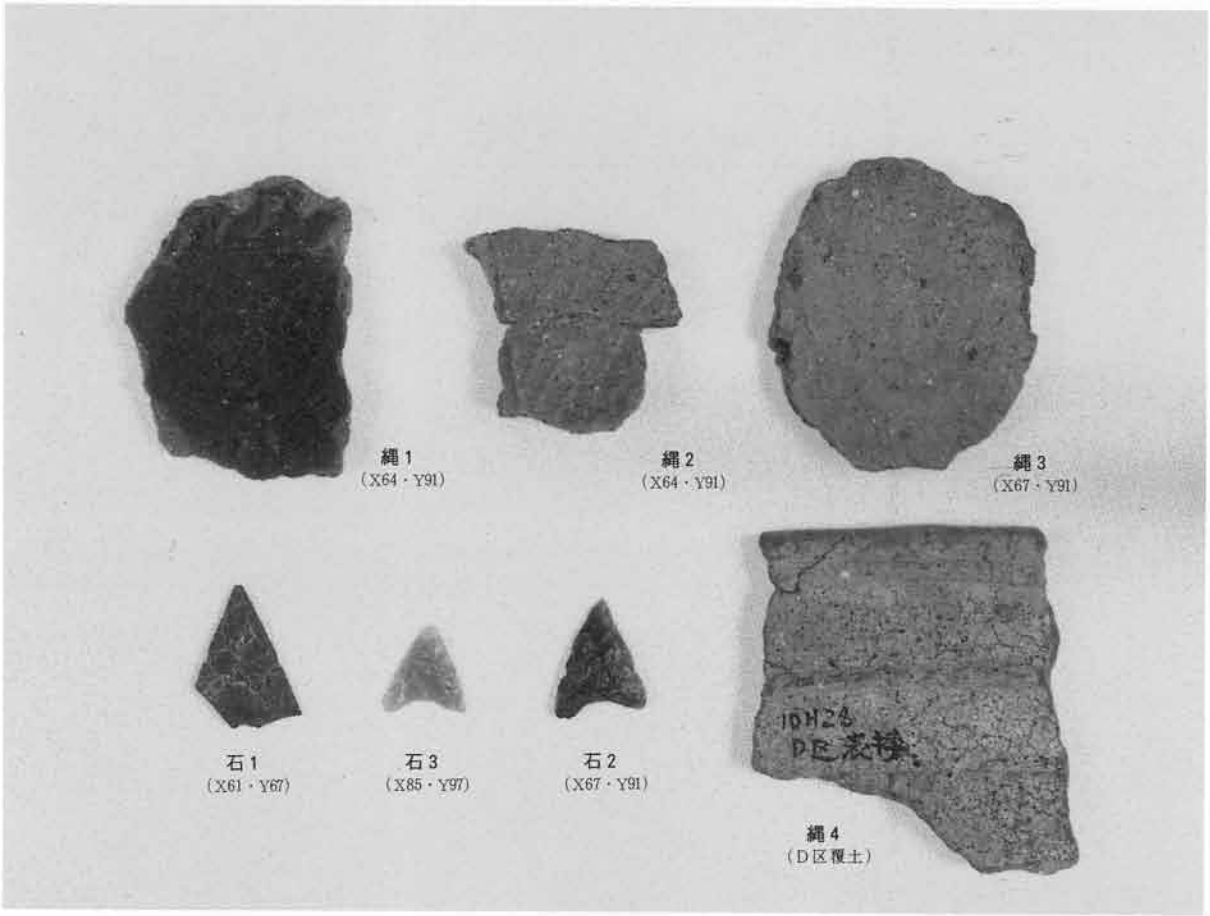
鉄器 1
(H−7)


石 4
(H−2)

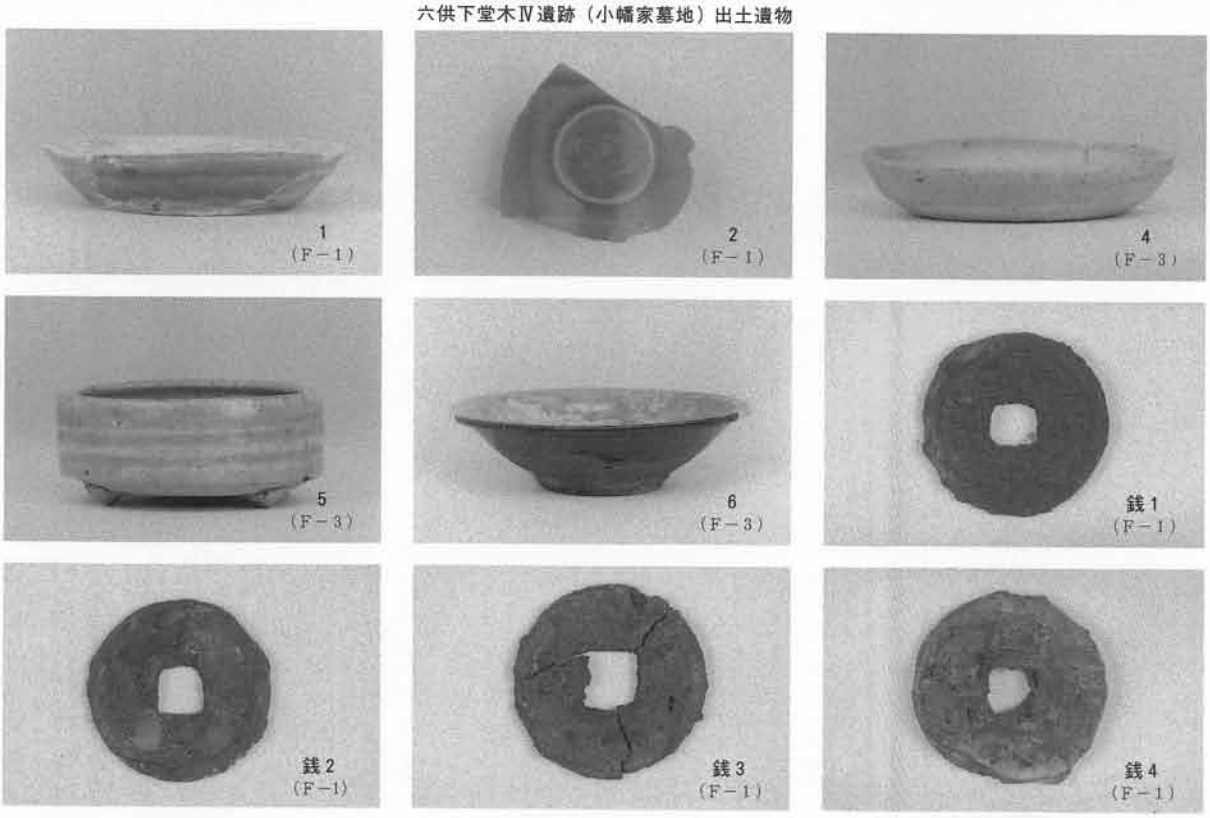
石 5
(H−7)


石 6
(H−8)

石 7
(H−8)




六供下堂木Ⅳ遺跡（小幡家墓地）出土遺物



# 抄　　録

| | |
|---|---|
| フリガナ | ロックヒガシキョウアンジイセキ |
| 書名 | 六供東京安寺遺跡 |
| 副書名 | |
| 巻次 | |
| シリーズ名 | |
| シリーズ番号 | |
| 編著者名 | 吉田　聖二　　高山　剛 |
| 編集機関 | 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 |
| 編集機関所在地 | 〒371-0007　群馬県前橋市上泉町664－4 |
| 発行年月日 | 西暦1999年3月23日 |

| フリガナ<br>所収遺跡名 | フリガナ<br>所在地 | コード | | 位置 | | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 市町村 | 遺跡番号 | 北緯 | 東経 | | | |
| ロックヒガシキョウアンジ<br>六供東京安寺遺跡 | マエバシシロックマチ<br>前橋市六供町 | 10201 | 10H28 | 36°21′59″ | 139°04′49″ | 19980427<br>19981009 | 7,400㎡ | 前橋都市計画事業<br>六供土地区画整理事業 |

| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 |
|---|---|---|---|---|
| 六供東京安寺遺跡 | 集落址<br>水田址 | 古墳時代<br>～奈良・平安時代 | 竪穴住居11軒、掘立柱建物2棟、土坑3基、溝址15条、井戸1基、水田址29枚　他 | 須恵器、土師器（石田川式土器を含む）、石器、 |
| 特記事項 | 本報告書の付編に収録された小幡家墓地発掘調査は、六供土地区画整理事業に際して行われた墓地移転に先立ち、緊急に実施されたものである。遺跡の性質、地理的なことから別の遺跡として扱う事とした。遺跡名称及び番号は「六供下堂木Ⅳ遺跡」（10H29）とした。 | | | |


六供東京安寺遺跡

平成11年3月20日　印刷
平成11年3月23日　発行
編集発行　前橋市埋蔵文化財発掘調査団
前橋市上泉町664－4
TEL　027－231－9531
印刷　株式会社　開文社印刷所

埼玉県出土文化財管理センター
14.6.26
第2311号
収受